

---

# 婚約破棄から始まるけれど、どこまでもやさしい世界

---

倉永さな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

婚約破棄から始まるけれど、どこまでもやさしい世界

### 【Nコード】

N0372DZ

### 【作者名】

倉永さな

### 【あらすじ】

婚約者から来た初めての手紙は、婚約破棄についてだった。

\*一\* 婚約破棄

わたしの手のひらに、一通の封筒がひらりと置かれた。宛先はルベル・ロセウス　わたしの名前　で、封筒を裏返すと、差出人の名が書かれていて……。

「カニス・オース……？」

つてだれだっけ？　とわたしが思っても、だれも責めないはず。だって、見慣れない……いえ、初めて見る名前で、だけど、わたしの記憶の奥底を刺激するもので……。

わたしは自室に向かいながら、一生懸命に記憶を探る。

カニス……カニス……オース？

オース家といえば、わたしの故郷の町の中心地に、大きな屋敷を構える家で……。

「あっ」

とそこで、わたしはようやく、カニスがだれだったか、思い出した。

そうだ、わたしの婚約者……だ。

そう、幼い頃に取り決められていた、たった一度しか顔を合わせることがない、名前だけの婚約者。顔も声も思い出せないほど、うつすらとした記憶しかない相手だ。

思い出した自分を褒めてあげたいくらい、記憶の奥底に沈んでいたものだった。

噂では、カニスは女遊びがひどいと聞いていたけれど、オース家はとうとう腹に据えかねて、わたしとの結婚を進める気になったのだろうか。いやそれなら、父から連絡があるだろうし、そうなれば、オース家の家長からの手紙になるはずだ。となると、この手紙は一体、どういったものなのだろうか。

今までまったく連絡をしてこなかった人物からの手紙に、わたしは戸惑った。

まあ、連絡をしなかったのは、わたしもだから、お互い様と言えばお互い様ではあるけれど、それでも、これは親好を深めるための手紙なのか、はたまた他の理由なのか。

とはいえ、嫌な予感に捕らわれつつ、わたしは早歩きで自室へ入った。

飾り気のない寝台と机、椅子のみのシンプルなわたしの部屋。しっかりと鍵を掛けて、上着も脱がずに椅子に座る。

改めて封筒を見ると、封緘にはオース家の家紋がワックスで留めてあるところを見ると、本物のようだ。封筒に使われている紙も上質だし、それなりに正式な文書である、というのはよく分かった。

引き出しからペーパーナイフを取り出して、意を決して一気に開けた。

切り口からのぞくのは、舞踏会などの招待状と同じ硬めの紙。

これだけ見れば、悪い知らせであることがよく分かった。

どきどきと心臓が逸るけれど、深呼吸をして、封筒の中から紙を引っ張り出した。

真っ白な、紙。

それだけでオース家がそれなりの家であるということが分かる。

それにしても、今まで気がつかなかったというか、他人事として捉えていたから考えたことがなかったんだけど、町外れにひっそりと住むわが家と、オース家が、どうして婚約なんてできたんだろう

か。明らかにうちの方が、立場的には下のような気がするのだけど。まあ、今はいい。

それより、この中にはなにが書かれているのだろうか。よい知らせではないというのは分かったけれど、封緘の色を見ると、茶色のワックスだったから、不幸なお知らせではないというのは分かった。

もう一度、深呼吸をして、えいやつと勢いで手紙を開いた。そこには、あまり綺麗ではない字で、

『この度の婚約はなかったことにしてほしい』

と一言。

そして、最後に、カニスのサインが入っているだけの、大変シンブルかつ意味が分からないもの。

……うん。

なかったことにするのは別にいいのよ？

だってわたし、カニスに特に思い入れがあるわけでも、今の今まで忘れていくくらいの人物だったし、そもそも婚約していたことさえ忘れていくくらいのもだったし。

だけどさ、これ、かなり一方的だし、理由も書かれてないってどうということなの。

しかも、オース家の家長からのもではなく、カニスからつても、納得しかねる。

分かんない、ほんっと意味が分かんない！

婚約しているってことを知っているのは、わが家とオース家だけだから、別になかったことにされても、お貴族さまではないから、実害はたぶんないと思う。

思うけれど、まったく意味が分からなくて、どういふことか手紙

を書こうと引き出しからレターセットを取り出した時点で、ふと気がついたことがあった。

……ちよつと待って。

この手紙が故郷からわたしの元に届いたということは、故郷からこの王都までのルートが封鎖されている訳ではないし、そんな話も聞いたことがない。

それなのに、わたしが頼んでいた荷物が実家から届かない。

いや、頼みもしないのにいつもは届く荷物が届かないから督促したんだけど、それでも届かないって……？

なにかおかしい。

このタイミングで婚約破棄。

届かない荷物。

故郷で……なにか異変が起こっている？

わたしはレターセットとカニスの手紙を一緒に引き出しにしまい込むと、先ほど辞したばかりのラーウス王子の部屋へと直行した。

ラーウス王子の執務室に行くと、王子はまだ仕事をしていた。さすが仕事馬鹿だ。

「失礼いたします」

と部屋に入れば、ラーウス王子は綺麗な灰色の大きな瞳をさらに大きく見開き、わたしを見た。

相変わらず、この部屋は薬草の匂いが立ちこめている。そして、王子からは嗅ぎ慣れた、わたしを魅了する、甘い匂い。ちよつとく

らりとしたけれど、お腹に力を入れて、王子の執務机まで進んだ。  
王子はこの時間になると、ようやく書類仕事に取りかかる。もつと早い時間にしてくれればいいのと思うけれど、そこはしてくれないよりマシだから、うるさく言うのは止めた。

「ルベル？」

「ラーウス王子、少しお時間、いただいてよろしいでしょうか」

この部屋にくる道すがら、わたしは作戦を一つ立てた。たぶんこの作戦は失敗するだろう。それでも挑むのは、待ってられない、その一言だ。失敗したら、そのときはそのときだ。

「ルベルのためならいくらでも」

ラーウス王子はそう甘い言葉を囁くと、羽根ペンを瓶に差し、聞く体勢を取ってくれた。

わたしは深呼吸をして、頭を下げた。

たぶん、王子はすごく驚いた表情をしているだろう。わたしは頭を下げたまま、口を開いた。

「王子、明日から数日、休暇をいただきたいのですが」

「駄目だ」

「……………」

うん、分かっていた。

分かっていたのよ、この仕事馬鹿が休みをくれないってのは。

とはいえ、週に二日は普通に休みがもらえているから、まったくの無休ってわけではないの一言断っておく。

だけど、まとまった休みを欲しいと言っても、王子はいつも首を振る。そのせいで、王子付きとなってからこちら、故郷には帰れて

いない。

「王子、わたしの休暇、たまっていたと思うのですが」

「たまっているね」

「そのお休みを、三日ほど使いたいのですが」

「三日！」

今、王子から任されている仕事は、落ち着いたはずだ。だから明日と明後日は休みになっている。それにプラスして三日くらいなら休めるだろうというもくろみで言ったのだけど、王子は驚いたようにそう言った。

ねえ、王子の職場ってブラックだと思わない？

一応、休みはある。あるけれど、休んでいても王子は部屋に訪ねてきて、しばらく手を握って離してくれないとかったのもあるんですけど。

だからわたしは、休みの日でも、王子に居場所を知らせておかなければならない。

……え、わたしの仕事はなにかって？

それは、こう見えてもわたし、騎士なんですよ。第三王子であるラーウス・アーテル王子直属の騎士なんですけれど、世界がこうも平和だと、騎士として護衛なんてほとんど必要がないため、王子の仕事を手伝っているという、他の騎士が見たら嘆きそうなおことをやっている。

わたしとしては、騎士で護衛といってもすることがないから、暇で仕方がないから、王子の手伝いするのはありがたいんだけど。でも、だからって、片時も離さないというと言いきただけど、それに近い状況は止めて欲しい。



ラーウス王子は何事かを考えていたようだけど、ようやく考えがまとまったのか、口を開いた。

「ルベル、理由は？ 行き先は？」

うん、聞かれますよね、それは。

だからわたしは、あらかじめ用意していた説明をすることにした。

「故郷から届くはずの荷物が届かなくて困っているんです」

「荷物？」

「はい。毎月、決まった日に届く荷物が届かないんです」

「ご実家、忙しいんじゃないの？」

祭りがある時期は、確かにそれなりに忙しいけれど、基本はわが家は暇を持て余しているはずだ。

忙しいといっても、荷物一つを送れないくらい忙しいなんてことは、ない。あつたとしても、絶対にだれかが荷物をなんとかしてでも送ってくれるとわたしは信じている。

それができない、ということは、忙しいという理由ではなく、別の理由で送れないのだ。

なにかが起こっている、としか思えない。

「いえ、忙しくても、荷物が今まで届かなかったことなんてなかったんです」

「忘れているってのは？」

「それもありません」

忘れるなんて、あるわけがない。

だって、その荷物が届かないと、わたしが困るって、家族みんな分かっているから。

それがされないってことは……。

「なにかが起こっている、んだと思うんです」

「それなら、ルベルが一人で行くのは、危ないよ」

「……………」

危ないってなんですか。

わたし、王子付きの騎士なんですけれど。

そりゃあ、一対一だったらたいいの人に勝てる自信はあるけれど、複数人相手となったら、自信はない。でも、そういう類の異変ではないのは分かる。

「危ないと申しますが、わがアーテル国は平和です」

「平和、だねえ」

「早馬で行けば、片道一日の距離です」

「早馬で一日って、相当、遠いんだね」

「……国の端にありますからね」

わたしの住むアーテル国は、南は海に面していて、北には山脈があるという、自然豊かな土地にある。そして、わたしの故郷であるアウリスは、北の山脈地帯に近い地域にある。王都は南の海に近い位置にある。

要するに、国の端から端に移動するということになるのだ。

「ルベルの故郷は、アウリスだっけ？」

「はい」

「ずいぶんと辺境にあるけど、寒くない？」

「ここに比べれば寒いかもですけど、雪も降らないですし、それほど変わりませんよ」

「そっかー。私も一度、アウリスに行ってみたいなあ」

え、ちょっと待って。

この流れ、まずくない？

\*二\* ばれてしまった

とそこで、王子の視線がわたしの顔ではなく、もっと上へ向けられていたことに、今になって気がついた。

え、あ、なんか、ヤバい……！

「そついえば、ルベル」

「……はい」

話に夢中になって気がつかなかったけれど、そついえば部屋に帰ってからわたし、ウイケウスの香りを嗅ぎ忘れていた！

「頭から耳、出てるよ」

「……………」

「ルベル、キミは獣人だったんだね」

マズイ。

ひっじょーにマズイ。

ここまでばれないように慎重に来てたのに！

カニスからの手紙は、わたしにかなりの動揺を与えていたのだと、今になって気がついた。

「そつかー、なるほどねえ」

王子はなにを思ったのか、椅子から立ち上がると、わたしの元へと歩いてやってきた。

逃げるなら今！ と思ったけれど、王子はなにか魔法でも使っているのか、わたしの身体は動かなかった。

いや、王子は魔法は使ってない。使ってないけれど、王子のらんと輝く灰色の瞳と、いつもより甘い、わたしを魅了する匂いのせいで、動けなくなっているということが分かった。

王子はわたしの正面に立つと、頭の上を優しく撫でてきた。ぞくり、と背中になにか衝撃が走った。

「まさかルベルが、獣人だったとは」

「……………お、う、じ」

さわり、さわりと王子は優しい手つきでわたしの頭からによきつと生えてしまった耳を、何度も撫でてきた。

正直そこ、わたしの弱点なんです！ なんて口が裂けても言えなくて、ぞわぞわするのをぎゅっと目を閉じて、必死になって耐えた。そしてようやく、ブレスレットの中に入れたウイケウスの香りを嗅げばいいことに気がつき、必死になって腕を上げた。

鼻腔をくすぐる甘いウイケウスの香り。その香りを嗅いだ途端。

「あー！」

王子の口から非難めいた声が上がったけれど、ようやく撫でられることから逃れることができて、わたしは王子から数歩、離れた。

「ラーウス王子……………」

「ルベル」

王子がわたしの名を呼ぶ声は、ずいぶんと非難めいていた。

それはそうだろう。獣人であることを隠して、王子に仕えてきた

のだから。追い出されても仕方がない。

いや、追い出してくれればいいけれど、獣人の間を巡る噂を思い出し、身体が震えた。

曰く。

貴族の間では、獣人をペットのように鎖に繋いで飼い、社交界に連れて行くのが流行っているそうだ。獣人自体の数が少ないし、人間社会に紛れるときは、ウイケウスを使って人間と変わらない姿を取っているため、よほどのドジを踏まない限り、ばれることはないそれがだ。

故郷から届くはずの荷物が届かないばかりに、わたしはその大切なウイケウスを切らしていた。こうして騙し騙し来ていたのだけでも、カニスの手紙に動揺したわたしは、部屋に帰って匂いを嗅ぐということ忘れて、こうして王子にばれてしまった。

よりによって、王子の前ではれてしまうなんて！

「ルベル」

「あ、あのっ、王子！」

王子はそれはそれは魅力的で今まで見たことがないほどの甘い笑みを浮かべて、わたしを見下ろしていた。

わたしは女性にしては背が高いけれど、それでも、ラーウス王子はわたしよりも身長が高い。並ぶとこうして見下ろされるくらいには、身長差がある。

「ねえ、ルベル」

王子は今まで見たことがないほど、機嫌がよい。

なにこれ。なに、これ。

なにこれ、怖い。

「私は今、いいことを思いついたんだ」

王子の言う“いいこと”は、いつもたいてい、わたしにとって“悪いこと”だ。

今回のことも、絶対に確実に“悪いこと”であることは分かった。

「ルベルは自分が獣人だってこと、ばれたらマズいんだよ、ねえ？」

それはそれはご機嫌に、ラーウス王子は聞いてきた。

ばれたらマズイから、隠していたんじゃないですか！ と言えたらよかったけれど、自分のこれからの境遇を思うと、聞かれるまでもなく、はい、ではあるんだけど、はい、とも、いいえ、とも答えられない。王子がどう出てくるのか分からなかったからだ。

無言でいるわたしをどう思ったのか、王子は綺麗な顔に魅惑的な笑みを浮かべ、口を開いた。

「ねえ、ルベル。私と契約をしないかい」

「……契約、ですか」

なんでいきなり契約の話が出てくるのだろうか。意味が分からなくて首を傾げていると、王子は続けた。

「ルベルは私にお見合い話がたくさん来ていて、辟易しているのを知っているよね」

「……はい」

「今ね、そのお断りの手紙をずっと書いていたんだ」  
「……」

王子、ろくに見ずに断っているでしょう！

わたしは王子の騎士であると同時に、仕事も手伝っているという立場にあるため、王子に届く書類には一度、目を通していい。だからもちろん、お見合いの書類も一通り、見ている。

国内だけではなく、国外からも、第三王子という身分もあるけれど、さらには見目麗しい上に魔術の腕もよく、国の最上位魔術師の一人でもある王子の元には毎日、お見合いの申し込みがたくさん舞い込んでくる。もちろん、王子の元に届く前に王が厳選した上でだけど、王子はろくに見もせず、すべて断っているのだ。

女の私が見ても、それはもう、王子と並べば見栄えするであろうお嬢さんたち　もちろん、身分も相応な　から届くのに、それさえ見もせずに断っている。いえ、もちろん、見た目と身分だけではないのは分かっているけれど、それでも、これだけよりどりみどりののに、どうして王子は断っているのかと前に聞いたら、今は仕事が面白いからだなんて、とんでもない回答が返ってきたのを思いだした。結婚しても仕事はできるじゃないの、と思っただけれど、そういうものではないらしい。

「それでね、今、思いついたんだけど」  
「……………」

ロクでもないことに違いない、というのは、ラーウス王子の表情で分かったけれど、なにを言おうとしているのかまでは分からなかった。

「ルベル、私と結婚しないかい」  
「……………はいっ？」

王子相手に思わずそんな返事をしたって、仕方がないと思う。だって、いきなり前置きもなく、結婚しないか、ですよ？　いきなりすぎませんか。



「私はルベルの秘密を知ってしまった」

「……………」

「ルベル、私がキミの秘密をだれかに喋ったら、困る、よねえ？」

「……………」

困るところか、一刻も早くここから逃走して、故郷に帰らなければならなくなってしまう。

とはいえ、王子は故郷の場所を知っているため、逃げたって時間稼ぎにしなければならないわけだけだ。

「どこかに獣人が住む町があると聞いていたけれど、まさかアウリスだったとはねえ？」

マズイ。ひつじょーにマズイ（二回目）。

王子が言うように、アウリスに住む人たちはほぼ全員が獣人である。中には人間もいるけれど、相当な物好きか、獣人の伴侶だ。

そして、町に住む獣人の種類も、様々だ。

わたしのように犬の獣人もいれば、鳥や猿、猫などといった様々な種族がいる。

基本は同じ種族同士が結婚するけれど、人間や別の種族の者で結婚するということもある。

ちなみに、元婚約者のカニスは、わたしと同じ犬の獣人である。

わたしの両親も犬の獣人であるけれど、何代か前に人間と結婚していた先祖がいるとは聞いたことがある。

だから人間と結婚すること自体は別に問題はない。

ないのだけれど……………。

「あの……………」

「なんだい？」

「結婚はその……」

「無理とでもいうのかい？ ああ、そういえば、キミには婚約者がいたんだっけ」

「……………」

その婚約者から婚約はなかったことにしてほしいという手紙が発端で今回の件につながったわけだけれど、これはいい断り文句になるのではないかと思い、黙っていることにした。

「実はね、ルベル」

ラーウス王子は今度は人の悪い笑みを浮かべ、わたしを見た。

この人、やるのが結構、えげつないのよねえ。根回しも周到だし！

「少し前から、キミのお父上と文通をしているんだ」

そう言って、王子は机に戻ると、手紙の束を棚から出してきた。薄青い、見覚えがあるけれど、この部屋では見たことのない封筒の山。

たいていの書類はわたしの目を通して王子に手渡されるけれど、さすがに王子に直接宛てられた手紙はわたしの手を通らないため、そんなことをしていたことを知らなかったし、父からも知らされていなかった。

「ルベルのお父上は、素敵な人だね」

「あ、ありがとうございます」

この状況下で、素直にお礼を言えた自分を褒めたい！

「これでね、キミとカニスという青年と婚約をしていることを知っ  
たんだ」

先ほど見た封筒を思い出す。

カニス・オース。

オース家の次男坊で、女癖の悪いと噂のある、わたしの婚約者だ。  
婚約した経緯をそういえば聞いていないけれど、ちょうど年齢が釣  
り合う犬の獣人が他にいなかったから、というだけの話のような気  
がしないでもない。

「ずいぶんとキミは、評判の悪い男と婚約をさせられていたんだね。  
といつても、まだ表立ってなかったのが幸いだね」

「……………」

幼い頃に口約束みたいな婚約でしかなかったけれど、それでも、  
どうやらまだ有効だったようだ、と知ったのは、先ほどの手紙でだ。  
婚約者がいたこともすっかり忘れていたし、わたしも王子ほど仕  
事馬鹿ではないけれど、王子のせいで仕事馬鹿状態で、王子のお見  
合い写真を見ていたにも関わらず、自分の結婚なんて、考えたこと  
がなかった。

\*三\* 強制的に結婚することになりました

王子はそれはそれは機嫌よく、にこにここと笑みを浮かべて続けてくれた。

「私はね、ルベル」

「……………」

「私の仕事をきちんと理解してくれる人と、結婚したいと思っていたんだ」

「……………」

「それにね、ルベル。私はキミのこと、これでも気に入っているんだよ」

人嫌いと噂のある王子だけど、最初からわたしにはやさしかった。だからそんな噂は嘘だと思っていたけれど、でも、しばらくの間、見ていたら、王子は人によって、態度を変えることがすぐに分かった。

嫌いな相手には、嫌いという態度を表に出し、どうでもいい相手には、どうでもいい対応を。少し好意を持っている相手でも、素っ気ない。

それでも、王子は最初から、わたしにはやさしかった。

それはきつと、王子の護衛騎士という役目で、わたしが女だから手加減してくれているのだとばかり思っていた。

それが今の、気に入っている、の一言だ。

これは驚きではないだろうか。

「キミは、私のことを、とても理解してくれている。仕事も手伝ってくれる。歳が少し離れているけれど、そんなのは些末なことだ。キミ以上に魅力的で条件のよい相手なんて、いるわけがないんだよ！」

と王子は力説するけれど、そんなことはない。

わたしは王子の護衛騎士であり、ついでに仕事を手伝っているという身分であり、王子と結婚するにはとてもではないけれど、身分差がありすぎる。

「王子、大変ありがたいお言葉ばかりですが」

「が、なんだ」

「王子とわたしでは、身分があまりにも違いすぎます」

そう言えば、王子はそれはそれは楽しそうに笑ってくれた。

うーん、王子のこの笑顔、好きなんだよなあ。

王子が結婚しても、わたしはここで変わらずこの笑顔を見ることが出来るだろうと思っていたから、早いところ身を固めてくれれば、毎日毎日やってくる見たくないお見合いの書類を見なくて済むようになる、このときまでは思っていた。

「あれ、ルベル、キミは知らなかったのかい」

「知らないとは、なにを、ですか……？」

知らないことは多いけれど、なにを知らないと言っただろうか。

「キミの家、侯爵家だって、知らなかったの？」

「……へっ？」

思わず、間抜けな返事をしたことを許してほしい。

だって、町の隅でオース家よりも小さな家に住んでいるわが家が、侯爵家だなんて、なんの冗談だろうか。オース家が侯爵家と言われたら納得だけど、それはあり得ないのではないだろうか。

「そんな話、聞いたことがありません」

「あー、そんな気がしてたんだよね」

「……………」

「そもそも、私の騎士になれるというのは、腕もだけど、身分も関係があるって、知ってた？」

「もちろん、存じております」

ようやく、普段どおりに接することができるようになってきた。

それだけシヨックが大きかったのか、婚約破棄。

王子の側近ともなる騎士であるから、腕はもちろん、身分も保証されていないとなれないってのは知っていたけれど、わたしはつきり、第二王子に鍛えられて、耐え抜けたからだばかり思っていた。

まさかのまさか、わが家が侯爵家だったというのも関係があったとは。

「まあ、キミの家が侯爵家じゃなくても、私はキミを起用していたけれどね」

と意味深なことをいう王子に、わたしはどういう顔をすればいいのでしょうか。

「キミのお父上からも了承を得ているし、私の両親もルベルのことを気に入ってくれているし、この結婚には賛成してくれている」

「……………」

ちよつと待つて。

王子が用意周到で、悪巧みをする人つてのは嫌つてほど知つてい  
るけれど、今回のこれ、一番、最悪なのではないでしょうか。

うちの父の了承を取っているのもどういふことよつて感じだし、  
それよりなにより！ どうして王と王妃にすでに話しているわけ  
ですか！ それなのにどーしてお見合い話が未だに來ているのですか！

「ルベル、キミは気がついてないかもしれないけれど、私のお見合  
いの書類を見ているとき、いつも不機嫌な顔をしているんだよ。て  
つきり嫉妬してくれていると思つていたんだけど、違つていたの？」

え、わたし、そんなに不機嫌な顔をしていましたか？

思わず、ぺちぺちと自分の頬を押さえれば、王子は面白そうに笑  
つてくれた。

「ルベルも好意を抱いてくれていると思つていたんだけど、それは  
私の勘違いだったのかな？」

そう言つて、王子は今まで見たことがないほど甘い笑みを浮かべ、  
わたしの頬に手のひらを当ててきた。

王子は緊張しているのか、少ししつとりした手のひらだった。し  
かもいつもより熱くて、思わず王子の調子がよろしくないのかと心  
配して顔を上げれば、幸せそうに目を細められた。

王子のこんな表情、初めて見る。

うわぁ、珍しいものが見られたー！ なんて余裕はまったくなく  
て、あまりの恥ずかしさに視線を逸らしたいのに、頬に手のひらを  
当てられているせいで、顔を動かすことができなかつた。

灰色の瞳が、真つ直ぐにわたしを見ている。王子の表情はとても  
切なそうで、それでいて幸せそうだった。この表情はわたしが休日  
の日に王子が訪れた時に見せる表情と一緒に……。その意味すると

ころをようやく理解したわたしは、耳まで熱くなってきた。

もしかして王子、前からわたしのこと……？

いやいや、それはあり得ないわ。だって今回の求婚、わたしの秘密をばらさない代わりに、お見合い話を断るための手段でしかないのだから。たまたま王子の都合がいい相手がわたしであって、わたしのことが好き、なんてことはないのよ。

「ねえ、ルベル？ 答えて？ 私と結婚、してくれるかい？」

王子はとても必死な表情をして、わたしの顔を見つめていた。

わたしは赤い顔のまま王子の顔をじつと見て、考えた。

これは、契約。

王子はお見合い話を断るのに疲れている。お見合い話来ないようにするには、結婚するしかない。

そして、王子が言うには、わたしは大変、都合がよいらしい。

わたしはというと、結婚に特に夢を見ているわけでもなく、自分がすると思っていなかったし、なによりも、つい先ほど、婚約を破棄された身。

しかもわたしは、王子に弱みを握られている。

ここで承諾しなければ、わたしは獣人であるということがばれて、貴族に捕まえられて、鎖に繋がれて見世物になるだけ。

返事は一つしかない。

わたし、王子のこと、嫌いではない。いや、むしろ、好きだ。

この独特の甘ったるい匂いも、王子がまとう雰囲気も、そしてなにより、わたしは王子の笑顔が好きだ。

これがわたし一人のものになるなんて考えたことがないし、なんて贅沢なことだろうと思うけれど、うなずくことしかできない状況



だった。

だからわたしは、小さくうなずいた。

それを見た王子は、本当に本当に幸せそうに笑った。

うわあ、王子のこんな顔、初めて見た！

今日は王子の初めてをたくさん見たような気がする。

「ルベル、嬉しいよ。それでは、今から結婚をしようか」

「……えっ」

「今日は幸いなことに、神殿の夜番はルークスなんだ」

ルークスというのは、王子の幼なじみであり、国の最高位の神官であるルークス・フィデースさまのことだ。王子の遣いで頻繁に目にかかっている人でもある。

「ルークスさまがですか？」

夜番というのは、もっと位の低い神官がするものだと思っていたので、驚いて目を見開けば、王子は小さく笑った。

「あいつは光の神官のくせに、夜が好きなんだよ。だから自ら夜番を買って出ているようだ」

「そうなんですか」

「夜の方が女神のお力が強くなるからね」

「……そういえば」

「うん」

「わがアーテル国は安らぎの夜の女神であるピウスさまを奉じているのに、ルークスさまは光の神官ですよね」

「ああ。闇ができるのは、光があるからだ。光がなければ、闇はできない」

「……でも、夜には光はありません」

思わず反論してしまったけれど、王子は特に顔色を変えることなく、それよりも嬉しそうに口を開いた。

「そう、夜は光がない。しかし、夜が夜たるのは、朝と昼があるからだ。それらがなければ、ただの闇の世界だ」

「夜が夜であるために、光がある……」

「そういうことだ」

少し不思議に思ったけれど、確かに光がなければ、夜はただの闇の世界だ。

今だつてこの部屋を柔らかく照らしているのは、王子の魔力で灯されている魔法灯だ。これは火魔法ではなく、光魔法だと前に王子から説明があった。

さすが国の最高位の魔法使い。どの属性の魔法も使えるなんて、すごいぞ。

わたしはそんなすごい人と結婚することになってしまったのか、と改めて考えて、あまりの怖れおおさに今さらながら、怖じ気づいてきた。

「あの、王子」

「うん？」

「結婚相手、本当にわたしでいいんですか？」

思わずそう聞いてしまった。

すると王子は、困ったように眉尻を下げ、わたしの顔を見た。

「私では不満かい？」

「いえっ、違います！　王子にはもっとわたしよりふさわしい方が

いるのではと思ったので……」

そう言えば、王子はまた、困ったような笑みを浮かべた。

「私はルベルがいいんだよ。ルベルは私では駄目なのかい？」

そう聞かれれば、どう答えればいいのだろうか。

わたしも、王子のことは好きだ。

……とそこで、ようやくわたしは自分の気持ちに気がついた。

わたしは、王子のことが、好きだ。

王子のまとう雰囲気も、独特の甘い匂いも、そして、なによりも好きなのは、王子の笑顔。あとは灰色の長い髪を一つに結んでいる髪が動く度にゆらゆらと揺れるのを見ているのも好きだ。

「あの……わたしも、王子のこと、好き、です」

そう答えれば、王子は見たことがないほど真っ赤になって、嬉しそうに笑ってくれた。

そのはにかんだ笑みも、初めて見るもので……。

わたしも一緒に、赤くなった。

\* 四 \* 結婚の許可

わたしは念のためにもう一度、ウイケウスの花の香りを嗅いだ。準備が整ったところで、王子はわたしの手をとると、そのまま部屋を出た。部屋を出たということは、今からどこかに行くのだろうか。

「あの、王子。今からどちらに？」

「ああ。何事も早い方がいいからね。今から父と母に結婚の報告と許可をいただいて、ルークスにお願ひして結婚をしよう」

「えっ？」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「今から結婚ってなんですか！」

「あのっ！ いくらなんでも早急過ぎませんかっ？」

「早くないよ。遅いくらいだ」

「え……」

「私はずっとずーっとこの日を待っていたんだ」

「ずっと待っていた？」

「それ、どういうことですか？」

「待っていたって……？」

「ルベル、私はキミのことが気に入ってるんだよ」

先ほども言われたけれど、王子の“気に入っている”というのは

どういう意味なのだろうか。

「ルベルは私の仕事を理解してくれている。そしてなにより、ルベルといると心地がよい。それはとても重要なことだと思わないかい？」

王子はそう思っていてくれたのか、と初めて知り、またもや恥ずかしくなってきた。

先ほどからわたしはずっと赤い顔のままだ。髪の毛も瞳も赤いから、赤い獣みたいな感じになって、かなり恥ずかしい。

「式は改めてするとして、結婚の宣誓は今日のうちにやっけてしまおう」

あまりの性急さにあわあわしているうちに、王子に連れられて、王と王妃の私室へと着いてしまった。今さらながら、王子の手を振り切って逃げることはできない。

だってわたしも、王子のことを“気に入って”いるのだから。

「ラーウスです。失礼いたします」

室内からの誰何すいかの声に、王子は名乗って、扉を開けた。

王の執務室には何度か入ったことがあるけれど、当たり前前だけどこここに入るのは初めてだ。

王と王妃はソファに隣り合って座り、何事か談笑していたようだった。

「どうした、ラーウス。……おや、ルベルと一緒にということは」

「あらあら、まあまあ！　とうとうあなた、求婚したのね！」

「ほほう。ようやくか」

王と王妃のやさしい笑みに、わたしは臣下の礼を取るのも忘れて、真っ赤になってしまった。しかし、隣で手を握ったまま頭を下げているラーウス王子の姿が視界の端に映ったところで、わたしの脳みそが理解するより早く、反射的に王子に手を握られたまま、膝を折り、頭を下げた。

すごいよ、わたし、よくやった！

「父上、母上」

ラーウス王子は頭を下げたまま、口を開いた。

「私、ラーウス・アーテルは、本日、ルベル・ロセウスに求婚して、許可をいただきました」

「まあ！ おめでとう、ラーウス！」

「おお、めでたいことだ、ラーウス」

「そこで、父上、母上。改めて、結婚の許可をいただきたく、こんな夜分にも関わらず、お願いにありがとうございました」

「うむ。すぐに書こう」

王はそういうとソファから立ち上がり、椅子に座り、なにかの紙にサインと押印をしていた。

ちらりと見えた紙は、特徴的な黒い紙。あれってたまに見かける、結婚の許可証……？

まさかだけど、前々から用意されていたの？

なにこれ、怖い。

確か、結婚の許可証って、双方の親、あるいは親族、またはそれに代わる人が専用の白いインクを使ったサインと押印をしていないと効力を発揮しないものだったはず、だけど……？

そのことを聞きたいけれど、ここは王子の部屋ではなく、王と王妃の部屋。臣下のわたしは許可がなければ口を開くことも許されない。

部屋を出たら後で王子に聞いてみよう。

そう心に決めて、成り行きをただ見守ることしかできなかった。

「うむ。これでよし」

王は満足げにうなずくと、結婚の許可証を持って戻ってきた。

「これで宣誓をすれば、二人の結婚は成立する」

「ありがとうございます！」

わたしもお礼を言いたいけれど、発言の許可は得ていない。だからさらに頭を下げ、お礼とした。

「あら、あなた。ルベルはもう家族同然ですわよ。あなたがそれをルベルに言わないと、かわいいルベルとおしゃべりすることはできなくなつてよ」

「おお、そうだった。ルベルよ、おまえはもう、わたらの家族だ。臣下ではなく、家族だ。いつでも好きなときに話しかけてくるがよい」

その一言に、わたしはようやく発言の許可を得たと知り。しかも家族だなんて言うてくれた！、頭を下げたまま、口を開いた。

「ありがとうございます」

「ルベル、お願いだから、そんなにかしこまらないで。あなたはあたくしの娘になったのよ？」

え、……ああ、そうか。

王子と結婚するということは、王と王妃が義両親になるといこととで……。

あまりのすごさになんだかもう、なにがなんだか分からなくなっただけれど、王子が無言で腕を引つ張って来たので、わたしはそれに合わせて立ち上がった。

「おめでとう、ルベル。今度、二人でお茶をしましょうね」

「王妃さま、そんな、恐れ多い」

「あらまあ、娘とお茶をすることが、そんなにいけないことかしら？」

「え……いえ。その」

「母上、いきなりそれではルベルも困るでしょう。ルベル、母上の淹れるお茶はとても美味しいから、今度、天気の良い日にも一緒にお茶をしてあげてくれないか」

「もったいないくらいのお言葉です。ありがたくお受けいたします」

そう答えれば、王妃はとても嬉しそうに笑った。

それを見て、ラーウス王子は王妃似なのだ、と初めて知った。

王子は王から結婚の許可証を受け取ると、大切そうに丸めて、部屋を辞した。

「これから、神殿に向かう」

「はい」

「それにしても、いいタイミングで婚約が破棄された」

にこにここと機嫌のいい笑みを浮かべている王子のその言葉に、わ



たしは思わず目を見開いた。

そういえば、わたし、王子にその話、していない！

それなのにどうして王子は知っているのっ？

「あの、王子？」

「うん」

「どうして婚約を破棄されたことを……」

「ああ。キミのお父上に結婚の許可証を送ったんだけど、なかなか返ってこなくてね。だけど、昨日かな、一昨日かな。ようやく、これが戻ってきて、サインと押印がされていたんだ。それと、手紙がついていてね」

父からの手紙……？

ということは、父とは連絡がついている、ということか。

やはり届かない荷物がどうしてなのか、気になってしまう。

「ルベルとカニス青年との婚約は解消された、と書かれていたんだよ」

「……………」

「理由は分からないけれど、これで晴れてキミは自由の身になったんだ。だから嬉しくて、どうやってキミに求婚しようかと悩んでいたんだよね」

それでここ数日、王子はずっと難しい顔をしていたのか、と分かったけれど、その理由が自分のことだったと知り、かなり恥ずかしかった。

今日は恥ずかしい気持ちをいっぱい感じるが多かった。恥ずかしく過ぎて、ずっと顔が赤いままだ。

「それにしても、今日はルベルのかわいい顔をたくさん見られたな」  
「なっ、王子っ！」

手をつながれたまま、そんなことを言われれば、とにかくもう、  
恥ずかしくて、恥ずかしくて。

穴があつたら入りたいと思つたくらい、恥ずかしかった。

夜になると、安らぎの夜の女神であるピウスさまの活動時間となるため、この国では、夜にはあまり外を出歩かない。城下町はまた話が違っているみたいだけど、昼間はあれほど行き来のある城内の廊下も、神殿へと向かう道も、ほとんど人がいない。

そのおかげで、この赤い顔をあまり人に見せることなく、神殿にたどり着くことができた。

安らぎの夜の女神を祀っているこの神殿は、黒曜石でできているため、全体的に黒い。異様ともとれる見た目だけでも、繊細な彫刻が施されているからなのか、そこまで圧迫感はない。それはきつと、ピウスさまのお人柄 いや、お神柄と言うべきか もあるのかもしれない。

王子に連れられて、神殿に入ると、中も黒いけれど、ほんのりと白い灯りがともされていて、幻想的な世界が広がっていた。

昼間に来ることがあつたけれど、夜の神殿は神秘的で、美しかった。ここはやはり、安らぎの夜の女神の御許であるということが分かった。

かつん……かつん……と靴音が響く中、わたしと王子は手をつないで、ピウスさまの像がある正面へと向かっていると、奥からだれかが出てきた。

視線を向けると、やさしい笑みを浮かべた、ルークスさまだった。

「ようやく来たのか」  
「ああ」

ルークスさまとラーウス王子は幼なじみで、未だにとっても仲がよい。

普段のルークスさまはとても低姿勢で、とても国の最高位の神官とは思えないくらいやわらかい態度を示す。

しかし、それが表向きの態度であったと知ったのは、ラーウス王子と一緒にここを訪れることがあったときだった。

ルークスさまとラーウス王子はぼんぼんと気安い応酬を始めて、驚いたことを昨日のことのように思い出した。

「ここに二人で来たということは」

「ああ、ようやく結婚証を手に入れた」

「……そうか。ところでルベル、あなたはこんな男と結婚しようとしているけれど、いいのですか？」

その一言に、わたしは驚き、目を見開いた。

国の最高位の魔法使いであり、第三王子であり、人嫌いなところはあるけれど、最初からわたしにやさしかった王子と結婚することに対して、どこに不満があるのだろうか。不満どころか、むしろ、わたしで本当にいいのだろうかという思いの方が強い。

だからわたしは首を振り、答えた。

「ラーウス王子はわたしにはもったいないくらいのお方です」

「……だとよ、王子」

「むしろ、ルベルしかないんだよ」

王子を見上げれば、やさしい笑みを浮かべた王子がわたしをじっと見つめていた。

「はい、熱い、熱い。ここ、南国だったかなあー」

というルークスさまの声に、ハツとして、慌ててラーウス王子から視線を外した。

「はいはい、両想い、両想い」

「分かってくれたのなら、結婚の宣誓をさせてくれないか」

「かしこまりました、ラーウス王子」

ルークスさまはラーウス王子から結婚証を受け取ると、祭壇の前に立ち、掲げた。

「安らぎの女神ピウスさまより命を授かった二人が、結婚の許可を求めに来たれり」

ルークスさまのよく通る声が神殿中に響いたと同時に、結婚証がふわりと浮き上がった。

王子の側に仕えているため、魔法は見慣れているけれど、やはりそれは不思議な光景だった。

「二人の結婚を、許可していただきたい」

ルークスさまの声に呼応して、結婚証の真ん中から黒い光がにじみ出てきて、ペリペリっと音を立てて、二枚に分裂した。

え、これって許可されなかったってこと……？

慌ててラーウス王子を見ると、満足げに笑みを浮かべていた。

なにこれ、どういうことですか。

王子、わたしに求婚して、わたしの父と王にサインと押印までしてもらったのよね？ それが駄目だったのかもしいのに、なん

でそんな表情で見つめているの？

わたしは泣きそうになりながら視線を戻すと、それは宙でくると周りながら、丸まっていった。そうして細長くなったところで、二つの輪リングになった。

ルークスさまがそれに手を伸ばせば、すんと手の中におさまった。

「ピウスさまは二人の結婚を許してくださいました。これをお互いの指にはめれば、結婚となる」

ルークスさまはわたしたち二人の元へ来て、手のひらにおさまった二つのリングを見せてきた。

ピウスさまの色である、黒でできた、輝きのあるリング。

この国では、結婚した者はみな、この黒いリングを付けているけれど、こうやって作られたものだと初めて知った。

「先ほども見たように、結婚証が二つに分かれ、このようにリングになる。これが夫婦の証となる」

「初めて知りました」

「あなたのご両親も、王と王妃もされているでしょう」

「それは存じていますが……どうやって作られたのか、初めて見ました」

王子はわたしの言葉に、納得したのか、うなずいていた。

「そうだったのか。それならびっくりしても仕方がないか」

先ほどの絶望的な顔を見られていないかと思ったけれど、しっかり見られていたようだ。

「私との結婚が駄目になったのかと思ってショックを受けたのも見られたことだし、今日はいいことばかりだ」

その一言に、王子の少し意地悪なところを見て、ちょっとだけむくれてみせた。

\*五\* 結婚しましたが、日常は変わりありません

ラーウス王子と指輪をそれぞれすることになったのだけど、どう見てもこれ、わたしの指にも王子の指にも大きすぎると思うのですけど。

「ただ、周囲の指輪をしている人のことを思い出してみると、みんなの指にはまっている指輪はどれもぴったりで……。」

「やっぱりこれ、失敗なのかしら？」

そんなことを思いながら、まずは王子の指にわたしから指輪をはめると、それは不思議なことに、ぴったりになった。えー、すごい！

次に王子はわたしの手を取り、左の薬指にするりと指輪を通した。すると、しゅるんと縮まり、ぴったりのサイズになった。

あまりのことに指輪をされた側の左薬指をまじまじと見つめてみると、隣の王子がくすりと笑った。

「ルベルを見ていると、いつも新鮮でいいな」

「そうですね、とても素直ですし、何事にも驚いてくれて、見ていると楽しいです」

「おまえが褒めるなんて、珍しいものだな」

「ええ、俺もルベルのことは“気に入って”いるからな」

「やらん。ルベルはもう私のものだ。おまえの元の遣いも別の者にしよう」

「それは止めてほしい。ルベルと話すのはとても楽しいのに！」

「……おまえ、私からルベルを盗ったり」

「するわけがないでしょう！ なにを言っている。俺はピウスさまのモノ。生涯、ピウスさまにずっと仕えると宣誓した身。そんなこ

とをするわけがない」

「……それなら、いいんだが」

じとつとした目でルークスさまを見るラーウス王子が信じられなくて、目を丸くしていると、二人は同時に笑った。

「もう、わたしでからかうのは、止めてください!」

「いや、ルベルがあまりにもかわいいから」

「かわいくともなんでもないですっ」

思わず感情を表して、ムツとした表情を浮かべると、王子が慌てるのだから面白い。

「いや、済まなかった。あまりにもかわいくて、つい」

「もうっ、止めてくださいって」

「分かった、もうしないから」

そう言いつつ、王子はルークスさまと一緒にくすくす笑っている。これはまた、同じようなことをされるに違いない。もうっ、ほんつとーに失礼しちゃうわ。

「ラーウス、もう時間も遅い。そろそろ部屋に帰れ」

「ああ、そうだな。ルベル、帰ろっ」

「はい」

ルークスさまのその声に、わたしたちはまた来たときと同じように手をつないで、いったん、王子の部屋へと戻った。

「さて、ルベル。夜は遅いが、今後のことについて少し話をしたい」

「はい」



王子に導かれて、わたしたちは並んでソファに座った。いつもなら斜め前に座るのに、今日は驚いたことに隣り合わせだ。その意味することに、わたしの頬は自然と赤くなる。

「ルベル、私と結婚してくれて、ありがとうございます」

王子はそういうと、わたしの左手を取り、指輪を撫でた。ぞくりとしたなにかが背中を駆け上がり、思わず身を縮める。

「あの……わたしこそ、ありがとうございます」

そう言っつて王子に身体を向ければ、やさしい笑みを浮かべた王子がそこにいた。

わたしの好きな、王子の笑み。

それはそれは幸せそうで、わたしも自然に笑みを浮かべていた。

「ルベルはわたしの妻になったわけだけれども」

「は、はいっ」

「明日と明後日は休みだからともかくとして、休み明けからは、前と変わらず私の仕事を手伝ってほしい」

「はい！」

そう、実はそこをかなり心配していたのだ。

王子の従者であるわたしが王子とあっさり結婚してしまったけれど、これでいいのかもかくとして、これからのわたしの待遇はどうなるのか、分からなかったのだ。

それが今までどおり仕事を手伝ってほしいと言われて、正直、ホッとした。

「とはいえ、明日と明後日で、ルベルは結婚式の準備をしなければならぬな」

「えっ。ちょ、ちょっと待ってください！ 結婚式、いつするのですか」

「そうだなあ……さすがに明後日というわけにはいかないから、準備期間を入れて……早くとも一ヶ月後くらいかなあ」

「そ、そんなに早く、ですか？」

「明日はウエディングドレスを作るために採寸をするだろ」

「ウ、ウエディング、ドレ、ス」

「あとは、式はルークスにしてもらうとして、神殿で行うから……招待客の調整と、準備と……うーん、一ヶ月後は難しいな、さすがに。となると……」

と王子はなにやら考えていて、それからうなずいた。

「三ヶ月後がちょうどよいかな」

「三ヶ月……」

普通、結婚式って半年とか一年とかかけて準備をするものだと思っていたので、あまりの短さに驚きを隠せない。

「ケラススもちょうど見頃となるし、美しい花嫁姿が見られるだろうなあ」

うっとりとした表情の王子を見て、わたしなんかより美しい王子のほうがケラススの花に映えるのではないかと想像して、あまりの美しさにくらりとめまいがした。

うん、明らかにわたしより王子の方がケラススの花によく似合う。美しいってずるい。

「神殿の周りにもケラススがたくさん植えてあるから、それはそれは美しい結婚式になるだろうな」

「そうですね……」

ケラススは、春の一時期にしか淡い桃色の花を咲かせない。そしてそれが散る姿がこれこそ美しいのだ。ひらひらと空を舞い上がる、淡い桃色の花びら。夢の世界のように美しく、安らぎの夜の女神の神殿にふさわしい儂さと淡さを兼ね備えている。

「ということで、ルベル。三ヶ月後を目指して、明日から頑張ろう」「はい」

王子の仕事の手伝いといっても、それほど大変ではない。けれども、王子の仕事を手伝いながらの結婚式の準備って、想像がつかない。

「招待客の調整は私がやるけれど、ルベル、キミが呼びたい人はリストアップしておいてほしい」

「はい、かしこまりました」

「あ、それ。私と結婚したのだから、もう敬語は止めてくれないかな」

「え……とは申しませんが」

いきなりそんなお願いをされても、染みついたものはすぐには無理だ。

「となるよねえ。うん、真面目なルベルらしい回答だ。仕事るときは今までどおりでいいけれど、今はプライベートな時間だよ?」

王子の言いたいことは分かる。分かるけれどもだ。

「努力はいたします」

「うん、すぐには言わない。ゆっくりでいいから、ね」

王子はいつも、こうして譲歩してくれる。

無理には言わない、ゆっくりでいい、といつもわたしの歩調に合わせてくれる。

だからその思いに報わなければならない。

「そ、それでは、王子。私的な時間ときは、ラーウスさまとお呼びしても、その、よろしいでしょうか」

そう言えば、王子は驚いたように目を丸くして、それから破顔した。

それはとても嬉しそうな笑顔で、こっちまで幸せになってくる。

「ああ、いい提案だね。さまは付けなくていいよと言いたいたいところだけど、それもすぐには無理だろうから、ラーウスさまでいいよ」

いきなり呼び捨てはそれはとてもではないけれど無理だ。

でも、それでも喜んでいただけただけなので、よいでしょう。

「ラーウスさま、それではわたしは部屋に失礼してもいいでしょうか」

「え、あ、そうだね。うん、今日のところはそうでしょうか。部屋もすぐに準備させるから、二・三日、待っていて」

「あ……そ、そう、です、よね」

そう言われれば、そうだ。

結婚したのだから、一緒の部屋で寝起きする方がごく自然な流れ

だ。

それに、ラーウスさまと結婚したというのに、同じ城内の敷地にあるとはいえ、いつまでも騎士の宿舎にいるのも、色々と問題だろう。

「色々と、ありがとうございます」

そうお礼を言い、立ち上がろうとしたら、ラーウスさまはわたしの手首を引っ張り、身体を引き寄せられ、ギュッと抱きしめられた。今までもたまにされていた抱擁であるけれど、関係が変わったせいで、ものすごく胸がどきどきと高鳴り始めた。

ラーウスさまはしばらくの間、わたしを抱きしめていたけれど、なにかを諦めたかのようなため息を吐き、耳元で小さく囁いた。

「それでは、ルベル、お休み」

そうして頬になにか温かなものが触れ、離れた。

それがなにかと分かった途端、わたしは今日の中で一番、真っ赤な顔になった。

ラーウスさまがわたしの頬にキスをした！

「すごい真っ赤だ、ルベル」

「ラーウスさまっ！」

不意打ちでそんなことをされたら、どうすればいいのか分からず、困るから止めてください！ と言いたかったけれど、名前を呼ぶのがやっとだった。

「ふふ、これから少し仕事をして寝ようと思ったけれど、ルベルのおかげで頑張れるよ」

「ラーウスさま、あまり無理をなさらないでくださいね」

真っ赤な顔のまま、それだけ言うと、そそくさとラーウスさまから離れて、慌てて部屋を辞した。

ラーウスさまの側にいると、心臓がいくつあっても足りないくらい、いつもどきどきさせられて来たけれど、今日は一生分のドキドキがあったのではないかと思うほど、ドキドキの連続だった。

さっきのあれが一番のドキドキだ。

「もっっ」

わたしは口の中でそれだけ呟き、いそいそと自室へと戻った。

## \*六\* 食堂で

なんだか興奮してしまって、なかなか寝付けなくて、目が覚めたらかなり陽が高くのぼっていた。ああ、せつかくの休みなのに、なんてもつたいたいと思っただけれど、そういえば、ラーウスさまから起きたら部屋に来るようにと言われていたのを思い出した。

のそのそと寝台の上に起き上がり、大きく伸びをする。

とそこで、すっかり朝寝坊をしたために、耳と尻尾が生えてきていることに気がつき、わたしは慌ててブレスレットの中に仕込んであるウイケウスの花の香りを嗅いだ。途端、しゅるんと音を立てて消える耳と尻尾。

われながら、どういう仕組みで耳と尻尾が消えるのか分からないけれど、この花が獣人の特徴を消すことができるというのが発見した人に、心からお礼を言いたい。そうでなければわたしたちはあの町でいつ人間に見つかるかと震えながら生きていかなければならない。いや、獣人の特徴が消せなければ、いくら同じ獣人がいるとはいえ、町や村は作れなかつただろう。

それくらい、ウイケウスは、わたしたちにとってはなくてはならない大切な物だ。

本当ならば、ウイケウスの花を干して乾かしたものを煎じて飲むのが一番、効率がいいのだけれど、その肝心のウイケウスを干した物の在庫が切れているのだ。だから今はこうやってことあるごとに匂いを嗅いで誤魔化しているのだけれど、それもそろそろ危険な域に入っている。

というのも、ウイケウスの花の香りが薄れてきていて、頻繁に嗅

いでないと、耳と尻尾が出てきてしまうのだ。

ちなみに、獣人にも色んな人がいて、わたしのように人型に耳や尻尾だけが映える人もいれば、完全な動物型になる人もいる。動物型になれる人は森などでも暮らしていけそうだけど、人としても獣人としても中途半端なわたしみたいな人たちは、完全に隠れてしまおうか、ウイケウスを煎じて飲んで、人として暮らしていくか、どちらがしかできない。

とまあ、暗い話は置いておいて。

わたしは手早く着替えを済ませて、少し遅くて早い朝食兼昼食を食べに食堂へと向かった。

中途半端な時間だったため、食堂はガラガラだった。

「おはようございます」

顔なじみの食堂のおばちゃんに声をそっかければ、

「おはようというには、ちょっと遅いんじゃないかね」

と気安く言われ、思わず笑い返した。

「ご飯はいつものでいいかい？」

「はい、いつものをお願いします」

たとえば、山盛りのサラダに、ご飯と魚、そしてスープが出てきた。

「今日は新鮮な魚が入ったから、塩焼きだよ」



「わー、すごいー!」

食堂に入ったときからいい匂いがしていたけれど、本当に新鮮でいい魚のようだ。

トレイに乗ったそれらを受け取り、いつも座る端っこに座り、わたしは遅い朝食で早い昼食を摂り始めた。

食べ終わって食器を片付けにいくと、いつもは出てこない先ほどのおばちゃんが出てきて、興味深そうにわたしの手を見ていた。

その視線をたどると、わたしの左の薬指に向いていて、そういえば、と思い出す。

「あれ、あなた、昨日はしてなかったよね、それ」

「え、あ、はい」

「あなた、いつの間に結婚したんだい!」

昨日の夜です、と答えるより早く、奥にいた他のおばちゃんたちがわらわらと集まってきた。

うわ、これは予想外!

「あらまあ、ようやく王子、求婚したのね」

「求婚どころか、一気に結婚したのよ」

「まあ、ほんとだわ。ほんと、長かったわねー」

「ほんとにねー」

と、わいわいとおばちゃんたちが話していた。

え、ちよつと待って?

わたし、一言もラーウスさまって言っていないのに、どうしておばちゃんたちは、相手を知っているのっ?

驚いて目をぱちくりしていると、先ほど、ご飯を用意してくれた

おばちゃんが教えてくれた。

「知らないのはあんただけってくらい、ラーウス王子はいつも『ルベルはどこにいる？』って探していたのよ」

「え……」

「あなたが休みの日は、必ずここに来て聞いていくのよお」

「それにあなたしか眼中にないって感じで、もうね、あたしたちみんな、王子のことを応援していたのよ」

……知らなかった。

ラーウスさまってそんなに分かりやすい態度を取っていたんだ。

「これで晴れて、王子の想いが通じたのね」

「そうね、もう、あなたって剣以外は興味ないって顔してるし、王子のあんなに分かりやすい態度に気がつかないし！」

「……………」

そんなに分かりやすい態度を取っていた、ラーウスさまって？

思い返しても、あまり思い当たることはあまりない。

やさしい笑みも、過度なスキンシップも、人嫌いという噂とは違っているな、程度にしか思っていなかった。

「あなたにだけよ、あんなやさしい表情をするのは」

「え、そうなんですか？」

「そうよー。あたしたちには冷たいもの、ねえ」

と、おばちゃんが言えば、その場にいた全員が同じタイミングでうなずいた。

それについては思い当たらないことはないけれど、初めからあんな感じだったから、分からなかった。

「それに、ルベルが来てから王子の顔色も良くなったし、あたしたちみんな、安心していたんだよ」

「そうだね、いつも辛そうにしていたのが、ルベルが来てからなくなっただね」

「そう……なんですか？」

そう言われてみれば、ラーウスさま付きになる前にお見かけしたとき、青白い顔をしてふらふらしていたのを見かけたことがある。

あまりにも辛そうだったから、王子つて分かっていただけけれど、失礼だと分かりながら、思わず声を掛けたことがあった。

もしかして、それがきつかけだったのかしら？

今の今まで忘れていたけれど、あのときのラーウスさま、確かに冷たい態度だったような気がする。

でも、ふらついて倒れそうになっていたから支えたら、驚いたように目を見開いて、それから名前を聞かれた。

そのとき、初めてラーウスさまの顔をはっきりと見たのだけど、すごく綺麗で、見とれてしまったのまで思い出して、思わず顔が赤くなってしまうた。

「まあ、この子ったら！ なにを思い出してるんだか」

「あ、いえっ。ラーウスさまと初めてお会いしたときのことを思い出してまして……」

「初めての出逢いですってっ？」

まさかのおばちゃん、入れ食い状態。

カウンター越しにおばちゃんたちが食いついて来たところで、ざわりと空気が揺れて、覚えのある匂いが背後からしてきた。

振り返ると、そこには……。

「ラーウスさま」

「おはよう、ルベル。なかなか来ないから、待ちきれなくて迎えに来てしまったよ」

「すみません、今日はちょっと、寝坊をしてしまいました」

声は聞こえないけれど、わたしのその発言におばちゃんたちが色めきだっているのがよく分かった。絶対に変なことを考えている！

ラーウスさまは嬉しそうに笑うと、わたしの手を当たり前のように取った。そうして指先にキスをしてきた。

カウンターの向こうのおばちゃんたちの、黄色い歓声が聞こえてきそうだった。

「それでは、ルベル。行こうか」

「……はい」

どこに行くのと聞きたかったけれど、今は下手に喋らない方がよさそうだと気がつき、返事をするに留めた。

ラーウスさまに手を引かれて、わたしは宿舎から出た。

「あの、ラーウスさま、これからどちらへ？」

そう問えば、ラーウスさまは楽しそうに笑った。

「今日はキミのウエディングドレスを作る予定だよ」

「ウエディング……ドレス……」

そういえば、そんなことを言っていたような気がする。

「最高のドレスを作ってもらうためには、やはり早く取りかからないといけないだろう?」

「……はい」

そんな立派なものでなくていいですと言いたかったけれど、ライウスさまは第三とはいえ、王子だ。式はそれほど盛大にしないとしても、あまり変なものを着て、ライウスさまに恥をかかせてはならない。だから言われるがままになるのが一番だろう。

それにわたしも一度でいいから、美しいドレスを着てみたいと思っていたのだ。

今着ている、無骨な騎士服も好きだけど、それでもドレスだって着てみたかったのだ。

だからわたしは、ライウスさまの提案にうなずいた。

\*七\* 愛している

ドレスに関しては、ラーウスさまは分からないということで、王妃さまが手伝ってくださることになった。

王妃さまの私室に王家専属の仕立屋が呼ばれ、あれでもない、これでもないと色々と試着をさせられたりした。

そして、解放されたのは、すっかり夜の帳が降りる頃となった。

「王妃さま、長い間、申し訳ございませんでした」

と謝罪をすれば、むしろ恐縮されてしまったのだけれど、恐縮するのはこちらの方だ。

「ごめんなさいね、あたくしのわがままであなたを長時間、拘束してしまつて。でも、ほら、あたくしの子どもたち、みんな男の子でしょう？ だから娘ができて、嬉しくて、思わずはしゃぎ過ぎてしまったわ」

そう言つて、頭を下げられてしまい、わたしは大慌てで王妃さまに近寄つた。

「そんな、頭をあげてください！ むしろ、大変、助かりました。楽しんでいただけたのなら、僥倖です」

たとえば、王妃さまは、がばりとわたしに抱きついてきた。いきなり抱きつかれるのにはラーウスさまで慣れているけれど、まさか

王妃さまにまで同じことをされるとは思っていなくて、驚いて、固まってしまった。

「もう、なんて良い子なのかしら！ ラーウスにはもったいないわ！」

そんな、恐れ多いことを。

王妃さまからもとてもいい匂いがして、不敬にも思わず抱きしめ返し、そつとその香りを胸いっぱい吸い込んだ。それは、なんだか母に似た懐かしい匂い。わたしの口からは思わず、

「お義母<sup>かあ</sup>さま……」

と眩きが洩れていた。

その一言に王妃さまの身体がびくりとしたことで、ハツとした。

あまりにも失礼すぎたのではないだろうか！

慌てて身体を離そうとしたら、逆に、ますますぎゅーっときつく抱きしめられた。

「まあまあ、ルベル！ あたくしのことを、お義母さまって呼んでくれるのね！ もう、感激過ぎて涙が出そうよ！」

驚いて、王妃さまの顔を見れば、本当に涙ぐんでいて、わたしはさらに焦った。

「おっ、王妃さまっ」

「あら、やだ！ お義母さまって呼んでよ」

「お義母さま……」

「そつよ、あたくしはあなたの義母<sup>はは</sup>になったのよ？ すぐには難しいかもだけど、あたくしたちのこと、頼ってね？」

「はい、ありがとうございます」

王妃さまはしばらくの間、わたしのことを抱きしめていたけれど、気が済んだのか、ようやく解放してくれた。

「ああ、本当に今日は楽しかったわ！ 今度は二人でお茶をしまし  
ようね」

「はいっ、お義母さま」

そう答えれば、王妃さまは花が咲くような、華やかな笑みを浮かべてくださった。美しい王妃さまのその笑みに、わたしは思わず赤くなる。

とそこへ、扉を叩く音がして、王妃さまが返事をする、ラーウスさまの応えだった。

「母上、ずいぶんとルベルを独り占めしていましたね」

入室するなり、これである。

わたしと王妃さまの距離が近いことにラーウスさまは眉をひそめ、それからなぜか王妃さまから隠すようにわたしはラーウスさまの背中側に回された。

え、なんで？

「ドレスはどうになりましたか」

「ええ、それはもう、素敵なものができそうよ。あとは普段に着るドレスも何着か用意させることにしたわ」

え、なんですって？

それでウエディングドレス以外のドレスも着せられていたのかと、このときになって初めて知った。



「ルベルは身長がありますし、姿勢もよいから、どのドレスを着せても映えるから、選ぶのに困ったわー」

「それなら、似合ったドレス、どれも作らせればよいではないですか」

「あらあ、それをしたら、当分、ドレスを作らなくてよくなって、あたくしの楽しみがなくなるから駄目よ。ね、ルベル、またドレス選び、しましうね」

「え、あ、は、はい……？」

え、またあの着せ替えをやるのですか？

「今は冬だけでも、もう少ししたら春ですもね。今回は冬と春のドレスを選んだけれど、今度は夏のドレスを作らなければ、ね」

ね、とおっしゃっても困るのですが。

普段はラーウスさまのお仕事を手伝うのだから、騎士服で充分だし、ドレスを着る機会なんて、そうそうないのではないのでしょうか。

ちなみに今日は、休日ではあるけれど、さすがに普段着ではまずいと思ったので、騎士服を着ている。

「明日の打ち合わせがしたいので、母上、これで失礼しても？」

「ええ、いいわよ。ルベル、今日は楽しかったわ、ありがとうね」

「いえ、こちらこそ。大変、勉強になりました。長時間、ありがとうございました」

そう言って、騎士の最敬礼をすれば、王妃さまはくすくすと笑った。

「もう、ルベルったら、なにさせても様になるわね」

「そんなんですよ、自慢の伴侶ですよ」

「まあ、惚気のさけ、ごちそうさま」

と親子の気安い会話を後に、わたしたちは王妃さまの私室を辞した。

部屋を出て、廊下を歩いている途中で、ラーウスさまに疑問に思ったことを聞くことにした。

「あの、ラーウスさま」

「なんだい？」

「明日の打ち合わせとは」

そう聞けば、ラーウスさまは歩きながら、にやりと笑った。

「口実だ」

「え？」

「そうでも言わないと、母上はルベルをいつまでも離さないだろ

うっ？」

「……………」

いや、さすがにそれはないでしょう。

と思っただけれど、あの流れからして、下手したら『一緒にお夕飯を食べましょう』的な流れになりかねなかった。それは確かに助かった。

「それよりも、ルベル」

「はい」

「疲れていないかい？ どうせ母上のことだ、休憩なしですっつとド

レスを選びをしていたのだろう」

そう言われて、初めて、休憩がなかったことを思い出した。

「そういえば……。お義母さまに悪いことをしました」

「おや、もうお義母さまと呼んでいるのか」

「はい。母のように親身に色々と気にしてくださいましたし、なによりも、母と同じ匂いが……。あ」

とそこまで言って、わたしは慌てて口を閉じた。

そのことについて、ラーウスさまはこの場では特に追求はしてこなかった。

ラーウスさまに手を引かれて、そのまま執務室へと向かった。

部屋に入ると、独特の薬草の匂いが鼻につんとしたけれど、わたしはこの匂いが好きだ。だから深呼吸して、その匂いを堪能していると、ラーウスさまが急に抱きついてきた。

途端、部屋の薬草の匂いと、ラーウスさまから漂う、甘い匂いが混じり、クラクラとしてきた。

わたしを魅了する、ラーウスさまの甘い匂い。

ラーウスさまはいつもより強く抱きしめて来たので、わたしの鼻はラーウスさまの肩の辺りに押しつけられる格好になった。

すると、さらに強くなる甘い匂い。

ラーウスさまのこの匂い、あまりにも魅惑的過ぎて、頭がぼんやりとしてくる。

「今日一日、ルベルと離れていて、苦しかった」

わたしの耳元に切なく響く甘い声に、さらにクラクラとしてくる。

「ルベル、私はキミのことを愛しているんだ」

“ 気に入っている ” からいきなり “ 愛している ” に格上げされたことに気がつき、それと同時に、王子からの甘い匂いが強くなり、意識が飛びそうなくらい、クラクラとしてきた。

この王子の甘い匂い、ここまで来たらあまりにも毒過ぎる。

周りを渦巻く薬草の匂いまで甘く感じてくるのだから、不思議だ。

「ルベル、今日はキミを部屋に帰したくない」

「え……」

その意味することに、さすがのわたしも気がついた。そこまで鈍くはない。

「ルベル、湯浴みをして、隣の部屋で待っていてくれるかい？」

戸惑いが大きかったけれど、そこまで求められて、いいえとは答えにくい。

それに、ラーウスさまに会ってから気がついたけれど、わたしも今日一日、ラーウスさまと離れていて、淋しかったのだ。

「……はい」

そう答えれば、ラーウスさまは真っ赤になって、嬉しそうに笑ってくれた。

**\* 八\* 部屋を移動することになりました**

カーテンの隙間から差し込む朝の光に気がついて目が覚めれば、目の前に男性にしておくのがもったいないくらいに美しい寝顔がそこにあった。

ラーウスさまに求められ、それに応えた昨晚。

朝が来て、改めてこうして思い返すと、恥ずかし過ぎて耳まで熱い。

そして、ウイケウスの煎じたお茶を飲んでいない今、興奮し過ぎると、耳と尻尾が出るということに昨日、初めて知った。ラーウスさまに、弱い耳と尻尾をいじられたことを思い出して、さらに赤くなった。

ずっと、かわいいやら綺麗やらと美辞麗句を言われたことも合わせて思い出し、恥ずかしくて布団の中に隠れると、その動きでどうやらラーウスさまを起こしてしまったようで、布団の上からぎゅーっと強く抱きしめられた。

「ルベル、おはよう」

「ラーウスさま、おはようございます」

布団の中から籠もった声で応えると、ラーウスさまはくすくすと笑った。

「なんだい、昨日のことを思い出しているのかい？」

「なっ………！」

「私も、初めてをルベルに捧げることができて、幸せだったよ」

はっ、初めてってどういうことですか！ いえ、もちろん、わたしも初めてですけれどね！

王族ってそういう教育をされると聞いていたんだけど、ど、ど、ど、どういふことですかっ！

「やはり、私の見立ては間違っていないかった」

「……へ？」

「私はね、ルベル。魔力が多すぎて、普通の人間では無理なんだよ」「む、無理、とは？」

「だれにでも魔力があるということは、知っているよね？」  
「はい」

この世界には、魔法が当たり前のようになり、さらにはだれもが魔力を持っているのだけれども、魔力量の多い少ないもあるし、魔力があるからといって、それをだれもが使えるわけではないのだ。

魔力が少ないものは高等魔法が使えるわけでもないし、だからといって、魔力が多いからいきなり魔法が使えるというわけでもない。訓練さえ積みめば、魔力が多い少ないに関わらず、それなりのものを使えるようにはなる。

とはいえ、魔法を教えられる人というのは貴重な人材で、だれもが訓練を積めるわけではない、というのが、現在の実情だ。

「その魔力というのは、身体中を巡っている。ここまでは知っているよね？」

「はい」

「普通ならば、意識せずとも、魔力は呼吸とともに吐き出され、そして外にある微量の魔力を取り込んでいる」

そのあたりは、騎士学校で教わった基礎知識だ。だからうなずくと、ラーウスさまは続けた。

「それが身体を循環し、体内の魔力が減れば、自動的に外から取り込む、という仕組みになっている」

「はい。騎士学校でその辺りまでは教わりました」

その答えに、ラーウスさまは笑って、わたしの頬を撫でた。温かな温もりにも、無意識のうちにすり寄っていた。

「だけど、人によっては、体内魔力が多すぎて、上手く循環をさせることができない者がいるんだ」

「それは……初めて聞きます」

「そうだろうね。よほどの膨大な魔力を抱えていない限り、そんなことは起らない」

「え……ということは」

王子が青い顔をしていたのは、まさかそのせいだ？

「本当は黙っておこうかと思ったのだけど、私はキミの秘密を知っているから、話さないのはずるいかなと思ったから言うけれど、私はその魔力過多で、上手く調整ができないのだよ」

「そう……なの、ですか？」

でも、最近はその感じはまったくないんだけど、どうして？

「ところが、ルベル。キミのおかげで、最近はずいぶんいいんだ」

「え……？」

「ルベル、キミは気がついていないかもしれないけれど、キミは人の魔力を吸い取る力があるんだ」

吸い取る力……？

そんなものがあつたなんて、知らなかった。

「でもわたし、魔法は座学はともかく、実践はからっきしでしたよ？」

「そうだろうね。キミの場合、魔力は魔法の力に変換されるのではなくて、力になっていようだ」

「力に……？」

そう言われて、そういえばラーウスさまと知り合ってからこちら、力が強くなったような気がしていたのだけれど、これってそういうことだったのかと納得がいった。

「キミは無意識のうちに魔力を力に変えている。だからこそ、その細腕でも騎士団長と渡り合えるのだよ」

そうだったのか、無意識のうちにそんなことをしていたのか、わたしの身体は。それで納得がいった。

「ところで、ルベル」

「はい」

「耳を撫でてもいいかい？」

「えっ、出てますかっ？」

どうにもラーウスさまの前だと油断してしまうというか、気が抜けているというか。

起きてすぐに確認して、ウイケウスの香りを嗅いで引っ込めておかなければならなかったのに！



「いや、出ていないよ。でも、昨日のキミはその、すごくかわいくて……」

「だ、駄目ですっ!」

「ちよっとだけ……」

「いくらラーウスさまのお願いでも、駄目ですって」

ラーウスさまに耳を撫でられたら、ふにやっとなってなにもできなくなるのだから、今、そんなことをされたら、ここから起き上がれなくなってしまう。そんなのは駄目だ。

「なんだよ、ケチ」

ケチってなんですか、ケチって。

「そ、その代わりに、よ、夜なら……」

そう妥協してみると、ラーウスさまは嬉しそうに笑った。

ああ、やっぱりこの笑顔、好きだなあ。

「よし、それは嘘偽りないな?」

「……………は、はい」

それではまるで、なんだかわたしからねだったみたいで、恥ずかしかった。

本日の予定はというと、ラーウスさまの隣の部屋に用意された、新しい部屋に移る準備をすることだった。

準備といっても、それほど荷物がなからすぐに終わってしまい、

その荷物も自分で運ぶと言ったのに、王子付きの侍女たちが全部持って行ってしまった。荷物は大半が書物だったので、それはさすがに女性では運ぶのが大変だから、男性たちをお願いすることになったけれど。

そうして、もぬけの殻になった部屋を、感慨深く見回した。

入団当初は騎士見習いだったから、四人部屋で、わいわいがやがやとにぎやかで楽しかった。

そのときと同じ部屋だった子たちとは、騎士団という場所柄、女性が好きないのもあり、未だに仲がよい。

そんなことを考えていたら、扉を叩く音にびっくりした。

「はい」

と答えれば、扉が勢いよく開き、今ほど、考えていた三人が部屋を訪れてくれた。

「ルベル、聞いたわよ！」

「え」

「おめでとう！ ラーウスさまと結婚したんだって？」

「え、あ、はい……」

そのことを報告に行かなきゃと思っていたら、いきなりその当人たちが見れたから、驚いた。

「ラーウスさまだったら、ルベルしか見てないんだもの！ あれだけあからさまな態度なのに、ルベルったら素っ気ないし！ あたしたち、心配して見守っていたのよ！」

とは、一番仲のよい、アリア。

昨日、食堂でも言われたけれど、ラーウスさまってそんなに分かりやすい態度を取っていた？

「ね、ほら。やっぱりルベルが最初だったじゃないの！」

「あーん、賭に負けちゃったー」

マールスとフェリキタスの二人の言葉に、目を丸くした。  
なに賭なんてしてるのよっ！

「マールス、フェリキタス？」

「う……あ、いや、四人の中でだれが一番最初に、恋人ができるかって話を三人でしていてね？」

「そ、そう。負けた人が昼食をおごることになって……」

その程度の賭なら、問題ない……？

でも、人がいないところでなんてことを話しているのよっ！

「そ、それより！ ルベル、おめでとう！ すごいことよ、ラーウスさまよ？ みんなの憧れを射止めるなんて、すごいじゃない！」

「え……あ、うん、そ、そう……ね」

実は単に利害関係が一致したから……というより、弱みを握られているせいでなんですけどなんて言えなくて、曖昧に返すことしかできなかった。

\* 九\* 友人たちと街にお出かけしました

なにも予定がないのなら、街にお茶を飲みに行こうという話になったのだけれど、その前にラーウスさまに断りを入れなければならぬと言ったら、三人に黄色い声をあげられた。

「まあ、居場所をすべて知らせておかなければならないなんて、すごいラブラブじゃん！」

「え、でもちよつと束縛系？」

「でも、王子ならいいかも」

という三人の話を背中に聞きながら、わたしはラーウスさまの執務室へと向かった。

ところが、珍しいことに、ラーウスさまは部屋にいなかった。

だから仕方がなく、わたしはメモを残して、待ち合わせの騎士団の宿舎前に行った。

すると、どうしてだろう。

三人に囲まれたラーウスさまがそこにいるではないか。

「ルベル」

すぐにわたしに気がついたラーウスさまは甘い笑みを浮かべ、わたしを見てきた。それを見て、わたしは思わず赤くなった。

「街へお茶をしに行くんだって？」

「はい」

「気をつけて行っておいで」

駄目と言われると覚悟していたけれど、あっさりと了承を得られて、ホツとした。

「先ほど、お部屋におうかがいしたのですが」

「ああ、ルベルの荷物が届いたのに、ルベルが来ないから心配して見に来たんだよ。入れ違いになってしまったみたいだね」

ラーウスさまのあまりの過保護者っぷりに、思わず眉尻を下げてしまった。

ラーウスさまはすぐにわたしの表情の変化を見て、申し訳なさそうに謝ってきた。

「すまない。キミのことを縛り付けようと思っているわけではないんだけど、つい、心配で」

「こんなに心配性だったかしら？　と思うけれど、ラーウスさまの心配は分からないでもなかったので、小さくうなずいた。

「それでは、行ってまいります」

「分かった。くれぐれも気をつけて」

「はい」

ラーウスさまは、名残惜しそうにわたしの身体をギュッと抱きしめてきた。

そうすると、先ほどの話ではないけれど、ラーウスさまから魔力がわたしへと流れ込んできているかのような感覚に気がついた。

それは甘い香りで、ああ、この匂いはラーウスさまの魔力の香り

だったのか、とここで初めて気がついた。

「ルベルのことは、くれぐれも頼むよ」

「はい、任せてください！」

アリアの力強い言葉に、ラーウスさまは小さくうなずき、ようやくわたしの身体を離してくれた。

「行ってきます」

「ああ」

わたしはラーウスさまに頭を下げ、それから三人に混ざって街まで行くことになった。

久しぶりの街歩きは、とても楽しかった。

話題の中心は、結婚したばかりのわたしのことが多くて困ったけれど、それでも、三人は三人で、それぞれ気になる男性がいたり、お近づきになってちょっといい感じになっていたり、恋の話に花が咲いた。

わたしはラーウスさまと結婚するまで、そういう話が苦手だったけれど、今後は苦手といってもいられないし、改めてこうして話をすると、参考になることが多いと気がついた。

「ねね、ルベル。王子になにかお土産を買って帰ったら？」

「えっ」

「そうよ、そうよ。王子、いつも素敵な髪紐をお使いだけど、ちょっと地味なのよね。せっかく見た目が華やかなんだから、もうちょっとおしゃれなのをすすめてみたら？」

という友人たちの助言に従い、アリアがひいきにしているという髪紐のお店に向かった。

かくいうわたしも髪が長いけれど、ただ縛るだけでいいと思って、いつも適当なものを使っているのですが、この機会にもう少しきちんとしたものをした方がいいような気がしてきた。

「そうだ！ どうせなら、お揃いにしたら？」  
「いいね、それ！」

と友人たちの方がノリノリである。

アリアがひいきにしている髪紐のお店というのは、少し路地を入ったところであり、一人ではたどり着けないような場所だった。路地の臭いは最悪だったけれど、それでも、店内に入ると、心地よい匂いが広がっていて、安堵した。

さすがアリア、いいセンスをしている。

店内はそれほど広くなくて、わたしたち四人が入ったら窮屈なくらいだったけれど、壁一面に飾られた髪紐は種類が豊富で、迷うほどだった。

「どれも手作りで、一点物なの。気に入ったのがあったら、その場で買わないと、もう二度と、手に入らないのよ」

そんな脅し(?)にびくびくしながら見ていけば、どれもこれもかわいくて、困ってしまった。

とはいえ、ラーウスさまの髪紐だから、こんなかわいらしいのはさすがにしてくれなさそうだ。となると……。

「いらっしやませ」

店の奥から、わたしたちの声を聞きつけた店主が現れたようだ。黄色の長い髪を複雑な形で結い上げた、色白で、とても美しい女性。

思わず見とれていると、視線が合った。

にっこりと微笑まれ、思わず赤くなる。

って、なんで女性相手に赤くなるのよ、わたし！

「サリレさん！」

「あら、アリア。いらっしやい。今日はお友だちと一緒に？」

「はいっ。新婚の彼女とだんなさまの髪紐を選ぼうと思って、来ました」

「あらあ、新婚さんってことは、ご結婚されたばかりってことね？

おめでとございます」

「あ、ありがとうございます」

店主の名前はどうかやらサリレさんというようだ。

サリレさんにはにっこりと笑みを浮かべ、それならば、とわたしたちが見ていた反対側の壁に案内してくれた。

「この辺りの髪紐がいいかと思うわ」

と指し示されたのは、二組が一つになった髪紐。

「カップルや夫婦が買っていくものよ。元々は一本の紐を、二つに分けたものになるの」

「あなたの髪は赤いけれど、だんなさまは？」

「灰色です」

「それなら、この赤い髪紐がいいんじゃないかしら？」

と壁から取って、わたしの手のひらに置かれたのは、少し太めな



二組の紐。基調は赤だけれど、差し色として白が入っていて、とても華やかだけれど、それほど華美に感じさせないもの。

「これ、オススメなの」

ラーウスさまがこの髪紐をしている姿を想像してみた。

……うん、似合っている。

「それでは、これをお願いします！」

即決したわたしに、周りのみんなが呆れていた。

わたしの場合、気に入ったものがあれば、すぐに買う。買わないで後悔するより、買ってから後悔する方がいいと思っているからだ。

といつても、なかなか気に入るものがないから、気に入ったら買っておかなければ、後悔することが多いってのもある。

「相変わらず、決めると早い」

「なるほど、結婚が決まったのはそういう経緯だったのね」

と三人がぼそぼそ話しているけれど、全部聞こえているわよ。

包んでもらっている間に店内を見たけれど、どれもこれもかわいけれど、購入しようというものとは出会えなかった。

それでも、今日、ここで素敵な髪紐と出会えたことは、幸運だった。

「お揃いでって、いいなー」

「マールスも思い切って声かけてみたらいいじゃない。それで、お揃いの髪紐を使えば？」

「えー、それするには、まずは髪の毛を伸ばさないと」

「そうよー。なんでいつつも短くするのよ」

「だって、お手入れ、簡単じゃない？」

「もー、それ、女、捨ててるー！」

女性らしいフェリキタスに対して、マールスは一見すると少年ぽい格好を好んでいるから、男の子に間違われることが多い。だけど、もっと女性的な格好をすれば、とつてもかわいいのを知っているの  
で、もったいないと思っていたのだ。

「うーん、そうねえ。そろそろ髪を伸ばすかなあ」

お金を払って商品を受け取り、それからわたしたちは、本来の目的である、お茶をしにお店に入り、そこで長い間、おしゃべりを楽しんだ。

\*十\* 贈り物

寮の部屋に帰ろうとして、ふとそういえば、自分の部屋が移動したことを思い出した。

部屋の鍵などは預かっていなかったから、とりあえず、ラーウスさまの執務室へと向かった。

扉を叩いて、部屋に入ると、ラーウスさまはソファに座ってお茶を飲んでいた。

「ルベル、お帰り」

「ただいま戻りました」

と、いつもの癖でそう言えば、ラーウスさまは小さく笑った。

「うん、やっぱり、ルベルはルベルだね」

そう言って、ラーウスさまは楽しそうに笑っている。

なんだかよく分からないけれど、褒められている訳ではないようだ。気がつき、ムツとした表情を返したけれど、それでもラーウスさまは笑ったままだった。

「ラーウスさまっ」

「ああ、悪い、悪い。あんまりにもルベルがかわいいから」

と若干、誤魔化され気味に言われたけれど、そこで、そういえばと思いつく。

「ラーウスさま、お土産を買ってきたんです」

「私に？」

「はい」

そうして、大切に片付けておいた懐から髪紐が入った袋を取りだし、ラーウスさまに手渡した。

「開けても？」

「はい。ぜひ、今」

がさがさと音を立ててラーウスさまは袋から髪紐を取り出した。

室内の淡い光の中でもはっきりと分かる、赤と白の髪紐。お店で見たときは思わなかったけれど、ラーウスさまの手の中にあると、なんだかとっても高級品のように見えるから、不思議だ。

「これは……二本入っているけれど？」

「あの……それは髪紐です」

「うん」

「ラーウスさまがお嫌ではなければ、そのっ、わたしと……お揃いで……」

と言った後、恥ずかしくなって耳まで真っ赤になった。

なんだかその場の雰囲気でも考えないで買ったけれど、今さらになって、なんて大胆なことをしたのだろうという気になってしまったのだ。

ラーウスさまは髪紐を見たまま、固まっている。ああ、やっぱりこれは……。

「あのっ、すみません、出過ぎたことを……っ」

ラーウスさまへのお土産物に髪紐だなんて、ちょっと似合わなかったかもしれない。本当ならもっと、高価なものの方がよかったのかも、と今さらながら後悔が押し寄せてきた。

わたしの焦りにラーウスさまは気がついたのか、かなり戸惑ったように口を開いた。

「いや、ルベル。その……なんて言えばいいの……」

「す、すみません！ もっとちゃんとしたものを買ってくればよかったですね」

「ルベル、違うんだ。嬉しすぎて、言葉が出てこないんだ」

「え……」

なんでも手に入ると思われるラーウスさまが、わたしでも手に入るような髪紐ひとつで、言葉を失うくらい嬉しいなんて、あるの？ しかも図々しくもお揃いでだなんて、もっと考えて選べばよかった……！

「ルベル、私のはどっちだい？」

「え……？」

「早速、結んでみようと思うんだけど、どちらが私で、どちらがルベルの物なんだい？」

聞かれて、そういった説明は受けてないことに気がついた。

「あの……たぶん、どちらでもいいかと思います」

「そうなんだね。確かに、どちらも同じ長さのようだ」

「はい。同じ紐を、二つに分けて作ったと聞きました」

「なるほど。同じ物を分け合い、同じように編んだ髪紐なんだね」

そういえば、商品を手には取ったけれど、一目で気に入ったから、詳細までは見ていなかった。少し太めで赤を基調にしている髪紐、という認識でしかなかった。

「この編み方は、幸せを現す編み方だね」

「そうなんですか？ さすがラーウスさま、よくご存知ですね」

「たまにね、依頼が来るんだよ。幸せの編み紐が欲しいってね」

言われてみれば、紐を調達してきて欲しいと言われたことが何度かあったことを思い出した。

「紐を調達してほしいというのは、こういう物を作るためだったのですね」

「うん、そうだよ。私の場合は、もっと短くて、手首に巻くものや、お守り袋の中に入れる程度のものばかりだったけれどね」

「あの、今度、作り方を教えてください。わたしにもできるようでしたら、お手伝いしたいです」

「ああ、そうだね。今度、私のために編んでもらおう」

ラーウスさまのためになんて、そんな、恐ろしい……！

でも、わたしが作った物を身につけていただけなのは、大変に光栄なことなので、お願いします、と頭を下げたら、やはり笑われた。

ラーウスさまはひとしきり笑った後、今、結んでいる灰色の紐をするりと抜き、代わりに、渡した赤い紐でしゅるりと髪を結んだ。

予想した以上に似合っていて、思わず息をのんだ。

「どうだい？」

「すごい……素敵、です」

「うん、ルベルの見立てがよいからだね。私の灰色の髪に赤は映え

るね」

「はい、とてもよく似合っています」

「それでは、ルベル。キミもこの紐で髪を結ぼうか」

「え……あ、はい」

「じゃあ、ここに座って。私が結んであげるから」

「え……え、えっ?」

ラーウスさまはソファから立ち上がり、わたしの手を取り、先ほどまでラーウスさまが座っていた場所に座らされた。

ラーウスさまはわたしの後ろに回ると、無造作に結んでいた髪紐を抜き取ると、代わりにラーウスさまとお揃いの赤い髪紐で器用に結んでくださった。

ラーウスさまは癖のない真っ直ぐの髪でサラサラだけれど、わたしの場合は、ちょっと癖があるし、コシがなくてふわふわとした髪質で、すぐに絡まってしまふ。だからラーウスさまのサラサラの髪がとても羨ましい。

「前から思っていたけれど、ルベルの髪、ふわふわで気持ちがいいね」

「ありがとうございます」

あまり自分の髪が好きではないけれど、ラーウスさまからそう言っていただけで、とても嬉しかった。

「ふふ、これでお揃いが増えたね」

そう言われて、指輪も結婚証が分裂したものだから、お揃いといえはお揃いだったと気がついた。

「これから少しずつ、お揃いを増やしていこう」

「はい」

なんだかそう言われて、くすぐったい気持ちになった。

「ルベル」

するり、とラーウスさまの腕が肩から前に回されて、後ろからギョツと抱きしめられた。途端、ラーウスさまから濃厚な甘い香りが漂ってきた。

昨日の夜、ベッドの上でも嗅いだことのある、この香り。

あまりの甘さに、くらり……とめまいがした。

「湯浴みをしておいで」

「は……い」

その意味するところを知り、わたしはぎくしゃくと立ち上がった、まではよかった。

はたと自分の荷物の場所はどこ？ と考えられるくらいにはまだ余裕が残っていた。

「あの、ラーウスさま」

「ん？」

「わたしの部屋ですけれど……」

「ああ、鍵を渡し忘れていたね。これがルベルの部屋の鍵。ちなみに、私の部屋の隣で、部屋同士、繋がっているよ」

「え、あ、はい」

「それと、ルベルの部屋に専用の湯浴み室もあるし、用意もできているはずだ。ゆっくり入っただけで」

「せっ、専用……!」



そんなものまで準備をされているなんて、驚きだった。

「それにしても、ルベルの荷物は少ないね」

「え……あ、はい。それほど必要なものはありませんから」

「それよりも、驚いたのは本だよ、本！ 私も読んだことのないような珍しい本も持っているみたいだね」

どうやらすでにラーウスさまは、わたしの荷物を調査済みのようだった。

「あの……気になる本があれば、どうぞご自由にお読みください」

「ほんと？ 本当にいいの？」

「はい」

「とっても貴重な本の混じっていたけれど、いいの？」

「曾祖父の代から残っている本だと聞いた物も中にはあるみたいですよ」

「それはとても貴重だ！ 修復魔法と保存魔法を掛けておこう」

「ありがとうございます」

ラーウスさまが本好きというのは知っていたけれど、まさかそこに飛びつくとは思わなかった。

「本は私が整理しておいたから」

「え……っ」

「あまりにも貴重な本を乱暴に扱いそうだったからね、それが我慢ならなくて、私が片付けたのだよ」

なるほど、それで本に関して詳しいのか。

ってか、ラーウスさま自ら本を片付けるだなんて、なんてことをさせてしまったのよ、わたし！ ラーウスさまが本を片付けてくだ

さっている間、わたしは呑気に街でお買い物して、お茶をしていたと思うと、大変、申し訳なく思ってしまう。

「ラーウスさま、助かりました、ありがとうございます」

「うん、私が好きでやったのだから、お礼は要らないよ。むしろ、勝手に触って申し訳なかった」

「いえ、大切に扱っていただけたようで、ありがとうございます」

荷ほどきは自分でやるつもりでいたから、かなり適当に詰めていたのだけど、どうやらすでに全部、片付けられているようだと知り、ちよつと複雑な気分にはなつたけれど、助かった。

「それでは、部屋の様子を見て、湯浴みをしたら、私の部屋に来て」

「あ……はい」

ラーウスさまのその一言に、わたしは真っ赤になりながら、部屋を辞した。

\* 十一 \* ウィケウスの花のこと

目が覚めたら、目の前にあどけない寝顔のラーウスさま。気持ち良さそうに寝ているけれど、そろそろ起きないといけない時間だと思っ。

でも、麗しい寝顔をもつと見ていたくて、じっと見つめていたら、視線に気がついたのか、ゆっくりとまぶたが開いた。寝起きだからなのか、少し潤んだ灰色の瞳が美しく、思わず見とれていた。

「ルベル、おはよう?」

じっと見つめて動かないわたしを訝しく思ったのか、疑問系での朝のあいさつだった。

「あっ、おはようございます、ラーウスさま!」

思わず見とれていたなんて言えなくて、慌てて応えれば、ラーウスさまは楽しそうにくすくすと笑った。

「そんなにじっと見つめられたら、恥ずかしいよ」

「そのっ、すみません! 気持ち良さそうに眠っていらしたので、つい……」

「それはルベルが側にいてくれるからだよ」

朝からの甘い言葉にくらりとしていたら、ラーウスさまはわたしの頬を撫でてきた。

「ルベルが側にいてくれるから、とても体調がいいのだよ」

確かにこここのところ、ラーウスさまの顔色はとてもよい。機嫌も良さそうだし、ラーウスさまの騎士として嬉しい限りだ。

笑みを浮かべれば、ラーウスさまも同じように笑みを返してくれた。大好きなこの笑顔を独り占めできるなんて、なんといい贅沢だろう。贅沢すぎて、怖くなることもある。

ラーウスさまはわたしのほんの少しの表情の変化を読み取ったのか、小さく首を傾げた。

「ルベル」

「はい」

「耳、触りたいな」

そう言われて、慌てて頭の上を押さえたいけれど、耳は生えていなかった。昨日と今日、起きてすぐにウイケウスの香りを嗅いでいないのに、どうしてだろう。

「だっ、駄目です！ 昨日、さんっざんっ！ 触ったじゃないですか！」

そうなのだ、朝、約束したからと言われて、ラーウスさまはずっとわたしの耳を触っていたのだ。さらに！ 第二の弱点である尻尾もずーっと触っていた。

「じゃあ、今日の夜ならいいのかい？」

ラーウスさまは悲しそうに瞳を潤ませ、上目遣いにそうやって聞いてきた。

「これはずるずる。」

「……………」

実際のところ、ラーウスさまに触られるのは嫌いじゃない。というより、むしろ好きだ。好きなんだけど、気持ちが悪すぎて、前後不覚になってしまふのがいただけない。

「ルベルの髪の毛も気持ちがいいけど、尻尾と耳の毛の触り心地、最高なんだよ！」

わたしの頭の上に生える耳の毛と尻尾は、髪の毛と同じく、赤くて細くてふわふわだ。自分で触っても気持ちがいいと思うのだから、自分以外が触っても気持ちがいいのだろう。それは分かる。分かるけれど、だ。

「……………あんまり触り過ぎないでくださいね？」

「それは約束しかねる」

そんな馬鹿正直に答えなくても。

でも、そんなところもラーウスさまのいいところだと思う。

「ところで、ルベル」

「はい？」

「耳と尻尾はどういうときに出てくるんだ？」

いきなりの話題転換に戸惑ったけれど、いい機会だと思ったから、説明をすることにした。

「わたしたち獣人は、基本は獣の姿をしています」

「そうなのか。じゃあ、ルベルは犬になれるのか？」

「いえ、完全な獣姿の獣人もいますけれど、わたしの場合は耳と尻尾のみです」

「ほう」

「獣人は、ウイケウスの花を干して煎じたお茶を飲めば、人間と同じ姿になれるのです」

「ウイケウスの花といえば、紫色のかわいらしい花だよな」

「はい。種をまけば、一週間で花を咲かせるような、成長が早い花です」

とそこまで説明して、ふと疑問が浮かんできた。

荷物が届かなくなる前に送られてきた荷物に入っていた手紙に、ウイケウスの花が不作だと書かれていたのを思い出した。

だけど、ウイケウスの花はとも丈夫だし、手入れもそれほど必要がないくらい、強い花だ。それが不作って、やっぱりおかしい。

「ルベル？」

急に黙ったわたしの顔を、ラーウスさまは心配そうにのぞき込んできた。というか、顔、近いです、近すぎです！

「ラッ、ラーウスさまっ！」

「うん、どうしたんだい、ルベル？」

今にもキスができそうなくらいの距離に、ラーウスさまの顔があらって、慌てて飛び起きた。

「近すぎます！」

「キスクらい、させてくれてもいいじゃないか」

「っ！」

そっ、そんなっ、朝からだなんてっ！

と思っていると、ラーウスさまは、素早く起きあがって、ベッドから降りるときに、頬に掠めるようなキスをした。

もっ、もっっ！

真っ赤になっただわたしを面白そうに見た後、ラーウスさまはベッドに腰掛けた。

「それで、今、なにを考えていた？」

「え……？ あ、はい。ウイケウスの花が、今年是不作だと聞きまして……それでなのか、荷物が届かなくて、困ってるのです」

そうだった。

わたしが獣人だとバレてしまったのは、実家から荷物が届かないからだったのを思い出した。今の今まで忘れていたのは、ラーウスさまとの結婚が衝撃的だったのと、ここどころ、どうしてなのか、ウイケウスの香りを嗅がなくても、耳と尻尾が出なかったからだ。

ラーウスさまは眉間にしわを寄せて、唸っていた。

「不作？」

「はい、そう手紙に書かれてました」

「ウイケウスはとも丈夫で、いや、むしろ丈夫過ぎて、植える場所を選ばないといけないと聞いていたのだが」

「はい、そうです」

ウイケウスは、獣人たちにはなければならぬ植物であるけれど、人間たちからは逆に、疎まれている。理由は、ラーウスさまが語ったように、繁殖力が強すぎて、植える場所を考えないと、すべてがウイケウスに占領されてしまうからだ。

それほどの繁殖力があるのに、不作って、やっぱりなにかがおか

しい。

「ウイケウスの種、あるんだけど」

「えっ」

「ルベルに任せている薬草園の片隅に植える？」

「えっ、いいんですかっ？」

「いいよ」

「ありがとうございます！」

ウイケウスは繁殖力が非常に高いけれど、きちんと管理さえすれば、問題のない植物なのだ。

「それでしたら、ラーウスさま」

「うん？」

「街に買い物に行ってもよろしいでしょうか」

「買い物……？」

「はい。ウイケウスをそのまま路地植えすると、際限なく広がってしまいますし、なによりも、ウングラが来て、畑を荒らしてしまいます」

「……ウングラ？」

「はい」

と答えた後、その姿を思い出して、ぶるりと思わず震えてしまった。

名前を口にしただけでもあの恐ろしさを思い出してしまっほど、ウングラは恐ろしいのだ。

「もしかしなくても……」

「そっ、それ以上は！」

「ルベル、震えているけれど、怖いのかい？」



「は……はい……」

騎士団長がこの場にいたら、『騎士たるもの、いかな時でも怖いと震えるな!』と一喝されそうだったけれど、ウングラを思い出すだけで本能的な震えが来るのだから、仕方がない。

「そのウングラというのがなにか分からないけれど、試しに植えたウイケウスは、花が咲いたらあつという間になにかに食い荒らされた挙げ句、畑もさんざん荒らされて大変だったから、植えるのを止めたんだよ。私はウイケウスの花の見た目と香りが好きだったから、香油でも採ろうかと思ったのに、残念だったよ」

ウイケウスは花を乾燥させて煎じて飲むか、ポプリ代わりにするかしか知らなかったけれど、香油なんて採れるのだろうか。もしも簡単に採れるのなら、あのお茶が苦手な獣人には朗報かもしれない。

「あ の つ」

「なん だい？」

「ウイケウスから香油って採れるのでしょうか」

「どうだろうか。試す前に全部、食われてしまったから、分からないんだよ」

「もしも香油が採れるようでしたら、それは獣人にとって、大変な朗報です!」

「そうなのかい？」

「はい。わたしたちはウイケウスの花を干して、それを煎じて飲んでます」

「へえ。どんな味がするんだろう。今度、試させてほしいな」

「それはかまいませんが、匂いは甘いのに、味は苦いんです」

「ほう。それをルベルは毎日？」

「はい。飲まなければ大変なことになるので、仕方なく、毎日……」

そうなのだ。ウイケウスを煎じて飲むのは、かなりの苦痛なのだ。もしもそれから解放されるのならば、願ったり叶ったり、だ。

「なるほど。色々と試してみる価値はありそうだね」

そう言って、ラーウスさまは笑った。

\* 十二 \* 一緒に行くのか

ラーウスさまから街へ買い物に行く許可を得たので、街着に着替え、街へと向かった。

向かう先は、雑貨屋だ。そこで細めの縄と、わたしの身長と同じくらいの長さの木の棒を五本、購入した。

木の棒はそれほど重たくはないけれど、長いために持って帰るのが大変だった。

そういえば、ラーウスさまはウイケウスの種を持っているとおっしゃっていたけれど、どれくらいあるのだろうか。それによって、畑の場所を考えなければならぬ。

ラーウスさまから管理を任されている薬草園に木の棒を置き、執務室へと向かった。

「ラーウスさま、ただいま戻りました」

「お帰り」

部屋に戻れば、ラーウスさまはなにか調べ物をしているようで、本を読んでいた。

「ラーウスさま、今、話しかけてもよろしいでしょうか」

「ん、いいよ？」

ラーウスさまは本から顔をあげて、わたしに視線を向けて来た。

「ウイケウスの種はどれだけあるのでしょうか」

「ああ、それほど数は多くないんだよ。ほら、これだよ」

と言つて、ラーウスさまは机の上に置かれた小瓶を手に取り、室内灯の明かりに透かすようにして見せてきた。瓶の底にうつすらと貼り付いているほどの量だった。ウイケウスの種は、かなり小さい。これだけあれば充分すぎるくらいだ。

「ありがとうございます。半分ほどあれば充分です」

「全部、使つても問題ないよ？」

「いえ、全部植えるとする、かなり広い面積が必要になります。

そうなる、ちよつと大変なので、半分で充分です」

「そうなんだ」

わたしはなにも入っていない小瓶を棚から取りだし、ラーウスさまからウイケウスの種の入った小瓶を預かり、半分ほどいただいた。

「ところで、ラーウスさま」

「うん」

「今日は、わたしはなにかお手伝い、ありますか？」

「お願いするとすれば、薬草園の手入れかな」

「はい、かしこまりました」

街着のままでは畑仕事ができないので、一度、自室に戻って作業がしやすい服に着替えた。ラーウスさまからいただいたウイケウスの種の入った小瓶は落として割らないようにポケットに入れ、つばの広い帽子もしっかりかぶると、薬草園へと向かった。

ラーウスさまは国の最高位の魔法使いであるが、実は植物学の専門家だったりする。そうか、だからウイケウスの種も持っていたのか、と、今になって納得した。

まずは、薬草園の植物たちに水やりをする。今は冬なので、植物の種類もそれほど多くはないからかなり楽だ。これから春になるにつれ、種類が増えてくるから、大変になってくる。

ラーウスさまの元で働くようになってから、わたしもだいぶ、植物に詳しくなっただけけれど、まだまだ知らないものも多くて、勉強中だ。

ウイケウスは、日なたよりも、薄暗くて少しじめつとした路地裏のような場所を好む。そういう場所に植えられる植物は少なく、ちょうどよいところになにも植えてない場所があった。

わたしは鍬くわを持ち、ウイケウスを植えるあたりを耕した。

植える場所を耕した後は、五角形の形に幅が広めでかなり深めの溝を掘った。こうしておく、さすがのウイケウスも根を広げることができなくて、ここより先に繁殖先を広げようとしないので。

五角形の角ごとに先ほど買った木の棒を立てる。これはなにかというと、ウングラ避けの網を張るための支柱だ。網は先ほど街で入手した縄を利用して、わたしが編む。

今日はこの耕した場所にウイケウスの種を撒き、水やりをして終わりにしよう。網は花が咲くまでに作れば問題ないから少しずつ作っていこう。……といっても、そんなにのんびりはしてられない。ウイケウスは、季節に関係なく、種を撒いてから一週間後に花を咲かせるのだ。

「今日はこれでよし、と」

予定していた作業を終えた頃には、太陽が真上に来ていた。ちょうどお昼だった。

部屋に戻ると、ラーウスさまとわたしの昼食がすでに用意されていた。

「ルベル、今、呼びに行こうとしていたんだけど、ちょうどよいところに戻ってきたね」

「今日の薬草園での作業は終了です」

「もう種を撒き終えたのかい？」

「はい」

「お昼を食べながら話を聞こうか」

「はい」

わたしたちは、昼食が用意されたテーブルに向かい、並んで座った。

ちなみに、ラーウスさまと一緒に昼食を摂るのは、結婚前からだ。本来ならば、わたしが王子であるラーウスさまと一緒にテーブルについて、食事をするなんてとんでもないことなただけけれど、ラーウスさまの強い希望により、お昼はこうして食べることになってしまっていた。さらには、横並びなのも、ラーウスさまの希望によってだ。わたしとしては、見目麗しいお顔を見ながら食事をするのは恥ずかしいので、横並びで助かっていた。

「それで」

と、ラーウスさまは毒味が終わったスープを飲みながら、わたしに聞いてきた。

「薬草園の様子は？」

「特に変わりなく」

ラーウスさまも毎日、きちんと自分の目で確認されているというのに、昼食を食べながら、わたしに様子を報告させるのが日課だ。

「ところで、ウイケウスはどこに植えたのかい？」

「はい。ウイケウスは薄暗くてじめつとしたところを好みますので、薬草園の端の、日当たりの悪いところに撒きました」

「へえ、初めて知ったな」

「そうですね、ウイケウスはどこでも育ちますし、どちらかというところ、疎まれている植物ですから、あまり研究がなされていないかもしれません」

「そうだね。駆除の方法は広く知られているけれどね」

ラーウスさまがおっしゃるとおり、ウイケウスは繁殖力が強い上に、花が咲くと、ウングラに周りまで荒らされるため、見つけ次第、駆除されるものだ。

「それにしても、ルベルがウイケウスに造詣が深かったとは知らなかったよ」

「わたしの家は、ウイケウスの栽培をしていますから」

「えっ、そうだったのかい？」

「はい。町外れにある畑で、ウイケウスを栽培して、町の人たちに売っています」

「それは、昔から？」

「はい。先祖代々、そうやって来たと聞いています」

と、そこまでラーウスさまに説明をして、ふと口を噤んだ。

ウイケウスが不作で、わたしの手元に届かないということは、町の人たちも困っているのではないだろうか。

ウイケウスは成長が早いけれど、一つだけ問題があった。

故郷でも例外なく、薄暗くてじめつとしたところに植えている。

そのせいもあり、ウイケウスの花は水をかなり含んでいて、乾燥させるのに時間がかかるのだ。

乾燥させるのにも、日当たりのよいところだと香りが飛んでしま

うので、専用の小屋を作ってそこで乾燥させるのだけど、風通りをよくしても、日陰ということもあり、なかなか乾かないのだ。種を撒いてから花が咲くまでは一週間だが、収穫してから完全に乾くまでに一ヶ月くらいかかってしまう。

「ルベル？」

黙ってしまったわたしを、ラーウスさまは心配そうな表情で、のぞきこんできた。

「顔が近いです！」

「はっ、はいっ！」

「なにか心配事でも？」

「あ……その……」

小屋にはもちろん、ウングラが入れないようにしてあるし、乾燥した物には興味がないようだ。

ただし、採取してきたばかりのウイケウスの取り扱いは、十分に気をつけないといけない。

ウングラには鼻がない代わりに、目がよいようで、ウイケウスの花を見つければ、一目散に駆けつけてくるのだ。採取して、小屋に運ぶまで、気が抜けない。

「ただ、父と兄はそれを熟知しているから、大丈夫だと思うのだけど……。でも、やはり、なにか引かかる。」

「ラーウスさま」

「うん」

「やっぱり、おかしいんです」

「おかしいとは、なにが？」

「ウイケウスが不作だなんて、考えられません」



「まあ……そうだね」

「わたし、一度、アウリスに戻りたいです」

「うん、そうだね。キミのご両親にも結婚の報告もしたいし、一緒に行こうか」

まさかの同行に、わたしは言葉を失った。

\*十三\* 意外に器用なんだね

ラーウスさまの提案に、わたしは言葉を失った。  
え、ラーウスさまがアウリスに行くのっ？  
ってことは……。

「思いつきで言ったけど、いい提案だと思わない？」

ラーウスさまはにこやかにそんなことをおっしゃった。  
なにがいい提案なのでしょうか。

ラーウスさまは、第三とはいえ、王子だ。いくらお忍びでと言っても、護衛はわたしを入れて三人以上は必要だろう。  
アウリスの状況が分からない現在、あそこが獣人たちが住む町だと知る人が少ない方がいいに決まっている。

「だっ、駄目です！」

「どうして？」

「どうしてって、ラーウスさまとわたしだけで行くのなら、なににも問題ないのですが、お忍びで行くとしても、護衛が必要ではないですか！」

そう反論した後、とんでもないことを口にしてしまったと、慌てて口を押さえたけれど、遅かった。

ラーウスさまが、楽しそうに笑ったからだ。

「なるほど。それはいい考えだね」

「なっ、なにがですかっ！」  
「今、いいことを思いついたんだ」

また、ラーウスさまの“いいこと”発言が飛び出して、わたしは思わず、ため息を吐いた。また口クでもないことに決まっている。

「要するに、ばれなければいいんだ」

「……え？」

「だれにも内緒で、私とルベルの二人だけでアウリスに行こうか」  
「ええええっ！」

いやいや、それ、マズイでしょ！

日帰りできる場所ならともかくとして、早馬で片道一日の距離ですよ？ どうするつもりなのよ。

「私も準備がいるから、出発は一週間後にしよう。ちょうど、ウィケウスの花も咲く頃だろう？」

「そうですね……」

「大丈夫だよ、心配することはなにもない」

そう言っつて、機嫌良く笑うラーウスさまに対して、わたしは不安で仕方がなかった。

それからどうなったかというと、わたしは普段と変わらない生活だった。一方のラーウスさまは、なにやらいつも以上にお忙しそうだった。わたしが手伝えることといえば、薬草園から指定された薬草を採ってくるくらいで、それはいつもと変わらなかった。

とはいえ、わたしは暇をしていたかというと、わたしはわたしで

それなりに忙しかった。それというのも、ラーウスさまの仕事を手伝う合間をぬって、ウイケウスの花が咲くまでに、街で買って来た縄を使って、ウングラ避けの網を作らなければいけなかったからだ。これがまた、大変な作業なのだ。

ウングラは目がいいため、目隠しをしなければならぬ。板状のもので囲えるのならば、楽なだけど、それだと、風通りが悪いため、ウイケウスの花の匂いが悪くなってしまいうらしいのだ。

そのため、縄を使って五角形の模様の網を編んで、目隠しとする。どうして五角形なのかというと、今までの経験上、ウングラの目を欺けるからだという。

実家のウイケウスの畑の周りには、五角形模様の網が張り巡らされていくけれど、これがあるため、わたしが知る限りでは、ウングラの被害に遭ったことがない。

わたしがせつせと編んでいると、ラーウスさまが興味深そうに手元をのぞき込んできた。

「ルベルは、なにをしているんだい？」

「ウングラ避けの網を編んでいるんです」

「そんなものがあるのかい？」

「はい。ウングラは目がいいのですが、この網で囲えば、なぜか欺けるのです」

と作業途中の網を見せれば、ラーウスさまは深くうなずいた。

「なるほど。これは虫除けの魔方陣だね」

「え……？」

「ルベルは虫の目を見たことがあるかい？」

「ありますけど……」

「よーっく見ると、六角形や五角形の複数の目が隙間なく並んでいることを知っているかい？」

「いえ、初めて知りました」

「たぶんだけれど、この網を見て、ほかの虫がいると思って、寄ってこないのではないのかな」

「……そういうことなのですか」

ウングラは目が良いため、遠くからでも見える。縄張り意識が強いウングラは、別の虫がいると思って、近寄らない、ということか。

「どうして五角形なのか、ずっと疑問に思っていたのですが、そういう理由だったのですね」

理由が分かれば、納得だけど、それにしても、ラーウスさまはやはり物知りだ。

「ところで、かなり大きなものだけど、これ、どれくらい編むの？」

「畑の幅に合わせてなので、横はこれくらいですけど、縦はウイケウスの丈に合わせてなので、これの倍くらいですね」

「畑の幅に合わせてと言うけれど、ルベルがウイケウスを撒いたところを見てきたけれど、深い溝が五角形に掘られていたけれど、この網、五枚作るってことだよな？」

「はい、そうです」

「それ、大変だよな？」

「大変ですけど、すでに二枚はできています」

「え、もう二枚できてるの？」

「はい」

久しぶりだったから、一枚目は感覚が戻るまで手こずったけれど、コツを思い出してからは、さくさくと編むことができたから、すでに三枚目だ。一日に一枚の計算だから、どうにか間に合いそうだ。

「ルベル、キミは意外にも器用だったんだね」

ラーウスさま、微妙に失礼なことを言ってますか？ と思ったけれど、そう思われても仕方がないかもしれない。なにせ、ラーウスさまの手伝いを始めた頃は、緊張し過ぎて、失敗ばかりしていたのだから。

「ルベル、一つ、頼まれてくれるかい？」

ラーウスさまはわたしが編んだ網に視線を落としながら、口を開いた。

「この大きさを構わないから、まだ編むことはできるかい？」

「はい、できますけど……？」

「出発の日までに、編めるだけ編んで欲しい」

「編むのはいいですけど、縄が足りないから、買い足しに行こうかと思っていたところでした……」

長めに買って来たのだけど、高さを予定より高くしたため、足りなくなっていたのだ。頃合いを見て、追加を買いに行こうと思っていたのだ。

「それなら、多めに買って来てくれないか」

「はい。それでは、ラーウスさま。お昼の後、少し外出してもよろしいですか？」

「ああ、いいよ」

あっさりと外出の許可をもらえて、ホッとした。

「そろそろ、お昼だね。ちょうどぎりもよいし、そろそろ食べよう」

か  
「

ラーウスさまの誘いに、わたしはうなずいた。

いつものように、並んで食べていると、ラーウスさまが口を開いた。

「そういえば、ルベル」

「はい」

「今日の水まきは終わったのかい？」

「はい。朝一番に水をやりに行ってきました。そうでした、報告がありました」

水まきをしているときに気がついたことがあったから、ラーウスさまに報告をしようと思って戻ってきたら、取り込み中だったので、後回しにしていたことを思い出した。

「ニックスに蕾ができていました」

ニックスは、冬の、しかも夜にしか咲かない花だ。蕾ができていくということは、今日か明日あたりに花を咲かせると思われる。

「ルベル、悪いけれど、今日と明日の夜は、ニックスの見張りだ」

「はい」

ニックスの葉には毒がたっぷり含まれているけれど、その花には、薬となる貴重な成分が含まれているという。

「アウリスに行っている間に咲かれなくてよかった」

「……そうですね」

ラーウスさま、本気でアウリスに行くつもりでいるの？ と改め  
て思ったけれど、突っ込みはしないことにした。

「今日と明日は夜通しの待ちとなるから、今日は仕事を早く切り上  
げて、仮眠しよう」

「はい」



\* 十四 \* ニックスの花摘み

お昼を食べた後、わたしは街へ縄を買いに行った。わたしが街に出ている間、ラーウスさまは、今日の夜のために、仕事を終わらせた。

街から執務室に帰ると、ラーウスさまはすでに湯浴みを済ませて、ベッドに転がって、本を読んでいた。

「ルベル、お帰り」

「ただいま戻りました」

「ルベルもすぐに寝る用意をしておいで」

「はい」

こんなにくつろいでいるラーウスさまを見るのは初めてかもしれない、なんて思いながら、隣の自室へ向かい、湯浴みをした。

それにしても、専用に湯浴みができるなんて、なんて贅沢だろうか。

寝る準備をして、ラーウスさまのところに戻ると、疲れがたまっていたのか、すでに眠っていた。

ラーウスさまを起こさないようにそっと布団に入り、そっとその背に抱きついた。途端、ラーウスさまから、わたしの大好きな甘い匂いが漂ってきた。

「ん……ルベル？」

「あ、すみません、起こしてしまいましたか？」

「いや、私はいつの間寝てしまっていたんだろっ」

ラーウスさまは寝返りを打って、わたしの方へ身体を向けると、やさしく抱きしめて来てくれた。

「このところ、お仕事が忙しそうでしたから、疲れがたまっているのではないですか」

「疲れてはいないよ。ルベルが帰ってきて、ホッとしたんだと思うよ」

「え……？」

「街に出ると言って、私を置いて、アウリスに行ってしまったかもしれないと思ったんだ」

そんなこと、考えたことがなかったから、わたしは慌てて首を振った。

「どうしてそんなことをしないといけないのですか」

「……私がアウリスに行くのは、迷惑かと考えていた」

「迷惑だなんて、そんな……！」

思いもよらないことを言われて、わたしは思いっきり否定するために首を振った。

「ラーウスさまにお休みをいただきに行ったとき、もらえなかったらごっそり抜け出そうとは思いましたよ？」

「ほら、やっぱり思ってたんだ」

「でも、それは……！」

もしもラーウスさまに、わたしが獣人であるというのがバレなければ、そうしていたかもしれない。だけど、運悪く、バレてしまった。

「ラーウスさまにわたしの正体を知られてしまいましたし、故郷の場所も把握されてしまったから、逃げても無駄だと悟りました」

「ルベルは驚くほど、私の性格を見抜いているね」

「え？」

「ルベルが私の元から逃げても、どこまでも追いかけるつもりでいたんだよ」

「……………」

ラーウスさま、怖い。

しかもラーウスさまの魔法の腕であれば、それが可能であるだろうから、余計に怖い！

「でも、逃げなかった」

「……………はい、逃げません」

そう言って、真っ直ぐにラーウスさまを見つめれば、嬉しそうに笑ってくれた。

その笑みは、わたしの大好きな笑みだった。

「私がルベルを追いかけていたつもりだったけれど、いつの間にかわたしがルベルに捕まってしまったようだ」

そう言って、ラーウスさまはわたしの頬にキスをした。

「ルベル、愛しているよ」

「わっ、わたしも……………そのっ」

「うん」

「あ……………あ、あい……………して、ま、す」

真つ赤になりながら伝えると、ラーウスさまは蕩けるような笑みを浮かべてくれた。

「ルベルから愛の言葉をもらえるとは、私はなんて、贅沢なのだろうか」

「ラーウスさま……」

ラーウスさまは甘い笑みを浮かべると、今度は反対側の頬にキスをした。

わたしとラーウスさまは仮眠を取り、月が輝く中、しっかりと防寒をして、薬草園へと向かった。

ニックスの花が咲くのを待つのは、薬草園で使う道具を入れている小さな小屋だ。防寒してきているとは言え、さすがに外で待つのは寒すぎる。火は焚けないけれど、風よけができるだけ、まだこの小屋の中はマシだ。

小屋に入ると、わたしは花を摘んだ後に入れる籠と、はさみを用意した。

「ルベル、寒いだろう？」

「いえ、大丈夫ですけど。ラーウスさまは寒いですか？」

と問えば、

「少し寒いかな。だから、ルベル。もっと近くに来てくれないか」

そういえば、昨年と同じように言われたことを思い出した。

そのときはなにも考えないで側に寄ったら、ニックスの花が咲く

まですっと、抱きしめられていた。

わたしは犬の獣人であるから、寒さには強い。それに、寒いといつても、アウリスに比べれば、ここは暖かいから、寒いには寒いけれど、我慢できない寒さではなかった。

ラーウスさまに言われるままに近寄れば、やはりギュッと抱きしめられた。

「ルベルは暖かいね」

「ラーウスさまも暖かいですよ」

「ルベルを抱きしめていると、心まで温かくなるんだ」

ラーウスさまにそう言われて、わたしも同じような気持ちでいることに気がついた。

ラーウスさまの側にいると、心が落ち着くし、なんだか温かな気持ちになる。それが好きという気持ちだと気がついたのは、つい最近のことだ。

騎士団長にどんなことがあっても動揺するなど言われていたから、自分の気持ちに対して、少し鈍感になっていたのかもしれない。

「わたしも、同じです」

「私たちは、気が合うね」

「……そうかもしれません」

「うん。ルベルを選んだのは、間違いでなかった。私の仕事も、私のごとも理解してくれているし、こうして、同じような気持ちでいてくれる。これはとても貴重なことだよ」

ラーウスさまはそうおっしゃってくれるけれど、ラーウスさまこそ、わたしのことをよくご存じだと思う。

それに、一緒にいるととても居心地がいいし、なによりも、ラーウスさまの甘い匂いが、わたしは大好きだ。それが魔力の匂いであ

ると知った今でも、わたしが特殊な体質であることも幸いして、ラーウスさまはいなくてはならない存在になっていた。

「わたし、ラーウスさまとお知り合いになれて、とてもよかったです」

「ルベル、それは私の科白せじふだよ。ルベルと知り合わなければ、こうして元気に研究を続けられなかったのだから」

知り合う前のラーウスさまは、確かに遠目から見ても、いつも顔色が悪かった。遠くからでも、無理しているのが分かるくらいだったから、相当、苦しかったのだと思う。

そんな話をしていると、ニックスの花がふわり……と咲いたのが匂いで分かった。

「ラーウスさま、ニックスの花が開きました」

「えっ？」

「早く行って、採取しましょう」

「見てもないのに咲いたのが分かるのかい？」

口にした後に、しまったと思ったけれど、昨年までならともかく、今はラーウスさまに自分が獣人だとバレてしまっているから、からくりを話すことにした。

「ニックスの花が開く瞬間、とってもいい香りがするんです」

たとえば、ラーウスさまは、鼻をヒクヒクとさせていた。

それがちょっとかわいいと思ったのは、ラーウスさまには内緒にしておこう。

「……分からないな」

「わたしは犬の獣人ですから、人よりも匂いに敏感なのかもしれない  
せん」

「ああ、なるほど。それで昨年も、その前の年も、咲いたらすぐに  
分かったのか」

「そうです」

昨年までは、花が開いた匂いがした後、そろそろかもしれない  
すねと誘導した覚えがあった。今年はすっかり油断していて、見る  
前に咲いていることを伝えてしまった。

「ふむ。やはりルベルは私にはとても必要だな」

「え」

「ルベルの選んでくる薬草は、どれも質がいいんだ。それは匂いで  
わかるのかい？」

「え、と。はい」

目で見ても、違いが分からないときは、匂いがよいものを選んで  
いるのだけど、それが質と繋がっていたとは思いつかなかった。

「なるほどね」

ラーウスさまは納得したのか、わたしの手を取ると、小屋から出  
た。

今日は雲一つない夜空で、まん丸な月が空の上に浮かんでいて、  
灯りがなくても充分に明るかった。

そんな中、ニックスの花が幻想的なまでに美しく、開いていた。

ニックスの花は、透き通った水色をした、儂い花弁を持つ花だ。

茎と葉には毒があるが、花には薬となる貴重な成分がたっぷり含ま  
れているという。その成分がなにかは、ラーウスさまから説明をさ

れたけれど、よく分からなかった。とにかく、冬の一晩だけ咲く、貴重な花。

「一、二、三……うん、今年はよく咲いてるね」

「はい。どれくらい採取しますか？」

「そうだね。来年のために種を取らなければならないから、半分くらいは花を摘もうか」

「はい、かしこまりました」

わたしとラーウスさまは手分けをして、花卉の部分をつまみ、茎と葉を触らないようにしながら、丁寧に摘んでいった。

ラーウスさまがおっしゃったように、今年はたくさん咲いているため、用意していた籠にいっぱいになった。

「これだけあれば、当分、困らないな」

「そうですね」

「執務室に戻って、乾燥させよう」

「はい」

わたしたちは小屋にはさみを戻すと、籠だけ抱えて執務室に戻り、紙の上に花を広げた。

「さて、思ったより早く終わったね」

「そうですね」

「それでは、寝ようか」

ラーウスさまにそう言われて、急に眠気が襲ってきたので、あくびをしたら、笑われた。

「ふふっ、かわいいな」



ラーウスさまはわたしを見て、幸せそうに笑った。

\* 十五\* 小屋ができることになりました

ニックスの花を摘んだ、次の日の朝。

予想より早く摘めたことと、仮眠を取っていたので、朝の目覚めは思ったよりも清々しいものだった。

カーテンの隙間から差し込む朝日に目を細めながら、そっと自分の頭を撫でると、いつもならある耳が今日もやはりなかった。ウイケウスを煎じたお茶を飲んでいないのに、どうしてなんだろうか。

耳と尻尾がなくなった訳ではない。理由はわからないけれど、ウイケウスの花を嗅がなくてもいいから、とても楽だ。

わたしたち獣人は、基本は獣の姿なので、意識さえすれば、耳と尻尾を出すことはできるのだが、その逆は意識しても無理なのだ。だから、ウイケウスの花の力を借りることになる。なんとも不便な作りになっていると思うけれど、人間に化けるといって語弊があるけれど、従来の姿ではないものになるためにはなにか媒介がないとなれないと思えば、納得は行く。

それなのに、ここ数日のわたしは、ウイケウスの花の力を借りなくとも、耳と尻尾が出ていない。どうしてなんだろう。

そんなことを悩んでいると、ラーウスさまも目を覚ましたようだった。

「おはようございます、ラーウスさま」

「ルベル、おはよう」

少し寝ぼけ眼のラーウスさまを見て、きゅんっと胸が騒いだ。

こんなに油断した姿を見せてくれるということは、それだけわたしに対して心を許してくれている、ということだと思つと、ラーウスさまに対して、さらに愛しさが増すのだから、不思議だ。

「それにしても、ルベルはいつも朝が早いね」

「早くはないですよ。わたしも今、目が覚めたところですから」

「それでも、起こされてもないのに、自然に目が覚めているではないか」

少し恨みがましそうに言われたけれど、自然と目が覚めるのだから、仕方がないのではないでしょうか。

「ご飯を食べたら、ニックスの花の様子を見に行こうか」

「はい、そうですね」

昨日の夜、すべての花を摘まなかったため、残したニックスの花がどのような状態になっているのか、確認しておかなければならない。

ラーウスさまはわたしの頬におはよふのキスをすると起き上がり、着替え始めた。

毎朝のこととはいえ、わたしは未だにそれに慣れない。

赤い顔をしながらベッドから降りて、隣の部屋に行き、畑作業がしやすい服に着替えた。そういえば、ここどころ、騎士服に袖を通していないような気がする。それだけこの国が平和だという証拠なのだろう。

わたしたちは、それぞれの部屋で朝食を済ませて、執務室へと向かった。

ラーウスさまはすでに机に着いていて、なにやら調べ物をしていた。

わたしが入って来たのを視界の端で確認すると、椅子から立ち上がった。

「それでは、行くか」

「はい」

薬草園に行くには、執務室のベランダに一度出て、そこから庭に降りて行く。

「ベランダに小さな小屋を建てようと思っているんだ」

「小屋……ですか？」

「ああ。執務室で薬草を乾燥させるにも、スペースがそろそろ足りないだろう」

「そうですね」

今の執務室の半分は、薬草を乾燥させるために埋まっている状態だ。四分の一のスペースにはラウウスさまの蔵書と書類、残り四分の一が執務スペースとかなり狭い。

「幸いなことに、ベランダは無駄に広いから、ここを小屋にしても問題ないだろう」

「……問題ないというより、見た目の問題で……」

せつかくのベランダに小屋を置くと、執務室に入ってくる光も遮られるし、そしてなによりも、そんなものがあるのは景観的にどうなんだろうか。

「それなら、問題ないよ。ベランダに合った小屋の外観を考えているし、そしてなにより、すでに王の許可は取ってある」

うん、相変わらずやることは早いですね。

「小屋は今日から作業に入って、三日後には完成予定になっている」  
「三日後……ですか？」

そんなに早くできるものなのだろうか。それに、三日後ってちょうど、ウイケウスの花が咲く頃ではないだろうか。

「ウイケウスの花を乾燥させる場所がないだろうか？」

「はい」

「そこを使えばいいよ」

まさかそこまで考えてくださっているとは思わず、驚きのあまり、足を止めた。

「ルベル？」

「ラーウスさま……その、すごく、すごく嬉しいです！」

あまりの嬉しさに、ラーウスさまに思わず抱きついてしまった。

「ありがとうございます！」

嬉しすぎて、無意識のうちにこんな行動に出してしまったのだけれど、ラーウスさまから甘い香りが漂ってきたことで、ハッと気がつき、慌てて身体を離そうとしたら、ぐっと腰を引きつけられた。

「まさかルベルから抱きついてくれるとは思わなかったよ」

「す、すみません！ あまりにも嬉しくて、つい。失礼しました！」

「いや、私もルベルがこんなに喜んでくれるとは思わなくて、すごく嬉しいよ」

ラーウスさまはわたしの身体をギュッと抱きしめると、額にキスをしてきた。

「ああ、ルベル。すごくかわいい」

「っ！」

「仕事でなければ、このままベッドに持ち帰りたい」

「ラッ、ラーウスさまっ！」

「ほんと、かわいいなあ。かわいくて、手放したくないよ」

ラーウスさまはことあるごとにわたしのことを“かわいい”とおっしゃるけれど、そんなにかわいいと思うような行動を取っているとは思えない。

「ルベル、私は本当に幸せ者だよ。好きな人が常に側にいて、一緒に仕事ができる。私は今、本当に幸せだよ」

そう言って笑ったラーウスさまの笑顔に、わたしは思わず、見とれてしまった。

本当に幸せそうに笑っていて、わたしもつられて、笑みを浮かべた。

「わたしも、幸せ過ぎて怖いくらいです」

「怖くはないよ、ルベル。なにも心配しなくていい」

ラーウスさまはもう一度、わたしの額にキスをする、するりと腰から手を離し、手を握ってきた。

「さて、様子を見に行こうか」

「はい」

わたしたちは手を繋いで、並んでニックスの花の元へと行った。  
ニックスの花は、太陽の光の下では、しんなりとしぼんでいた。  
昨日の幻想的なまでも美しい花弁を知っているだけに、ちよつと淋しい気分になったけれど、それでも、ニックスの花は、しぼんでいても美しかった。

「このまま置いておけば、問題なく種になりそうだね」

「そうですね。毎日、確認しますね」

「ああ、そうしてくれると助かる。種になったら、葉と茎に気をつけて、種を回収して」

「はい」

「種を回収したら、葉と茎も抜くけれど、それはわたしがやるから」  
「はい、かしこまりました」

ニックスの葉と茎には毒が含まれているから、扱いを慎重にしなければならぬ。とはいえ、きちんと扱えば、そんなに恐ろしいものではないのだ。それに、少量であれば、薬になる。そのため、ラーウスさまは少しだけ残して、後は処分をされているようだ。

「それでは、ルベル。いつものように、薬草園の手入れを頼んだよ」

ラーウスさまは名残惜しそうに、繋いでいた手を離し、それだけ告げると執務室に戻っていった。

ここから執務室の中をのぞくことは難しいけれど、執務室の中からは外がよく見える。

早いところ作業を済ませて、執務室に戻ろうと心に決めて、わたしは薬草たちに水をあげるためにバケツとひしゃくを準備した。

\*十六\* もっと笑ってよ

薬草園に水をあげたり、様子を見たりしていると、ベランダにわらわらと人が集まってきていた。

どうやら、小屋を建てるための大工さんがやってきたようだった。

ラーウスさまは執務室から出てきて、なにか指示を出していた。大工の棟梁らしき人と話をしていて、しきりにうなずいていた。

わたしは手早く作業を済まし、ラーウスさまの元へと向かった。

「ああ、ルベル。小屋はもう組むだけらしいので、お昼過ぎにはできそうだよ」

「え、早いですね」

「それほど大きなものではないからね。ところで、ルベル」

「はい」

「本当にこんなに風通しのよい小屋にしてしまっているのかい？」

とラーウスさまは棟梁から受け取った設計図をわたしに見せてきた。

設計図を見ただけではよく分からないから、首を傾げていると、横から、棟梁が完成図を見せてくれた。これなら分かりやすい。

そこに書かれていた小屋は、白を基調としたもので、小屋というより、木の板が敷かれた四方に柱があり、屋根がある、大きめのガゼボみたいなものだった。



「前にルベルからウイケウスの花は風通しのよい小屋で乾燥させると聞いていたから、私なりにいろいろと資料に当たって考えてみたのだよ」

「え、これ、ラーウスさまが設計されたんですか？」

「いや、完成図だけだ。ここに置いても問題のない見た目と、風通しの良さを兼ね備えた小屋と考えたら、こういうものになったわけなんだが……」

たしかにこれだと風通しはよいけれど、風を遮るものもないし、雨が降ったら、横から降り込んできてしまう。

「これでもいいのですが」

「うん」

「壁がないんですね」

「ああ、壁はルベルが編んでいた編みを代用してはどうだろうか」

「え……それだと、雨が降り込んだとき、困りませんか？」

「そこは雨避けの魔法を掛けるから、大丈夫だよ」

ああ、そうか。

ラーウスさまは植物学が専門とはいえ、国最高位の魔法使いだった。すっかり忘れていた。

「問題がなさそうです」

「ふむ。それなら、これですすめてほしい」

「はい、かしこまりました」

強面の棟梁はラーウスさまから恭しく完成図と設計図を受け取ると、作業員たちに指示を出し始めた。

「すごい、素敵です。小屋というよりガゼボみたいです」

「ああ、そう言われてみれば、そうだな」

わたしたちは部屋に戻り、トンカンと音が響く中、仕事をした。そして、棟梁が言ったとおり、小屋はお昼までにできあがった。完成図もよかったけれど、実物はとても素敵だった。

木の板で少し高めになった床の四方に頑丈な白い柱が立ち、さらには真つ白に塗られた木の板が屋根根になっていた。この四方を囲む網を編むのは、結構大変かもしれない。だけど、そうすることで風通しがよくなるのなら、頑張るしかない。

お昼ご飯を食べた後、わたしは早速、小屋の掃除をして、ウイケウスの花を干す準備をし始めた。

ウイケウスの花を干すのは、根っこから引っこ抜いて、束にして、逆さにして乾燥させる。乾燥が終われば、花と葉と茎とより分けて、花だけを煎じて飲むのだ。葉と茎は、よく燃えるので、薪に火を付ける基材となったりする。ウイケウスの花は甘い香りがするのもあり、葉と茎も燃やすと特有の甘い香りがして、わたしは結構、好きだ。

なぜ、花だけ乾燥させないのかというと、ウイケウスは花だけ必要なだけれども、葉と茎も水分を多く含んでいるため、普通に燃やせないのだ。それに、下手にその辺りに捨ててしまうと、ウングラがやってきて荒らしてしまうため、時間が掛かっても乾燥させて、燃やしてしまうのが一番なのだ。

葉と茎にも利用方法があればいいのだけど、今のところは廃棄処分するしかない。

乾かすための竿の調達と、追加で縄も買ってこなくてはならなくなつた。

ああ、先ほどの大工さんたちに乾かす竿も作ってもらえばよかったのかと思っただけれど、すでに遅かった。この間、買い物したお店でまた仕入れてこよう。

そんなことをつらつらと考えていると、ラーウスさまが小屋にやってきた。

「壁がないと、こんなに寒いのか」

「ええ、そうですね。遮る物がないですから」

「ウイケウスの花は寒くても平気なのかい？」

「ええ。アウリスでも問題なく育ちますから、寒さには丈夫なのかもしれません」

雪が降っていても花を咲かせるくらいだから、寒さにはとても強いのだと思う。

「温度よりも、風通りが重要だと父が申しおりました」

「ふむ。なかなか興味深い。今度、ウイケウスについて論文でも書こうかな」

「え……」

ラーウスさまは植物学者であるから、論文を書いても問題がないけれど、いろいろと支障がないだろうか。

「私が論文を書いたら、ルベルは困る？」

質問に即答できなくて、口ごもっていると、察してくれたらしく、ラーウスさまは苦笑を浮かべた。

「論文を書くのなら、アウリスのことを書かなくてはならないか。それは困るね」

「……すみません、ラーウスさまの研究を邪魔するような……その……」

言葉を探しているうちに、ラーウスさまはわたしの頭を撫でてきた。また耳でも出てきてしまっているのだろうかと思っ慌てて頭の上に手を当てると、ラーウスさまは笑った。

「大丈夫、出てないよ」

「う……………」

「論文を書くのはしないけれど、一植物学者として、ウイケウスはなかなか興味深いのだよ。だから、研究はさせてほしいな」

「……………それなら、問題ないかと思えます」

「心配することはない。研究結果はどこにも発表しないから。私個人の好奇心が刺激されたというか……………」

研究熱心で仕事馬鹿なラーウスさまらしい言葉に、わたしは思わず笑ってしまった。

そんなわたしを見たラーウスさまは、なぜか急に赤い顔になった。

「ルベルが笑っているところ、すごくかわいい……………！」

「えっ」

「ルベル、もっと笑ってよ」

「そっおっしゃっても……………」

騎士団長からきつく言われていることの一つに、勤務中の態度がある。勤務中の私語はもつてのほかで、さらには、表情も変えてはならないと言われているのだ。

騎士団長がわたしの普段の仕事ぶりを見たら、怒られそうなことをやっているけれど、それはラーウスさまの意向も大きくあるから、小言で済むとは思っけれど、改めて自分の行動を鑑みると、気安くないような気がしないでもない、と、今さらながらに思った。

「ルベル、もっと私のために笑ってよ」

そう言って、ラーウスさまはわたしの頬を手の甲ですりりと撫でてきた。思わず、身を竦めてしまう。

「ルベルが幸せそうに笑っているのが、私の幸せなんだよ」  
「ラーウスさま……」

ラーウスさまはわたしの結んだ髪の毛を一房ほど手に取ると、毛先にキスをした。

「ルベルのことが、愛しくて仕方がないんだ」

今、お仕事中ですよ、と言いたかったけれど、ラーウスさまから漂ってくる甘い匂いにやられたわたしは、なにも言えなかった。

それにしても、ラーウスさま、なんで急にこんなに甘くなってしまったのでしょうか。

恥ずかしいから、勤務中は控えていただきたいです！

\*十七\* 獣人のこと

ウイケウスの種を撒いてから、一週間が経った。

予定どおり、ウイケウスは今日の朝、花を咲かせた。花が開く瞬間の弾けるような芳香は寝室にまで届いていた。

ラーウスさまにウイケウスが咲いたことを知らせると、朝食後に、薬草園に赴いてくださった。

ウイケウスの独特の甘い香りが、薬草園全体に広がっていた。

「ああ、この香りだ」

ウイケウスの畑の前で、ラーウスさまはそう呟いた。

「ルベルからする香りと一緒にだ」

「え……」

「いつも甘くていい匂いがすると思っていたけれど、そうか、ウイケウスの花の香りだったのか」

前にラーウスさまは、ウイケウスの花の見た目と香りが好きだとおっしゃっていたのを思い出した。

「ずっと疑問に思っていたんだ。ルベルから、どこかで嗅いだ匂いがして、それがなにか思い出せなくて、モヤモヤしていたんだよ」

「毎日、ウイケウスを煎じて飲んでるから、匂いがするのではしょつか」

もし、そうだったのならば、匂いで獣人とバレてしまうのではないだろうか。

「そういう感じではなくて、ルベルの持ち物からするから、匂いが染みついているのではないのかな」

ウイケウスの花の香りは好きなので、タンスの中にポプリを入れているし、ブレスレットにもウイケウスの花を仕込んでいるし、言われてみれば、匂いがしないわけがない。日常的にしている匂いだから、鈍感になっていた。

この匂いがウイケウスだと知る人がいて、獣人と縁が深い植物ということも知っていれば、必然的にバレてしまうということ……。。

「匂いから獣人ってばれてしまいそうですね」

と思わず呟けば、ラーウスさまは首を振った。

「その心配は無用だよ」

「え、どうしてですか？」

「まず、ウイケウスの花の匂いを知っている者が少ないし、そしてなにより、獣人がこれを煎じて飲んでいるというのも、知る者は少ない」

「しかし、」

と反論しようとしたところで、一度、口を閉じた。

ラーウスさまは首を傾げて、無言でわたしに続きを促してきたので、意を決して口を開いた。

「知る者が少なくても、もしも、知っている人が獣人を忌み嫌って

いて、このことを広げたら……」

「ルベル、今までそんなことはなかったし、私は知ってしまったけれど、だれかに言うつもりはまったくくないよ」

「……………」

「ルベルは私のことを疑っているのかい？」

「いえっ、そういうわけではありません！」

ラーウスさまを疑っているのではなく、秘密というのはいつかどこから洩れるものだ。そのことを危惧しているのだけでも、それを口にすれば、わたしがラーウスさまを疑っているようで、そう思われるのは嫌だったので、違うという意味を込めて、首を大きく振った。

「ルベル、私はね」

ラーウスさまはそういうと、わたしの手を取った。

「ルベルが獣人でよかったと思っていたんだ」

「え……………」

「ルベルも知っているとと思うけれど、一部の貴族が獣人を鎖にしないで“飼って”いるのを知っている。私はそれを知った時、激しく憤ったんだ」

「ラーウスさま……………」

「でも、私はなにもできなかった」

「……………」

「それが悔しくて、悔しくて。だって、獣人は、なにか悪いことをしてきたのかい？」

「いえ」

「見た目が違うというだけで差別されるのは、おかしいと思わないかい？」



「……………」

ラーウスさまがそんなことを考えてくださっているとは思わず、わたしはラーウスさまをじっと見つめた。

目と目が合い、ラーウスさまは苦しそうな笑みを浮かべた。

「意思の疎通ができるし、別に悪いことをしているわけではない。むしろ、私たち人間のほうが悪いことをしているではないか」

「……………」

「だから私は、第三王子という立場を利用して、獣人のためになにかしたいんだ」

「ラーウスさま。そのお気持ちだけで充分です」

「ルベル、気持ちだけではなんの解決にもならないんだよ」

「……………そうですが、そう思っていていただけで、わたしたちは救われます」

ラーウスさまがそう考えてくださっているだけで、本当にわたしたちは幸せだと思う。

「私は自分の身分を利用して、獣人の立場をよくするために、動きたいと思う」

「え……………」

「だから、ルベル。キミの助けが必要なんだ」

「わたしがお役に立つのなら、いくらでもお手伝いいたします」

「ルベルならそう言ってくれると思ったよ、ありがとう!」

そう言って、ラーウスさまはわたしをぎゅっと抱きしめてきた。

ラーウスさまからは、いつもの甘い匂いが漂ってきた。その匂いにくらくらしながら、わたしもラーウスさまを抱きしめた。

「ありがとうございます」

「お礼を言うのはこちらだよ。私たちの勝手に獣人に肩身の狭い思いをさせているのだから」

いつ、正体がばれるかとびくびくしながら暮らすよりは、獣人だと知られて、ウイケウスのあの苦いお茶を毎日飲まないで済む生活が送れるのなら、後者を選びたい。

だけど、そう簡単にいくとは思えないのだ。

「私に考えがあるんだ」

ラーウスさまのその言葉に、わたしは思わず顔をひきつらせた。

“いいこと”を考えたとは言わなかったけれど、どうせろくでもない考えなのだろう。

それでもわたしは、今回のラーウスさまの考えがどんなにとんでもないことであろうとも、乗っかることにしようと思った。

もちろん、失敗して大変なことになるというリスクのほうが高いというのはわかっている。

だけど、今回のように、ウイケウスの“不作”や、その他、予期せぬ出来事が起こったとき、破綻してしまい危険性のほうが恐ろしいのではないだろうか。

幸い、獣人であるからといって、殺されてしまうわけではない。

人道的な観点から見て、問題のあることをされるだけで、命まで取られてしまうわけではない。

もちろん、鎖につながれて“飼われる”なんてことは絶対にお断りだけど、命に勝るものはないのだ。生きていれば、いつか必ず救われる。

そう思わなければ気が滅入るし、やっつけていられない。

「ということ、ルベル」

「はい」

「ウイケウスも咲いたことだし、私の準備もそろったことだし、今日の夜あたりから、アウリスに向かおうと思うんだけど、どう思う？」

「……………」

ラーウスさま、本気の本気で行くつもりなのですか？

いや、そもそも、どうやってここを抜け出して、アウリスまで行くつもりなのでしょう？

「それで、ルベル」

「はい」

「ウイケウスの花はどうするの？」

「え…………？」

いきなり話が変わったことで、急に対応できなくて、思わず瞬きをして、ラーウスさまを見た。

「だって、このまま置いておけないだろう？」

「いえ、そうですけど……………」

「私も手伝うから、どうやって処理をするのか教えてほしいな」

「え、ラーウスさまのお手を煩わせるわけには……………」

「ルベル、これは私の研究だよ？」

「あ……………」

そうだった、ラーウスさまはウイケウスを研究したいとおっしゃっていたのだ。それならば、どうやって処理するのも知りたいに決まっている。

「まず、この網の中に素早く入ります」

わたしは溝を大股で渡り、出入口にしている網の端を持ち、素早く中へ入り込んだ。

それを見たラーウスさまは、同じようにして素早く中に入ってきた。

「ほう、これはなかなかだな」

「はい。とてもきれいに咲いています」

外からも見えるけれど、中に入ると、ウイケウスの花が満開になっているのがよくわかる。紫色のかわいらしい花が、五角形の畑の中に所狭しと咲いていた。

「真ん中を残して、全部、根っこから抜きます」

「え？ 全部抜くの？ 花だけ詰むのではなくて？」

「はい。ウイケウスの花はこのようにたくさん咲いていますから、ニツクスの花のように花だけ詰んでいたら、終わりません」

「言われてみれば、そうだね。ニツクスは一輪咲きだけど、ウイケウスは一株にたくさんの花が咲いているね」

「そうですね。それに、葉と茎も乾燥させないと、処分ができません」

「え、葉と茎は使わないの？」

「はい。必要なのは本当に花の部分だけでして、残りは乾燥させて、薪に火をつけるために使ったりします」

「それはもつたいたいな」

「もつたいたいなと思いますけど、葉と茎は花よりもっと苦いし、花の部分と違って、煎じて飲んでも獣人の特徴を隠すことができません」

「ほう、そうなのか」

葉と茎の部分は、乾燥させただけでは匂いがあまりないし、そしてなによりも、煎じて飲んでみたことがあるけれど、苦すぎて飲めたものではなかった。ただ、燃やした時はウイケウス独特の甘い匂いがするので、お香代わりにしている獣人もいるとは聞いたことが……。

「あ」

お香にする、というのを思い出して、もしかしたらいけるかもしれないと思い、ラーウスさまに顔を向けて、口を開いた。

「葉と茎は燃やすといい匂いがするんです」

「へえ、そうなんだ」

「これ、乾燥させた後に粉末にして、お香を作ることってできないですかね」

「お香かあ。それはそれでいいかもしれないね」

「はいっ」

葉と茎の匂い成分が花と同じであれば、もしかしたら、あの苦いお茶を飲まなくても済むかもしれない。

「うん、いろいろと研究のし甲斐がありそうだ」

ラーウスさまはそう言って、楽しそうに笑っていた。

\* 十八 \* 脱出作戦？

ラーウスさまのお手伝いもあり、ウイケウスの花は思っていたよりも早く回収することができた。しかも、一番の悩みであった畑から小屋への移動も、ラーウスさまの魔法のおかげで、難なく運び出せることができた。

「ところで、どうして真ん中に少しだけ残すんだい？」

ラーウスさまはウイケウスを乾燥させるための下準備を手伝いながら、聞いてきた。

「ウイケウスは繁殖力が強いです」

「そうだね」

「真ん中だけ残しておけば、種ができて、それが自然と地面に落ちて、また、芽が出るのです」

「なるほど、そういうことか」

「はい」

「なかなか効率がいい花だね」

「はい。なので、ウイケウスは疎まれているのです」

「はは、ウイケウスのせいというよりも、ウイケウスの花を狙ってくるウングラがいけないんだろう？」

「それもですけど、やはり、区画を区切って植えないと、どこまでも際限なく広がりますから……」

「確かに、それは厄介だね」

「はい」

ウイケウスは、手入れよりも管理のほうが大変かもしれない。

わたしたちはウイケウスの根に着いた土を洗い落とし、それから二株ずつを根元を紐で結んで束にして、用意していた竿に干した。

この作業も二人でしたので、思っていたより早く終わった。作業が終わると、ちょうどお昼の時間だった。

「さて、今日の仕事はこれで終わりかな」

え、ラーウスさま、執務は？ と思っただけれど、質問をする前にラーウスさまに小屋から連れ出され、そのまま昼食の場所に移動したため、タイミングを逃してしまった。

「お昼を食べたら、私は少し仕事をして、今日の夜のために仮眠をとろう」

あ、仕事はきちんとするんですね、よかったです。

「あの、本当に行くんですか……？」

「ああ。そのために準備をしたんだからね」

そう言っつて、ラーウスさまは笑った。

ニックスの花を摘みに行った時と同じように、わたしたちは仮眠をして、夜になって起きた。

夕飯をしっかりと食べて、ラーウスさまに言われるままに準備を済ませ、執務室へ。

昼間に見たときは薬草があちこちに散らばっていたのに、なぜか今はすつきりとかたづいていた。

「ラーウスさま……?」

「うん」

「あの、今からなにを……?」

わたしの疑問に、ラーウスさまはにっこりと笑みを浮かべた。

「知りたい?」

「……はい」

「ここからアウリスは、早馬で片道一日」

「はい」

「本当は、ルベルがアウリスに戻りたいと言った時に同意していればよかつたんだけど、どんな危険が待っているかわからない場所に大切なルベル一人だけで行かせるわけにはいかなかったんだ」

「……」

「それに、一週間なんて悠長なことを言っていられないくらい切迫していたってことも、理解している」

「……」

「それでも、期間を取ったのは、ばれないようにするためだったんだ。それに、私もアウリスに行きたかつたんだ」

ラーウスさまは第三王子。自由に動けないってことは、ご本人が一番、知っている。

だからこそ、まだるっこしくても、わがままを通すために一週間の準備期間を作った。

「幸いなことに、ニックスの花もそろった」

「え」



「で、ここに魔方阵を寝る前に書いておいたんだ」  
「……………」

ラーウスさま、なにをする気なんですか。

「向こうの座標はよくわからなかったから、かなり不安なんだけど」  
「……………」

「理論的には問題ない、転移魔法の実験に付き合ってもらえるかな」  
「えええっ!」

ちよ、ちよつと待ってください!

「転移魔法って、超がつくほど高度な魔法じゃないですか!

しかもわたしのつたない知識では、移動元と移動先に同じ魔方阵を敷いていないといけないと……。

それなのに、ラーウスさまは行ったことがない場所に転移しようとしている……?」

「悪いと思ったけれど、媒介にルベルの髪を使わせてもらったよ」

「え……………」

「それでは、始めようか」

というと、いつもは持っていない杖を手に取ると、ラーウスさまは小さな声で呪文を唱え始めた。

それは聞いたことのないもので……………。

ラーウスさまがトン、と地面を杖でつつくと、ぶおん……………という音とともに、黒く輝く魔方阵が床に現れた。

すると、床から風が巻き起こり、わたしとラーウスさまの髪の毛を揺らした。

ラーウスさまに贈った赤い髪紐が、風にあおられ、ゆらゆらと揺れているさまは幻想的だった。

ラーウスさまのそばにいるけれど、ラーウスさまはあまり魔法を使わない。しかも、こんな高等魔法なんて、初めて目にした。

床に描かれた魔方陣は、わたしからしてみれば模様のようにしか見えないけれど、これもとても複雑で、ラーウスさまは寝る前にと言っていたけれど、さすがにあの短時間で片づけてここに描くなんて到底無理だから、これの準備のための一週間だったのだと初めて気がついた。

まさかわたしが薬草園に行っていたり、網を必死に編んでいるときに隙間をぬって準備していた……？

そのことに気がつかないわたし、相当鈍いわ。

と考えているうちに、ラーウスさまの呪文が止まった。

「ルベル、手を」

「はい」

ラーウスさまの手を取った瞬間。

こんな時間だというのに、扉をたたく音もせず、いきなり、執務室の扉が開いた。

そこには……。

「ルークスさま……？」

「てめえ、ラーウス！　なんか超強力な魔力が動く気配がしたと思ったら、おまえ、転移魔法かよ！」

「ちっ、遅かったか」

「え」

「きさま、待て！」

ルークスさまがすごい形相で部屋に入ってきて、魔方陣に足を踏み込んだその瞬間。

「っ！」

今まで感じたことのないくらいの風が吹き上げてきて、ふわり、と身体が持ち上がったのが分かった。

「ルークス、見逃してくれ！」

「だめだ、許さん！」

ルークスさまは根性でもう一步、魔方陣に足を踏み込み、身体が舞い上がるのが見えた。

「どこに行く気だ」

「それは教えられん」

「くそっ！ “<sup>チェイス</sup>追跡”！」

ルークスさまの呪文とともに、白い光の紐のようなものがラーウスさまにつながったとたん、さらに強い風が吹き上げてきて、それと同時に、引っ張り上げられて、世界が暗転した。

右手を締め付ける痛みにも、目が覚めた。

目を開けると、辺りは真っ暗で、なにも見えない。

あれ、わたし、夜中に目が覚めてしまった？ と思った後、思い出した。

そうだった、ラーウスさまとわたしは執務室からアウリスに強引に転移しようとして、ルークスさまに見つかって……。

とそこで、また、右手に痛みが走ったので、慌ててそちらに視線を向けると、だれかが手をぎゅっと握っているのが分かった。

わたしのような犬の獣人は、夜目が効く。最初は真っ暗だと思われたここだけど、目が慣れてきたため、周りが見えるようになっていた。

わたしの右手を握り締めているのは、だれかの左手。薬指に黒い指輪がされているのと、覚えのある体温で、それがラーウスさまのものだと分かった。

「ラーウスさま？」

小さな声で呼びかけると、唸り声が聞こえた後、状況を思い出したのが、飛び上がって起きた。

いきなり起きたら危ないですよ、と言う間もなく、ごちっと痛そうなお音がした。

「つたたたた」

「ラーウスさま、大丈夫ですか？」

「ん……大丈夫……じゃないかもしれない」

「えっ」

ラーウスさまはゆっくりとしゃがみ込み、痛そうに頭をさすっていた。

「ルベルが撫でてくれたら、治ると思う」

「え、わたしが、ですか？」

「ああ。ルベルじゃないとダメなんだ」

前に似たような言葉を聞いたことがあったな、と思ったけれど、それよりもラーウスさまの状態のほうが気になったので、ゆっくりと身体を起こし、ラーウスさまの言うとおりに、頭を撫でた。

ラーウスさまの髪の毛は、思っていたよりも硬かった。それでも、

手触りは絹のようにすこくよくて、ずっと撫でていたい気持ちになった。ラーウスさまがやたらとわたしの髪の毛と耳にこだわる気持ちがちよっとだけわかった。

「どのあたりですか？」

と問えば、ラーウスさまはわたしの手を取ると、痛む場所に導いてくれた。

触ると、たんこぶができていたという感じではなかったので、安心したけれど、ぶつけたところはなにせ、頭だ。大丈夫だろうか。

「痛いですか？」

「いや、すぐに癒しの魔法をかけた。だけど、ルベルが触ってくれたら、もっと早く治まるから」

ラーウスさまの言い分がよくわからなかったけれど、ラーウスさまの気が済むまで、わたしはずっとぶつけた場所を撫でていた。

\* 十九 \* 思い出の洞窟

わたしたちが転移してきた場所は、どこかの洞窟内のような  
夜ということもあり、灯りを持たないで来てしまったので、真っ暗  
で、周りがまったく見えない。とはいえ、わたしは夜目が利くので  
見えるけれど、ラーウスさまのことを考えて、ここで朝まで過ごす  
ことにした。

幸いなことに、周りの気配を探ると、特に危険な動物などはいな  
いようだった。

「ラーウスさま。朝まで時間があります。少しお休みになった方が  
よいかと思えます」

「……そうは言っても、ルベルは？」

「わたしは大丈夫です。ラーウスさまは先ほど、大量に魔力を消費  
されたので、疲れているではありませんか？」

いつもなら甘いい匂いがしてくるのに、今のラーウスさまから  
はうつすらとしかしてこなかった。ということは、魔力を大量に消  
費して、体内魔力が少なくなっているという証拠だ。少しでも休ん  
で、体力と魔力の回復をしてもらわなければならない。

「正直言うと、疲れている」

「はい」

「素直にルベルに甘えることにするよ」

ラーウスさまはそうおっしゃると、わたしの膝に頭を乗せて、横

になった。

まさかの体勢に、わたしの身体は固まった。

「ラ、ラーウスさまっ!」

「うん? こうした方が休めるだろ?」

「そ、そうですけど!」

まさかの膝枕に、わたしはどうすればいいのか分からない。

「ルベルの太股、ほどよくかたくてちょうどいい」

「……………」

「ついでに、先ほどぶつけたところを撫でてもらうと、もっと休めるな」

どさくさに紛れてそんなことを言ってくるラーウスさまに戸惑ったけれど、わたしは言われるままにラーウスさまの頭をやさしく撫でた。

すると、ふわり……とラーウスさまから甘い香りが漂ってきた。

「ああ、ルベルといると、安心できる」

そう言って、ラーウスさまは目を閉じると同時に、すうすうと寝息を立て始めた。相当、お疲れだったようだ。

それはそうだろう。

転移魔法というだけでも超高等なのに、さらには、行ったことのない場所へ無理矢理、移転したのだから、どれだけ魔力を消耗したのか。

ラーウスさまの寝顔を見た後、わたしは周りを見回した。

ここは、どこなのだろうか。

暗いために細部は見えないけれど、それでも、どうもここは見覚えがある。

あちこちに視線をやりながら、記憶をたどる。

小さい頃、ここに来た覚えがあるような、ないような。

わたしは今、壁にもたれ掛かり、ラーウスさまを膝枕しているために動けないけれど、いや、むしろ、この高さだから、思い出せることもある。

たぶん、立って見ていたら、気がつかなかっただろう。

わたしがもたれ掛かっている場所は、洞窟の最奥だと思われる場所の、角だ。

丸みを帯びた角にはまり込むようにして、座っている。こうすれば、見張る場所の角度が少なくなる。

そして、わたしの右側の壁に、見覚えのある文字が刻まれていた。

「フロンズ……」

声を出して読むと、記憶がはつきりと蘇ってきた。

そうだ、ここには昔、兄と一緒に来たことがあった。

いたずら好きな兄と、おてんばなわたしは、アウリスはとても退屈な場所で、両親から入ってはいけないと言われていた、近くの洞窟に探検と称して、来たことがあった。

そして、この奥までたどり着くと、来た記念にと、兄はここに自分の名前を彫った。

今にして思えば、取った行動も、文字を彫りつけたことも感心しないことであるけれど、その体験のおかげで、わたしはおおよその場所を知ることができた。

ちなみに、ここに来たことは両親にバレて、しこたま怒られた。それ以来、ここには来ていない。

まさか、そんな思い出がある場所に出るとは思わなくて、ちょっ



とびつくりしてしまった。

そんなことをつらつらと思い出していると、時間はあつという間に過ぎて、洞窟の出口と思われる方角から、朝日が差し込んできているのが見えた。

ラーウスさまは、時々、寝返りを打ちながら、わたしの膝枕でぐっすりと眠っていた。

下はかたい岩なので、寝づらいかもしれないけれど、寝られないよりはマシかもしれない。それだけ、疲れていたのかもしれない。起こすのは忍びないと思ったけれど、だれにも言わないで出てきてしまったので、バレないうちに帰らなければならぬのを思い出し、遠慮がちにラーウスさまの肩を揺さぶった。

「ラーウスさま、すみません」

「……ん？」

「日が昇って来ました」

「……ああ」

ラーウスさまは、少しぼんやりしていたけれど、状況を思い出したのか、けだるそうにゆっくりと身体を起こした。

「いたたた……」

「ラーウスさまっ？ どこか痛むのですかっ」

「いや、かたい岩の上で寝ていたから、身体が少し痛むだけだ」

普段の生活を考えれば、ここはかなり過酷な場所である。ラーウスさまに申し訳なく思いながら、言葉を探していると、ラーウスさまは身体を解して、立ち上がった。

「だけど、ルベルの膝枕のおかげで、だいぶ、調子が回復したよ」

「それはよかったです」

恥ずかしくて、顔を赤くしていたら、ラーウスさまは笑った。

「寝る前は暗くて見えなかったけれど、朝日が差し込んできて、ようやく周りが見えるようになってきたね。ルベルが赤くなってるのもよく分かる」

「っ！」

「さて。ここがどこか、ルベルは分かるかい？」

急に話が変わったけれど、それはいつものことだったので、わたしはまだ少し赤い顔のまま、立ち上がり、口を開いた。

「ここは実家の近くにある、洞窟です」

「ほっ」

「ここに、兄がいたずらで彫った名前が残っているのを見つけて、気がつきました」

「兄？ ルベルには兄がいたのか」

「あ、はい」

そういえば、ラーウスさまに、家族構成を伝えたことがなかったような気がした。

「三つ上の兄と、父と母の四人家族です」

「ほっ」

「ここに一度、兄と来たことがあります」

「そのときに残した物が？」

「はい。わたしは止めたのですが、兄はいたずら好きで、来たという証にと名前を彫りました」

そのおかげで、現在地を把握できたのだから、結果的には助かったのだけど、やはり複雑な気分だ。

「それでは、ここからルベルの実家は近いのだね？」

「はい。少し歩きますが、行かれますか？」

「ああ、そうしよう。現状を確認したい」

「はい」

ラーウスさまはわたしの手を取ると、歩き始めた。

と言つても、途中、腰をかがめて歩かなくてはならない場所があったり、手をつないだままでは歩きにくいところもあったので、そのときは手を離した。

手を離すときの切ない気持ちは、なんとさえいいのだろうか。近くにいるというのに、なんだか淋しい気持ちになった。

この洞窟は、それほど大きくない。

ただ、歩きづらいで、出るまでに時間が掛かった。

腰をかがめて出口をくぐれば、見覚えのある景色が広がっていて、ホツとした。

この洞窟は、アウリスの町はずれにある。

自然にできた物なのか、だれかの手による物かは分からないけれど、入口は小さくて、大人だと腰をかがめないと進めない場所だ。そして、なにかの拍子に崩れ落ちたら危険だからと、行かないように言われていた。

幸いなことに、昔と変わらぬ姿で残っていたので、助かった。

これで出入口が塞がっていたらと思うと、恐ろしかった。

そして、町はずれのここは、だれも手入れをしていないので、雑草や木が自然の思うがままに生えている。

わたしは、この洞窟の手前までは何度か来ているので、実家への道も分かっていた。

両親にはよく怒られていたけれど、そんなことにめげずにうろろろしていたことが、今になって役立つというのだから、皮肉なものだ。

ラーウスさまと手をつなぎ、わたしは実家へと向かったのだった。

\*二十\* ウンゲラとの遭遇(前書き)

芋虫が苦手な人は要注意の回です。

\*二十\* ウングラとの遭遇

実家への道すがら、ラーウスさまにわたしがアウリスにいた頃のことを聞かれた。

「ルベルはウイケウスのこと詳しいけれど、アウリスにいた頃、手伝っていたの？」

「はい、手伝っていました。……と言っても、わたしができるのはそんな大したことではなかったですけど」

「どんなことをしていたんだい？」

「ウイケウス用の畑を耕したり、網を編んだりですね」

「ほう、なるほど。それで網を編むことができたのか」

「はい。どこでどう役に立つのか、人生って分からないですね」

今回の洞窟の件もそうだけど、今まで経験したことが、今、役に立っているのがよく分かった。

「人生は、経験の積み重ねだよ」

とラーウスさまは哲学的なことを口にした後、笑った。

「って、偉そうなことを言ってるけど、私は今、ルベルの経験に、たくさん助けられている」

そう言って、ラーウスさまはつないでいた手を引き寄せ、指先にキスをしてきた。

途端、ラーウスさまから強くて甘い匂いがしてきた。クラクラする。

その匂いで、ラーウスさまの魔力が回復したことが分かった。元気になったのは良かったけれど、いきなりの甘い行動は慎んでいただきたいものです！

洞窟から実家までは、そこそこの距離がある。

実家に近づくにつれ、どうしてだろう、どんどん荒廃していくのが分かった。

「ルベル」

そのことにラーウスさまも気がついたのか、かたい声でわたしの名を呼んだ。

「ずいぶんと荒れているけれど」

「……はい」

手紙は届くのに、荷物が届かない理由は、この荒れた状態となにか関係があるのだろうか。

逸る気持ちを抑えるのに精一杯で、ラーウスさまの言葉を聞き逃してしまった。

「……ル、ルベル？」

「あ、はい！ すみません、あまりにもひどい状態で……その」

とそこまで言ったところで、背筋がぞつと凍る気配を感じた。

それは今までわたしたちが通ってきた場所からで、ラーウスさまを背中に隠しながら、なにかあった時のためにと持ってきていた剣を鞘から抜いた瞬間、ソレは素早い動きでわたしたちを襲ってきた。

抜刀の勢いでそれを弾くと、ポヨンと嫌な感触がして、弾いたのが分かった。この嫌な感触に覚えがある。

途端、ぞわぞわと悪寒が走り、へたり込みそうになったけれど、両足を踏ん張って、必死になって立った。

「ルベルっ」

「わたしは大丈夫です。ラーウスさまこそ」

「私は大丈夫だが、あれはなんだ？」

ラーウスさまの指さす方向を見なくとも、それがなにか、わたしは本能的に知っていた。それに、アレを見たくない。

「もしかして、あれがウングラか？」

その名前に思わず悲鳴を上げそうになったけれど、唇を噛んで、必死になって耐えた。

「芋虫みたいなのに、両腕があるし、今、飛んだよな？」

「……………」

「それに、目が複数ある……………これは、気持ちが悪いな」

ラーウスさま、冷静に実況しないでください！

あの見た目を思い出しただけでも、気持ちが悪いのですよ！

ラーウスさまの解説のとおり、ウングラは四個から八個の目を持つ、見た目は芋虫みたいな感じのくせに、なぜか腕のようなものが生えているのだ。気持ちが悪すぎる。

「複眼の上に、目が複数あるとは、すごいな」

「ラーウスさま……………冷静ですね」

「冷静ではないぞ。解説をしていないと、あまりの気持ち悪さに吐



きそうなんだ」

その気持ち、激しく分かりますけど、吐くのは勘弁してください。

「ルベル、あいつ、縮んだぞ」

「それ、飛ぶ合図ですから、飛んできたら、避けてください！」

ウングラは、地面を這って移動することが多いけれど、敵を見つけたら、身体を縮めてバネのようにして飛び上がって襲ってくるのだ。これが、集団で現れた日には……。

「！」

「ルベル！」

最初に現れたウングラだけではなく、複数のウングラがどこからともなく現れてしまった。

そうだった、ウングラは集団で移動することをすっかり忘れていた。

「困まれたぞ、どうする？」

「……………」

これ、最悪だ。

ウングラの身体は弾力に富み、刃物を簡単に弾いてしまう。とはいえ、切ってしまうと、それはそれで大変だ。というのも、ウングラの体液は獣人にとって毒で、少しでも触れてしまうと、激痛で動けなくなるのだ。

「ラーウスさま」

「うん」

「飛んできたウングラを弾いて、道を切り開きましょう」

「そんなこと、可能か？」

「囲まれています、ウングラは飛ぶまでに時間が掛かります」

「それなら、間をぬって行けばいいんじゃないか」

ラーウスさまの提案に、ゾゾゾ、と悪寒が走った。

合間をぬってなんて、そんな恐ろしいことを……！

とはいえ、このまま集団で飛んでくるのを待っているのも気持ちが悪い。

わたしは実家の方向に視線を向けると、そちらにはウングラはほとんどいなかった。しかも、距離を縮めるためにウングラは地を這っているところだった。

「ラーウスさま、実家はあちらです」

「分かった」

「ウングラを傷つけないでください」

「どうしてだい？」

「体液に毒が含まれているからです」

「分かった」

獣人にとって毒だけど、人間にとってどうかは分からない。でも、あまりよいとは思えないので、そう伝えれば、ラーウスさまは分かってくださったようだ。

「では、行きます！」

ウングラに近寄りたくないけれど、そうしなければわたしたちはもつと悲惨な未来が待っている。

ウングラに押しつぶされて、死んでしまうなんて、そんなのは嫌

だ。

幸いなのは、ウングラの動きが遅いことだった。とはいえ、ウィケウスの花を見つけたときは、驚くほど素早くなるのだが。

「……ウィケウス？」

そうだ、乾燥しているけれど、わたしはウィケウスの花を持って  
いるではないか。

ブレスレットの中から慎重にウィケウスを取り出した。

「ラーウスさま、進行方向とは逆にウィケウスの花を投げますので、  
素早く逃げてください」

「危険ではないか？」

「大丈夫だと思います」

ラーウスさまがいるところでこんな危険なことをするのもどうか  
と思うけれど、ウングラの圧死から逃れるためには必要だった。

ウングラが乾燥したウィケウスの花に反応するかどうかは賭であ  
ったけれど、駄目なら駄目で、隙間をぬって逃げればいいだけだ。

「では、行きます！ 三、二、一……えいっ！」

カウントとともに、わたしは手のひらの中に持っていたウィケウ  
スの花を宙にまき散らした。朝の光を浴びたウィケウスの花は、綺  
麗だった。

すると、予想どおりに、ウングラは宙を舞うウィケウスの花に反  
応して、そちらに注目した。

乾燥してしまつと、鮮やかな紫色ではなくなってしまうけれど、  
それでも、十分に紫色をしている。

ウングラの目の色が、緑から紫に変わった。乾燥したウィケウス

の花でも、ウングラは反応した。恐ろしい。

「ウングラにぶつからないように逃げてください!」  
「分かった!」

ラーウスさまはわたしの剣を握っていない手を掴むと、なにかを唱えた。途端、風が吹き上げてきて、身体が宙に浮かんだ。

「うわっ!」

「風を巻き起こして、無理矢理に身体を浮き上がらせた」

わたしたちが先ほどまで立っていた場所に、ウングラの集団が押し寄せていた。

一步、間違っていたら、圧死していたくらいの勢いだ。ウングラ同士がぶつかって、ぼよんぼよんと弾き合っていた。

ラーウスさまはまたなにかを唱えると、わたしたちの身体は、宙に浮かんだままとなった。

「今、私たちは風の上に立っているのだよ」

「えっ」

「私の手を離さないように。落ちてしまうよ」

「は、はいっ」

「では、階段を降りよう」

わたしたちはウングラの上において、宙に浮いている状態だ。

ウングラはわたしが撒いたウイケウスの花に夢中になっている。

少しでも多く口にしようと、ウングラ同士が争い合っている。

ラーウスさまは、わたしの手を掲げた。

「私が先に降りるから、ルベルは後ろからついてきて」

「はい」

ラーウスさまが足を踏み出すと、一段、身体が降りた。もう一步、足を出すと、二段、下がった。

わたしは足で宙を探るようにして進むと、目に見えない段差があることに気がついた。すり足で慎重にラーウスさまの後ろをついて見えない階段を降りていった。

地面に足がついた途端、わたしは思わずホツとため息を吐いた。

「なかなかスリリングだったね」

ラーウスさまの弾む声に、この状況を楽しんでいることが分かった。

「ラーウスさま！」

「ああ、ごめん。無事だったのは、ルベルのおかげだったよね」

「いえ、ラーウスさまが機転を利かせてくださったおかげですけど、一步、間違ったら危なかったんですよ！」

「それはルベルにも言えるぞ」

「……………」

確かに、考えなしでウイケウスの花を撒いてしまった部分もあった。

反論できないでいると、ラーウスさまは苦笑した。

\* 二十一 \* ウングラとの遭遇 一

ウングラと遭遇してしまって、どうにかピンチを切り抜けたのだけど、それでもどうしてだろう、まだ、ぞわぞわとした嫌な感じが続いていた。

それは後ろ方向　先ほど、ウングラがいた場所の辺り　からしている。

ギュツと手を握りしめると、ザリザリとした独特の感触が手のひらにした。これはたぶん、先ほど、ブレスレットの中に入っていた乾燥したウイケウスの花びらの残りで……。

ちょっと待って？　もしかしなくても、ウングラは、手のひらについているこれさえも見てしまったというの？

「ラーウスさま」

「うん？」

「ウングラが、わたしの手のひらに残っているウイケウスの花びらに気がついてしまったようなんです」

「なにっ？」

わたしは一度、抜いていた剣を鞘に戻し、手のひらについている残りを手を叩いて振り払った。

手のひらについていたウイケウスの花びらは細かくて、パラパラと地面に落ちた。

ウングラはそれに気がつき、緑の瞳を紫色に変えて、素早い動きでこちらに向かって来ているのが分かった。

「ラーウスさま、逃げましょう！」

わたしはラーウスさまの手を取ると、思いっきり走った。

「ルツ、ルベル、ちょっと待って！」

とラーウスさまの制止する声が聞こえたけれど、ウングラ、怖い！ ラーウスさまを引きずるようにして、わたしは必死の思いで走った。一歩足を踏み出すごとに、ぞわぞわが遠ざかっていく。

どれくらい走っただろうか、ラーウスさまがわたしの手を引つ張って、引き止めたので、仕方なく足を止めた。

ラーウスさまは肩を大きく上下させて、荒い息を吐いていた。対するわたしは、鬼の騎士団長と第二王子のしごきのおかげで、それほど息を乱していなかった。

「ル、ルベル、……ちょっと……ま……って」

「もうここまで来たら、大丈夫です」

「そ……れ、なら……ぜえぜえ、よか……った」

ラーウスさまはそういうなり、地面に座り込んだ。

ラーウスさまが座っている横で立っているわけにもいかななくて、横にひざまずいたら、腕をひっぱられ、膝の上に抱き上げられた。

ちよつと、ラーウスさま！ なんてことを！

「ラーウスさまっ？」

「はー、ようやく息が落ち着いた」

走ったときはなんともなかったのに、ラーウスさまの膝の上に乗せられた途端、心臓がばくばくとし始めた。

しかも！ ラーウスさまとの距離が近い上に、顔がっ！ 顔が真

横にあつて、ドキドキする！

「ほんと、ルベルは無茶をする」

ラーウスさまが口を開けば、わたしの後れ毛を揺らす。そのくすぐったさに身を振ると、ラーウスさまは笑った。するとまた、くすぐりたい。これでは悪循環ではないか。

「ラーウスさまっ」

「なんだい？」

耳元で甘い囁きが聞こえて、恥ずかしいし、くすぐりたいし、でも、ラーウスさまの膝の上の居心地が良すぎて、動く気になれなくて、どうすればいいのか分からない。

「ルベル」

「ひゃっ、ひゃいっ」

思わず、変な返事をしてしまった。すると、ラーウスさまはまた笑った。

「ラ、ラーウスさまっ」

「ん？」

「あの、立ちませんか？」

「どうして？」

「また、ウングラが来たら……」

「ウングラなら、どこかに去ったのを確認したよ」

めざといです、ラーウスさま！



「ルベルに引つ張られて、無理矢理走らされて、疲れたから、少し休憩したいんだ」

「う……」

それを言われたら、反論できない。

「それにしても、ルベルは走るのが速いね」

「騎士団長と第二王子には勝てませんよ……」

「ああ、あの二人の身体能力はどうなっているんだろうね。脳みそまで筋肉できてきているんじゃないかと常々思っているんだけど、ルベルはどう思う?」

「脳みそまで筋肉でって……」

そう言われて、想像して、あまりの面白さに思わず笑っていた。

くすくすと笑うわたしに、ラーウスさまもつられて笑う。

さっきまで危ない状況だったし、そんな場合ではないと分かっているのに、わたしたちは今、こうして呑気に笑い合っていた。

「ルベル」

「はい」

「愛してるよ」

甘い声で甘い言葉を口にして、ラーウスさまはわたしの身体をギョツと抱きしめてきた。その一言に、全身が熱い。それで、わたしは今、真っ赤になっているのが自分で分かった。

「ラーウスさまっ!」

「ずっと愛していると言っていたいくらい、ルベルのことが愛おしい」

耳元で囁かれるその言葉たちは、甘すぎて蕩けてしまいそうだった。

「いつまでもこうしていたい」

「……………」

それはわたしも同じ気持ちだけど、でも、ここは外で、しかもわたしたちは今、こっそりと城を抜け出してきたのだ。呑気にここでイチャイチャしている場合ではない。

「ラーウスさま、わたしも同じ気持ちですが」

「……………分かってているよ。そろそろ行こう」

「はい」

ああ、いつまでもこうやってラーウスさまとひっついていたい……なんて、わたしはラーウスさまの甘さにやられてしまったようだ。

ラーウスさまが渋々といった感じで、わたしの身体に巻いていた腕を解いてくれた。これでようやく、わたしの身体は自由になり、立ち上がることができた。

「ラーウスさま」

ラーウスさまに手を差し伸べると、とても嬉しそうな笑みを向けられた。ギョツと強く手を握られたのでラーウスさまを引っ張ると、勢いよくわたしの身体に抱きついてきた。

「ラーウスさまっ!」

「はは、ごめん、ごめん。ルベルがあまりにもかわいかったから、つい」

今のどこにかわいい要素があったのか分からないけれど、ラーウスさまはますます笑顔になった。なによりも、機嫌が良いようで、良かった。

「それでは、ルベルの実家に案内してくれるかい？」  
「はいっ」

元気よく返事をする、ラーウスさまはおかしそうに声を上げて笑った。

洞窟から出て、思ったよりも時間が経っているのが太陽の傾き具合で分かった。

洞窟を出てすぐは薄暗かったのが、今はすっかり辺りが分かるくらいに明るさになっていた。

「それにしても、ウングラは気持ちが悪かったな」  
「……はい……」

思い出しただけでゾツとするから考えないようにしていたのに、ラーウスさまがそんなことを言うから、あの姿を思い出し、思わず身震いをした。

「あれは確かに、震えるほど気持ちが悪いな」  
「はい……」

「薬草園を荒らしたのは、やっぱりアレだったのかな」  
「そうだと思います。ウングラは目がいいですから」  
「匂いには反応しないのかい？」

「はい。鼻がないんです」

「鼻がない……？ ああ、そう言われてみればそうだな」

ウングラには鼻がないのだけど、呼吸は胴体の両横に小さな穴がいくつか空いていて、そこからしているらしい。

「しかし、ウイケウスの花は匂いが強いのに、ウングラに鼻がないのは、不思議だな」

「そうですね……」

「それにしても、ウングラはウイケウスの花を見つけたら、目の色が変わるんだな。これは知らなかった」

今まで、ウイケウスの花がないところでウングラに遭遇をしたことがなかったのだけど、なんであんな場所にいたのだろうか。

ウイケウスの畑は実家から近い畑にしか植えてないのに、どうしてあんなに離れた場所に？ それとも、あの辺りにウングラの巣があるのだろうか。

ウングラがウイケウスの花を好むというのは、獣人の間では知らない者がいない常識であるけれど、実は生態はほとんど分かっていない。

ウングラは集団で生活をしているというのは分かっているけれど、どういうところに巣を持っているのか、そもそも、固定の巣を持っているのか。どうやって増えるのか、ウイケウスの花以外になにを食べるのか。それを知っている人は、だれもいない。

それに、あんな気持ちが悪い生き物の生態を調べようとしている人がいないため、謎のままだ。

「ルベル、ここから実家までどれくらいなのかい？」

「そうですね、あともう少しでたどり着くかと……」

と口にして、目の前に広がった光景を見て、言葉を失った。

\* 二十二 \* ルークスさまと合流

実家に近づくにつれ、辺りの荒廃具合がひどくなっていたから覚悟はしていたのだけど、まさかのまさか、家があった場所が、がれきの山になっていた。

え、なにこれ。

ここに家があったはず……だよ、ね？

それとも、久しぶりに帰るから、記憶違い？

元々ここはがれきの山で、家はもうちよつと別の場所だった？

でも、あそこに生えている木の形、すつごく覚えがあるんだけど。

あの木は、わたしの部屋の横に生えていて、よく、こっそり家から抜け出すときに使っていた木で……。

それを確かめるために、わたしはふらふらと木に近寄った。

木の根元に立ち、見上げる。古くなっていたけれど、見覚えのある脱出用の縄が木の間から見えた。

ということは、やっぱり家の場所を間違えた訳ではなくて……。

「ルベル？」

がれきの山の側でうろうろしていたわたしを訝しく思ったのか、ラーウスさまが名を呼んだ。その声で、ハッと我に返った。

「ラーウスさまっ」

「なんでここは、こんなになっているんだい？」

「あの……ここが、その、実家でして……その」

「ここがルベルの実家？」

「はい。確かに家があったはず……なのです、が」

どうして家がかれきの山になっているのか、訳が分からない。

「もしかして、さっきのウングラが関係あるとか？」

「ウングラが……？」

ウングラは、ウイケウスの花を前にしたときは凶暴化するけれど、それ以外の時は気持ちが悪いという以外は取り立てて危険な生き物ではない……はずだけど。

「ルベルの家の中には、ウイケウスの花がたくさんあったりした？」

「しますが、ウングラが分からないような場所にしまっておりま

「それなら、別の理由？」

「……………」

仮にウングラが家の中に入り込んで、ウイケウスの花を求めて暴れたとする。としても、こんながれきの山になるようなことにはならないような気がするのだけど……。

「それか……ああ、もしかして」

ラーウスさまはなにかを思い出したのか、手を叩くとわたしの顔を見た。

「一月程前に、嵐の日があったよね？」

「え……と、はい」

この国の冬に一度は、激しい嵐の日がやってくる。だけど、それはこの谷間のアウリスではあまり影響がなかった。

「今、思い出したのだけど、あの嵐は数十年に一度の規模のひどさで、あちこちに被害をもたらしたと聞いている」  
「わたしも聞きました」

そういえば、ラーウスさまのところに届けられる書類にも、あの嵐の日に関連したものがこのところ多かつたことを思い出した。

「ここからは私の推測なのだけれど」

「はい」

「ルベルの家は、あの嵐の日に吹き飛ばされてしまったんじゃないかい？」

「えっ」

「ここは町の外れのようにだけど、町中はどうなっているんだろうね」  
「……………」

「アウリスから救援要請は今のところ、出されていないかと思ったと思うけれど、もしかしたら、ひどいことになっているのかもしれないね」

アウリスの町自体に被害があったとしても、“獣人の町”ということで、よほどのことがない限りは、自分たちでどうにかしようとするだろうから、救援要請は出さないだろう。それに、わたしたち獣人はたくましい。寒さをしのげる場所さえあれば、家という形にはこだわらない。

「町を後から見に行きましょう」

「そうだな」

「町外れのうちだけの被害ならいいんですけど……………」

と口にすれば、ラーウスさまは複雑そうな表情を浮かべた。



「町に被害がないことの方がいいのだけど、ルベルの家は被害に遭っている」

「そうですね、うちは大丈夫ですよ」

「しかし、思い出の品などもあるだろう？」

思いがけないラーウスさまの言葉に、わたしは思わず目を見開いた。

ラーウスさまがおっしゃるとおり、騎士団入りするときには、必要最低限の物しか持っていかなかったので、実家には大切な物がたくさん置いてある。この状態を見て、それが無事であるわけないと分かったけれど、それほど心が痛んでいなかった。

それよりも気になったのは、家族がどうしているか、だった。

「品物よりも、わたしは家族の行方が気になります」

「ああ、そちらも気になるな」

わたしは、残り香がないか鼻をひくひくとさせてみたけれど、ラーウスさまから甘い香りがただけだった。

「町まで行ってみるかいい？」

「えっ」

「ルベル、キミの実家がこんな状態であるのなら、ご家族は町のどこかにいるかもしれないではないか」

「……たぶん、町にはいないと思います」

「どうして？」

どうして、と聞かれても、理由はなくて、なんとなくとしか答えられない。

そもそも町はずれに住んでいるのは、ウィケウスの花を栽培するためだけど、それだけではないような気がする。

「町にいないとすると、どこにいると？」

「ここにいなければ、ウィケウスの花を乾燥させる小屋か、あるいは、別のところか……」

「それでは、小屋に行ってみよう」

「はい」

ここから小屋まではそれほど距離はない。

この様子では、小屋も無事かどうかあやしいけれど、心当たりがあるのはそこしかないので、とりあえず行ってみよう。

と思つて移動をするために足を一步、踏み出した時。

わたしの耳にがさりという音がした。

「ラーウスさま、止まってください」

歩き始めたラーウスさまに声を掛けて足を止めさせると、ウングラのとおりと同じようにラーウスさまを背中に隠し、剣の柄に手を掛けた。

「だれっ」

剣をいつでも抜けるように鞘から少し抜きながら、がれきの向こう側に声を掛けると、手の先が見えた。ゆっくりと横に動き、現れたのは……。

「ルークスさま？」

「こちらには敵意は……つて、ラーウスにルベル？」

警戒を解き、剣を鞘に収めると、ルークスさまは苦笑をしながら近寄ってきた。

「まったく、おまえら、城の中であんな不安定な魔法、ぶつ放すなよ！」

「おまえこそ、そんな不安定な魔法を唱えている相手に追跡魔法仕掛けるとか、おかしいだろう！」

「おかしくない！ 転移魔法だと分かったからこそだ！ おかげでこうして、会えただろうが！」

「……………」

わたしとラーウスさまは、同時にルークスさまにジトツとした視線を向けた。

だって、本当に追跡魔法を追いかけて来たのなら、ルークスさまはこちらの正体に先に気がついていたと思うのだけど、さっきの言葉はここにわたしたちがいることに気がついていないかのようだった。

「なんだよ、その疑いの目」

「追跡魔法を追ってきたには、こちらの正体が分かってないのが怪しい」

「追いかけて来たのは間違いないんだが、近くまで来たから、目視確認に切り替えていただけだ！」

と言いつつがましいルークスさまの言葉に、ラーウスさまはため息を吐いた。

「だからいつも、最後が甘いと言われるんだ」

「……………」  
「け、結果的には問題がなかったんだからいいんだ！」  
「そういつことにおこう」

まさかあの転移魔法にルークスさまを巻き込んでいたとは思わず、

かなり気が重くなってしまった。

ルークスさまに、そもそもがどうしてここに来たのかという説明をしなければならぬだろうし、ことと場合によっては、わたしの正体も話さなければならぬかもしれない。

ラーウスさまに知られてしまったのはハプニングだったけれど、黙っていてくださると約束もしてくださったからいい。だけど、ルークスさまは？ 同じように黙っていてくださるだろうか。

ラーウスさまの親友という立場にいるので、ルークスさまは信頼するに値する人であるのは知っているけれど、もしも彼が獣人嫌いだったら？ そう思うと、恐ろしくなる。

「とりあえず、ルークス。今から見聞きしたことはだれにも話すなよ」

「はっ？ ことと場合に寄っては、神殿と陛下に報告しなければならぬだろう。おまえ、そもそも城内であんな魔法をぶつ放したんだぞ？ 今頃、城は大騒ぎだぞ」

「それは大丈夫だ」

「なにが大丈夫だ、だ。現に俺は、おまえの魔力に反応して慌てて駆けつけたんだぞ？」

「……………」

もしかしなくても、大事になっているのでしょうか。

わたしだけではなく、獣人たちのピンチですか？

\*二十三\* ばれてしまった二

ルークスさまの言葉に、ラーウスさまは余裕そうな笑みを浮かべた。その表情は無理して虚勢を張っているようでもなくて、本当に余裕そうな笑みだった。

「私はおまえのことを、すっかり失念していたよ」

「ひどいな」

「でも、大丈夫だ」

「大丈夫なわけないだろう！」

「いや、それが大丈夫なんだ。私は偽装してきたのだから」

「は？」

え、偽装ってなにをしてきたんですか、ラーウスさま？

「なにがあるか分からないから、あの部屋に私とルベルの幻影を置いてきた」

「……用意周到だな」

「それを作るのにちょっと手間取って、時間が掛かってしまったんだよ」

とラーウスさまはわたしに向かって説明してくれた。

そうだったんですか、そんなものを……って。

「え、幻影っ？」

「そうだよ。ほら、すぐに戻れるとも限らないだろうっ？」

確かにそこは気になっていたところだったけれど、幻影で誤魔化すことができるのだろうか。

だって、幻であれば、ご飯なんて要らないだろうし……と、わたしも考えていることが分かったのか、ラーウスさまは説明をしてくれた。

「幻影を動かすためには動力が必要だ」

「はい、そうですね」

「外から魔力を補給するのが一番なんだが、私はいない。なので、食物から補給するようにするのが難しくてね」

「えっ、そんなことができるんですかっ」

「かなり大変だったけれど、できたんだよ」

ラーウスさま、いつの間にそんなことをしていたのでしょうか。わたしが薬草園で作業していたりしたとき？ それとも、このところ、外へのお使いが多かったのは、そういうことですか？

「ただ、この幻影も一日しか持たない」

ということは、早いところ解決させて戻らないといけないってことですね。

「それと、ルークス。私の魔力に反応できるのは、おまえだけだぞ」「なんだって？」

「確かに、城であんな大きな魔法を使ったことは反省しているけれど、バレないように使ったからな。おまえは魔法探知能力が桁違いだから、分かったただけだ」

「それ、褒めているのか？」

「褒めてない」

「……そうだよな、おまえが褒めるわけがない」

ルークスさまは呆れたようにため息を吐くと、ラーウスさまとわたしへ視線を向けて来た。

「で、ここはどこだ？」

「アウリスだ」

「アウリス……？ はっ？ アウリスだってっ？ って、それ、どこだ？」

普通なら、アウリスって言われて、すぐに分からないですよ。ラーウスさまはすぐに分かったようだけど、前もって調べていたんだろうなあ。

「アウリスはアーテル国の北部に位置する町だよ」

「北部……。どおりで寒いわけだ」

と、ルークスさまを改めて見ると、いつもの黒の神官着を着ているだけだった。対するわたしたちは、アウリスに行くと分かっていたので、きちんとコートを着込んでいた。しかも、ラーウスさまはご丁寧に、毛布まで持ってきていたのだ。今は魔法でどこかにしまいでいるから、わたしたちは手ぶらだ。

「寒いかな？」

「寒いに決まっているだろうっ！」

「仕方がない。我が国の神宮殿に風邪を引かせるわけにはいかないから、毛布を貸してやるっ」

そう言って、ラーウスさまは手をくるりと回すと、その手にはとても軽いけれど暖かい、毛布が出てきた。先ほど、ラーウスさまが

仮眠をした時にかぶっていたものだ。

「これを羽織っておけ」

「ああ、ありがたい。遠慮せずに借りる」

ルークスさまはよほど寒かったのだろう、そう言っただけで、肩にかけた。

「はー、暖かい……」

「それならよかった」

ルークスさまは軽くわたしの手を引いて、歩くようにうながしてきた。わたしはそれに合わせて、歩き始めたんだけど、ルークスさまの声で足を止めた。

「ちょっと待て。それで誤魔化そうとしているな」

「……………」

あ、やっぱり、ルークスさま、説明をしないで済ませようとしたのね。

「それで、どうしてこんな北部にまで転移魔法で移動しようとしたんだ？」

「それ、やっぱり説明しないと駄目か？」

「当たり前だろう！ なんの理由もなく、城内で危険を冒してまでやるわけないだろう！」

「積もった雪が見たくて、私がルベルにわがままを言ったという説明では納得して」

「するわけがないだろう！ 現に、ここには雪など降ってない！」  
「ですよー」



ラーウスさま、嘘をつくのならもう少しマシな嘘にしてくださいよ！ アウリスは寒いし、谷間だけど、滅多に雪は降らないんですよ！

「それに、なんでここはこんな壊れているんだ？ ここには人は住んでないのか？」

「いや、人は住んでいた。たぶん、この間の嵐の日に、この家は壊れた」

「壊れた？ ……あの嵐の日に？」

「今、神殿にも協力要請がいつているだろう？」

「ああ、治癒魔法を得意とするものが主にかり出されているな」

「ここは、ルベルの故郷なんだ」

「ルベルの……？」

あ、それ、言っちゃうんですね。

「届くはずの荷物が届かないから、なにか起こっているのでは心配して、様子を見に休みが欲しいと言われたけれど、私が許可を出さなかった」

「鬼上司だな」

「ああ、好きに言えばいい！ 私は自分かわいさに、ルベルの願いを却下したんだ！ それに、なにかあったから、荷物が届かない。」

「そんな危険な場所に、ルベル一人で行かせられる訳がないだろう！」

「それなら、正規の申請を出して、おまえも一緒に来られるように……って、それができない理由でもあるのか？」

ルークスさま、鋭すぎです！

って、気のせいでしょうか。ルークスさまの視線が、頭の上にある……。

ああああ、このところ、ずっとウイケウスの花の香りを嗅がないでも耳と尻尾が出ていなかったから油断していたけれど、今、間違はなく、耳と尻尾が出ている！ 肝心の乾燥させたウイケウスの花もウングラから逃れるために投げつけていたんだっ！

「ルベル……もしかして君は……」

「あの……」

「ラーウスは、知っていたのか？」

「知っていた。というより、知ったから、それを盾に結婚を迫った」

「ああ、おまえならやりそうだな、それ」

はー、とルークスさまはため息を吐き、それからわたしへ視線を向けた。

「よく今まで、獣人だってバレなかったな」

「……………」

「荷物が届かなくなったせいで、バレてしまった訳だ。だからその原因を調べに来たんだ」

「なるほど、そういう訳だったのか。分かった、俺も黙っておこう」

その一言に、わたしは目を見開いた。

「あ、ありがとうございますー！」

「ルークス、助かる」

「ラーウスのためじゃない、ルベルのためだからな！」

ルークスさまはそう言って、赤い顔をして、視線をそらせた。

\*二十四\* 家族との合流

ルークスさまとともに三人で、わたしたちはウイケウスの花を乾燥させる小屋へと向かうことにした。ルークスさまの視線が、やらと頭の上にあるような気がするけれど、気にしない、気にしない。

「ルークス、ルベルを見るな」

あ、ラーウスさまも気がついていましたか？

「私のかわいいルベルをそんなに見るな」

「いやあ、獣人って本当にいるんだなあと思って。ルベル、その耳、触っても？」

「っ！」

わたしは慌てて、頭上の耳を手のひらで押さえた。

駄目です、触ったら駄目っ！

「ルベルの耳は、私専用だから、駄目だ」

「あー、はいはい、おかしいなあ、さっきまで寒かったのに、急に暑いねえ」

「なら、毛布は要らないな」

「いや、毛布は必要だ！」

という二人のやりとりを後ろに聞きながら、わたしは小屋へと赴いた。実家のあった場所から小山での間もあちこちが荒れていたし、

途中のウイケウスの畑も思っていた以上の惨状になっていて、思わず眉間にしわが寄ってしまった。

このあたり一帯には、ウイケウスの畑が広がっていた。五角形の畑には網が掛けられ、整然と並んでいる様はなかなか壮観だったのに、今では、畑の痕跡さえないほど、なにもなかった。

わたしの家族は、嵐のせいでウイケウスの畑が吹き飛ばされたことをわたしに伝えられなくて、不作と言って誤魔化したのだろう。

こんなことになっているなんて、知らなかった……！

わたしの家族も、わたしに真実を話してくれば、どうにかできたことがあったかもしれないのに。

そう思うと、自分の不甲斐なさに腹が立った。

「ここに畑があったのかい？」

ラーウスさまの質問に、わたしはうなずいた。今、口を開いたら、泣いてしまいそうだったのだ。

「ウングラ避けの網を嵐で飛ばされて、ウングラに畑を根こそぎ荒らされた感じだな、これは」

「……はい」

「ルベル、この辺りにウングラの気配はあるかい？」

ラーウスさまの質問に、耳を澄ませ、辺りの臭いを嗅いでみる。ウングラ特有の這う音も、臭いもない。ウングラが近くにいと、それぞれするけれど、それもなし。

「たぶん、今は周辺にはいません」

「さつき、私たちが遭遇したのだけかもしれないね、集団は」

「それだといいたのですが……」

ウングラは、十匹近くが群れになって生活していると推測されている。先ほど、遭遇した集団も、数えていないけれど、それくらいだと思われる。

「ルークス、ウングラの退治の仕方を知っているかい？」

「ウングラ……？」

「ああ、やはり、知らないか」

普通はウングラなんて生き物が存在しているというのは知られていないと思う。ただ、ウイケウスを撒くと、なにかよく分からないものに知らないうちに畑を荒らされるのもあり、忌み嫌われている。

ラーウスさまはルークスさまにウングラのことを説明していた。聞いているだけで、鳥肌が立つ。ああ、気持ちが悪い。

「なんだ、その気持ちが悪い生き物は」

「そうなんだ。そんな物が存在しているんだ」

「で、目がいいということは、逆に考えると、目が弱点でもあり得るということだな」

「なるほど」

「あと、それだけ目があるということは、夜行性である可能性も高いな」

「夜行性……？ ああ、それで、夜の間には畑を荒らされているのか」

「そう考えれば、駆除は難しいけれど、近寄らせないことはできそうだな」

「どうするんだ？」

ルークスさまはラーウスさまの耳になにかごによごによと話をしてた。ラーウスさまはただうなずいて、聞いているだけだった。

「夜まで待たなければならぬな」

「幸いなことに、俺は今日は休みになっている。明日の朝までに神殿に戻る事ができれば、問題ない」

「私も……そうだな、朝までに戻ることができれば、幻影であることがバレないでいられるかもしれないな」

「かもしれない、だなんて、そんな危ない橋を渡らせなければならぬんですか？」

「まあ、どうにかなるだろう」

「幸いなことに、まだ朝だ。夜までに色々と用意が必要だ、今からやろう」

二人の間でなにか作戦が立てられたようだった。

「ルベル、とりあえず、ウイケウスの花を乾燥させる小屋に行ってみよう」

「あ、はい」

当初の予定どおり、わたしたちは小屋へと向かった。

畑の状況が悲惨だったから、小屋も壊れているかとも思ったけれど、壊れていなかった。となると、家族はここにいる可能性が高い。ウイケウスの花を乾燥させるために、小屋は隙間だらけになっている。隙間から覗くと、見知った姿があった。

「父さん、母さん、フロンズ兄さん」

そう呼びかければ、最初にフロンズ兄さんが気がついたようだ。驚いたように目を丸めて、こちらを見ている。

「ルベルっ？」

隙間からフロンズ兄さんの赤い目が見えたと思ったら、遠ざかり、扉が開くと、飛び出してきた。

「ルベルっ、どうして来たんだ！」

「どうしてって、荷物が届かなくて、心配で……」

そう言えば、フロンズ兄さんは大きなため息を吐いた。

「はー、やっぱり来るよなあ」

「どうしてこんなことになっているって知らせてくれなかったの！」

「いや……危ないから……」

「危ないって、危ないのは兄さんたちじゃないの！」

「そうだが……」

「荷物が届かないから、わたし、耳が出ちゃって、バレちゃったじゃないの！」

そうなのだ、原因はそこなのだから、それを責めれば、フロンズ兄さんは絶句した。

まさか、わたしの正体がバレてしまうとは思っていなかったらしい。

フロンズ兄さんの視線は、わたしの頭の上にあった。それで分かっただけ、頭を抱えて座り込んだ。

「ああ……」

わたしたちの声に、小屋の中にいた、父と母も出てきた。

「ルベル！」

わたしの姿を見て、父さんと母さんは驚いていた。しかも耳が出ていることにも気がついて、目を丸くしていた。

さらに、わたしの後ろにいるラーウスさまとルークスさまにも気がついたようだった。

「お二人は、ルベルのご両親ですか」

「え……、ああ、そうだが」

父さんは警戒気味にそう返事をすれば、ラーウスさまはわたしの横に並ぶと、右手を胸元に当てて、綺麗なお辞儀をした。それを見て、父さんはすぐにラーウスさまの正体に気がついたようだった。母さんの手を引くと、二人は慌ててひざまずいた。

「ラーウス王子」

「書面では、何度かやりとりがありますが、初めまして、ですね。

ラーウス・アーテルです」

「フォルティス・ロセウス、ルベルの父です」

「テネル・ロセウス、ルベルの母です」

兄もようやく自体が飲み込めたようで、父さんと母さんの後ろで、慌ててひざまずいた。

「フロンス・ロセウス、ルベルの兄です」

アーテル国の奥地に住んでいるとはいえ、一応、わが家は侯爵家らしい。そのため、両親から城でのマナーなどを一通り、教わってはいいたので、三人は名乗った後、口を閉じた。

王族の前では、許可がなければ口を開いては駄目なのだ。

ラーウスさまはそのことを思い出したのか、苦笑しながら口を開



いた。

「お三人とも、そんなにかしこまらないでください。今回は、非公式で突然の来訪、申し訳ございません。先日、ご報告させていただいたとおり、私とルベルは籍を入れました。あなたたちは私の義父と義母、義兄であるのですから、遠慮なく、いつでも口をきいていただければと思います」

「はっ、ありがとうございます」

父さんは頭を下げると、母さんと兄さんも倣って頭を下げた。

「さあ、立ってください。私たちには時間ありません。今の状況を説明していただいて、解決に向けて行動を起こしましょう」

ラーウスさまの一言に、父さんたち三人は、立ち上がった。

\*二十五\* 元凶は嵐

わたしたちはとりあえず、小屋の中へと入った。

中には、わたしが編んでいたのと同じような網に囲われたウイケウスの花が所狭しと干されていた。それを見て、ほっとした。

「私とルベルは、ここに来る途中で、ウングラと遭遇しました」

その一言に、父さんたち三人は、同時に震えた。ウングラというのは、それくらい、わたしたちにとっては、恐ろしい生き物なのだ。

「ウイケウスの花がないときのウングラは、とても温厚なのですが、春の繁殖期の準備に入っているようで、とても凶暴になっています」

「なるほど、それで襲ってきたのか」

「襲ってきたですってっ？」

「ええ。しかし、事なきを得ました」

ラーウスさまの言葉に、三人はホッと息を吐いた。

「それにしても、ウングラは乾燥したウイケウスの花にも反応するのですね」

「えっ、そんなはずは……」

「ブレスレットに入れていた、乾燥したウイケウスの花を投げつけたら、反応していたし、手のひらについていた物も目ざとく見つけたわよ」

わたしの一言に、父さんは唖っていた。

「昔、乾燥したウイケウスの花に反応するかどうか、試したことがあったんだが、その時はなんの興味も示さなかった」

「そうなの？」

「この間の嵐で、ウングラのねぐら近くに あるウイケウスの花が、吹き飛んでしまったのかもしれない」

ウングラのねぐらの近くにウイケウスがあるとは、初耳だった。

「あのウングラというのは、ウイケウスの花しか食べないのでしょ  
うか」

ラーウスさまの質問に、父さんは首を振った後、答えた。

「いいえ。他の植物も食べているようなのですが、ウイケウスの花  
が大好物で、特に繁殖期には好んで食べるようです」

「なるほど。ウイケウスはますます面白い植物だ」

ラーウスさまはそう言って、楽しそうに笑った。研究馬鹿とはこ  
のことを言うのだろうか。

「それにしても、ルベルの実家が壊れたのも、畑が荒らされたのも、  
ウングラの大暴走といい、すべては嵐の日のせい、か」

「そうですね」

と、話が落ち着いたところで、父さんの視線がわたしの頭の上へ  
と向かった。

「で、ルベル」

「う……っ、はい」

「ウイケウスの花を煎じた物を飲んでいないのか？」

「え、いえ、飲んでいただけで、なくなったから……！」

「なくなる、だと……？ いつも、余裕を持って送っているのだから、余っているのではないのか？」

「いえ、それがもうなくて……」

「なんと！」

「それが、毎朝、きちんと飲まないで、こうして耳と尻尾が出て……」

「普通は週に一度で済むはずなんだが、ルベルは違ったのか？」

この質問は、わたしにとりより、母さんに向かってされたものだった。母さんは大きくうなずいた。

「ルベルは小さい頃からウイケウスの花が効きにくいのか、毎日、飲ませていましたよ？」

「なんだってっ？」

それで送る量が多かったのか！ と父さんの叫び声を聞いて、わたしは思わずため息を吐いた。父さん、娘の体質くらい、把握しておいてよ……。

「ルベルはウイケウスの花が好きだから、母さんがたくさん送るよ」  
うに言っているのかと思っていた

との言い訳に、わたしは思わず、母さんと顔を合わせた後、ため息をまた吐いた。

「確かに、ウイケウスの花の匂いは好きだけど、週に一度でいいと思っていたのなら、いくらなんでも多いと思わなかったの？」

「思ったが、母さんが送るように言ったから……」

今の会話で分かったと思うけれど、わが家は母さんが一番強くて、父さんは立場が弱い。

「だから、わたしはルベルに送るようにと言ったのですよ」

「しかし、これを送ると、町の人たちが困るだろう！」

「外部から人が来ることは少ないですから、そんなに困りませんよ。むしろ、ルベルはこうして耳と尻尾を出してしまっているではないですか」

「まあまあ、過ぎてしまったことを言い合っても仕方がないじゃないか」

いつものように兄さんが間に入って、二人のケンカを止めてくれた。

父さんと母さんは仲がよいのだけれど、たまにこうして小さなケンカをする。そして、それを諫めるのは、いつも兄さんの役割だった。

「それで、おまえはラーウス王子さまと結婚したのか？」

え、いきなりそっちに話が飛ぶのっ？

真っ赤になったわたしを庇うように、ラーウスさまは父さんの前に進むと、頭を下げた。

「順番が違つと怒られてしまうかもしれないが、先日、ここにいるルークスの下、無事にルベルと結婚をいたしました」

ルークスさまは人好きのする笑みを浮かべて、ラーウスさまの後ろで頭を下げていた。

「王子、頭を上げてください。お詫びをしないといけないのは、こちらです。こんな跳ねっ返りでじゃじゃ馬娘をもらってくださり、大変な栄誉でございます」

「跳ねっ返りでじゃじゃ馬というのは賛同いたしますが、むしろ、ルベルが獣人であることを盾に取り、婚姻を迫りました」

「なんと！」

驚きますよねー。わたしも、何度聞いても驚きますもの。

「ルベル以外は無理なんです」

「無理……とは？」

「ルベル以外は、私を受け入れることができないのです」

小屋の中が一瞬、しん……と静まったけれど、父さんは咳払いをして、口を開いた。

「こんな娘ですが、未永くよろしくお願いいたします」

「こちらこそ、よろしく申し上げます」

そんな会話が交わされた後、ラーウスさまは表情を引き締め、父さんを見た。

「表の惨状を見てきました。町中はどうなっているかご存じですか」

「それは、嵐で町が壊れていないかということですよ」

「ええ、そうです」

「町は無事です。町の外れにあったわが家と、ウイケウスの畑がやられたくらいですね。……ああ、あとは、ウングラのねぐらもたぶん、嵐にやられたのかと」

それは、運が良かったんだか、悪かったんだか。  
うちの被害だけで済んだのだから、よかったということにしてお  
こう。

「ウイケウスの種は？」

「幸いなことに、この小屋に残っていました。それで、撒こうと思  
ったのですが……畑があのとおりで……」

「父さん、わたし、畑を耕すよ！」

「いや、しかし……」

「私も手伝いましょう」

「えっ、王子にお願いするなんて、とてもではないですが」

「こう見えても私、植物学を専門としています。薬草園もルベルが  
来てくれるまで自分ですべてやっていましたし、大丈夫です」

「俺は力仕事はパス」

さりげなくルークスさまは拒否をしてくれた。

「ルークス、おまえ、編み物できたよな」

「えっ、できるのですか？」

「できるよ。ラーウスだってできるだろう？」

「ええ……」

「ウングラ避けの網の作り方を習って、編むのを手伝え」

「……分かった」

こうして、わたしたちは日が暮れるまで手伝うことになったのだ  
った。

日が沈むまでに、ウイケウス用の畑は、わたしとラーウスさま、父さんの三人で、わたしが城の薬草園に作ったよりも大きいものが計六個、できた。一つずつに網を掛けるのは非効率なので、一番外側を覆うようにすることにした。

そもそも、畑の形がどうして五角形なのかと思って父さんに聞くと、父さんも知らないとのことだった。

とはいえ、試しに四角や三角の形の畑に種を撒いたこともあるそう。

どうなったのかというと、問題なく育ったそうだけど、花の匂いがイマイチだったそう。五角形の畑にたどり着いたのは、先祖たちの知恵と経験に基づくものであるのだらうと父さんは語った。

五角形の畑は、広めに掘った溝と隣接するように六つ。

正直、五角形というのは、作りにくい。それに、網を作るときにもそうなのだけど、段々と形が崩れて、かろうじて五角形？ という感じになるけれど、それでウングラが来ないのだから、不思議なものだ。

畑を作ったけれど、ウイケウスの種を撒くのは網がすべてできあがってからにするとのこと、今日の作業はここまでとなった。

ちなみに、お昼ご飯は、久々の母の手料理で、うれしくてたくさん食べ過ぎた。

ラーウスさまは初めて食べる物が多くて、おっかなびっくりといった感じだったけれど、ルークスさまは特に表情を変えることなく食べていた。



作業を終えて、小屋に戻ると、ウンゲラ避けの網が部屋の端に積み上げられていた。

「さて、ラーウス」

小屋の中でずっと網を編んでいたルークスさまの機嫌は、あまりよろしくないようだった。

「用事は済んだだろう、帰るぞ」

そう言って、ぐっとラーウスさまの腕を引っ張った表情は、怒っていた。

「おまえのわがままに、今日一日、付き合っただった。しかし、そろそろ限界だ」

「ああ、分かっている」

「すみません、ルークスさま。わたしのわがままにお付き合いいただきまして……」

「ルベルは問題ない。そもそもが、ラーウスがルベルの願いを聞き届けていれば、こんなややこしいことになってなかったし、もっと早く解決させることができただろう……」

「……………」

ラーウスさまはルークスさまの言葉に、そっぽを向いた。

「まったく、本当におまえというヤツは、ロクなことをしない」

ルークスさまの一言に、わたしは内心で同意していた。力技過ぎだと思っただけです、今回の件は。

でも、ここが獣人の町だとバレるのがマズイから、無理を押し通

したわたしの責任でもある。

「ルークスさま。ラーウスさまをそんなに怒らないでください。わたしがわがままを言ったせいですから」

「ルベルは問題ない。家族を心配するのは当たり前だし、おまえ、ルベルを一度も帰省させてないらしいじゃないか」

ルークスさまは網を編みながら、母さんと兄さんに話を聞いたのだろう。

「職権乱用もいいところだし、なによりもおまえ、ルベルが休みの日でもルベルを探し回してるんだって？ ストーカーじゃないか」

それは仕方がないんじゃないかなあ、と今になれば思えるのだけど、やっぱりそう思いますよねえ。

「仕方がないだろう！ ルベルが側にいないと、体調を崩すのだから！」

「そう言って、ルベルを縛り付けるのは止める」

「あの、ルークスさま。わたしは……」

「ルベルは黙っている」

ルークスさまはなにやらご立腹のようです。

わたしは特に困っていないのだし、今回の件は結果としてはむちやくちやだったけれど、無事を確認できたし、なんの問題もない。

「ルークスさまっ」

黙っていると言われたけれど、わたしはラーウスさまを背中に隠して、ルークスさまの前に立った。

「確かに、ラーウスさま付きの騎士になってから、一度も戻れなかったのはちょっと淋しかったですけど、今日はラーウスさまとルクスさまに来ていただけて、結果的にはよかったと思っています」

「……ルベル」

「ルベル、この男を甘やかすなっ」

「甘やかしてないです。本当にそう思っているのですから」

「……たく、今回はルベルに免じて許してやるが、もう少し、ルベル離れをしる、ラーウス」

「それは無理だな」

「……………」

しれつとラーウスさまはそんなことを口にした。

「常に一緒にいるわけではないですし、わたしは苦に思っていないですから、大丈夫です」

「ルベルはほんと、甘いな。この男をつけあがらせるようなことを言ってる」

「いえ、ほんとに……」

「分かった、もういい。それはともかく、早く帰ろう」

ルクスさまの言葉に、ラーウスさまはうなずき、小屋を出ようとしたのだけれど……。

なにか、外の様子がおかしい。わたしの頭の上の耳が、奇妙な音を拾った。それは、地面を這うような音。なんとなく、それに聞き覚えがあった。

「あの、今、外に出ない方がよいような気がします」

そう口に出した後、ぞわぞわとしたものが背筋を這った。

小屋の中にいる父さんと母さん、兄さんを見ると、同じように感じたのか、渋い表情を浮かべていた。

「ウングラが外にいる」

「えっ」

「ここに、乾燥しているけれど、ウイケウスの花があることに気がつかれてしまったようだ」

兄さんの一言に、ラーウスさまとルークスさまは顔を見合わせた。

「ウングラの弱点は？」

「……残念ながら、分かりません」

ウングラの生態は、未だによく分かっていない。

「夜行性だから、出てきたのかもしれないな」

今日、ウイケウスの畑を耕して思っていたのだけれど、ひどい荒らされようだった。しかも、根こそぎこっそりと食べられていたのだ。どうやら、ウングラは花だけではなく、葉、茎、根までも食べ尽くすようだった。今日、耕したところは、一部だ。かなり広い範囲の畑なのに、それが根こそぎこっそりって、どれだけ食欲旺盛なのよ。

「ここにあるウイケウスは死守しなければ……!!」

「町の人たちが困ってしまうわ」

とはいえ、どうやってウングラを撃退すればいいのか分からない。下手に切ったりしたら、辺りに毒をまき散らすことになってしまう。

「ウングラは、毒を持っているので、下手に傷をつけられないんです」

「ウングラは夜行性、と言ってたよね？」

ラーウスさまの問いに、大きくうなずくと、にやりと笑われた。

「いいことを思いついたんだ」

出た！ ラーウスさまの“いいこと”発言！

「ルークス、ちょっと耳を貸せ」

「……なんだ」

二人はなにやらこそこそと話をし始めた。

「光を……」

「それでいけるのか？」

洩れ聞こえる言葉だけではラーウスさまがなにを思いついたのか分からないけれど、今回は任せても問題ない……ことにしよう。

「私とルークスの二人が外に出ます」

「え、危ないですよ！」

「大丈夫、対処方法を思いついたから」

「ウングラを傷つけずに、ここから去らせればいいのですよね？」

「ええ、そうですね……」

そんなことが可能なのだろうか。

「失敗しても、この小屋は死守してみせるから」

「ラーウスさま、それは危ないです！」

わたしは隙間から外を覗いてみた。

「……………っ！」

今まで、見たことがないくらい数のウングラがこの小屋に押し寄せていた。こんなにいるなんて、信じられない！

「ラーウスさま、外を見てくださいつ」

わたしの言葉に、ラーウスさまは外を覗き、絶句していた。ルークスさまも同じように覗いて、呻いていた。

「別のところからもウングラが来たってことか？」

「そうかもしれません」

「それでも、やらなければ、やられてしまう。町の人たちのためにも、ウングラがもうここに来ないようにしなければならぬだろう？」

「そうですね……………」

「大丈夫だ、任せておいてほしい」

ラーウスさまはそう言うと、笑みを浮かべた。

\*二十七\* ウングラ撃退法

ラーウスさまとルークスさまの二人だけで外に出ようとしたので、わたしは二人を止めた。

「待ってください！ お二人だけにさせるなんて、駄目です！」

「だって、危ないよ？」

「危ないのでしたら、ますます駄目です！ 大切なお二人に危険なことはさせられません！」

「そうは言っけれど、私たちにしかできないことなんだよ？ ルベルは魔法が使える？」

「う……使えません」

「じゃあ、ここは私たちに任せて欲しい。危ないって言っても、私たちには危険は及ばないよ。むしろ、ルベルが危ない」  
「……………」

わたしはラーウスさまの騎士なのに、今は思いつきり立場が逆になっっている。

こんなことでは騎士団長に怒られてしまう……！

「しかし！」

「じゃあ、ルベルは小屋の中で待機していて。私たちが危なくなったら、出てきて助けて」

「ああ、それがいい。そうしてほしい。この小屋を守っておいて」

ラーウスさまとルークスさまの二人にそう言われてしまえば、わ

たしはこれ以上、強く言えなかった。

お二人を矢面に立たせることになり躊躇があったけれど、わたしたちにはそれほど猶予はなかった。

「分かりました。ここで待機して、小屋を守ります」

「そうしてくれ」

ラーウスさまはそう言うてにっこり笑みを浮かべ、わたしの頭と耳を撫でた。やさしいその手は気持ち良くて、思わずうっとりしてしまっ。

「ルベルのその顔、私は好きだな」

「っ!」

なんでこんなときにそんな甘い言葉を言えるのですか！

「ラーウスさまっ!」

「ははっ、赤くなってかわいい」

「もっっ」

ラーウスさまはもう一度、わたしを撫でると、表情を引き締めた。

「ルベル、危ないから外を見ないように」

「……はい?」

外を見ると危ないって、なにをする気なんですか？

それ以上の説明はなく、ラーウスさまは小屋の扉に手を掛けた。

「ルークス、作戦どおりにやれよ」

「おまえこそ、へマすんなよ」



「するか」

二人は軽口を叩きながら小屋を出て行った。

そう言えば、光がどうか言っていたけれど、二人はなにをする気なのでしょうか。

ラーウスさまから覗くと言われてたけれど、そつと隙間から見ると、夜でも分かる、ウングラの光る無数の目。一体、どれだけのウングラが集まっているのだろうか。

わたしは怖くなって、隙間から目を離した。

「ルベル」

それまでずっと成り行きを見つめていた母さんが声を掛けてきた。

「あなた、いい人を捕まえたわねっ」

「母さん……」

こんな時になにを言い出すのかと思つたら。

「ラーウス王子もルークスさまも、ほんと、素敵な方たちね」

母さんはつつとりとした表情で、宙を見つめていた。

「そうそう、城に帰る前にオース家に寄ってね」

「え……？」

「ラーウスさまを連れて行って、ざまあしてきて！」

「母さん、その“ざまあ”ってなんですか……」

「今、流行らしいのよー！」

「……………」

言っている意味がよく分からなかったし、わざわざオーズ家に行く気にもなれなかったけれど、ここは母さんに従っておかなければ、後が怖いのが分かったので、素直に行くことにした。

「気が進まないけれど、行くわ」

「大丈夫よ、母さんもついていくから！」

絶対これ、好奇心からついていくって言うてる！

「それより、そろそろ始まるんじゃないの？」

母さんは隙間から外を覗いているようだった。わたしも覗いてみた。

ラーウスさまとルークスさまの背中しか見えなかったけれど、二人とも杖を構えてなにか唱えているようだった。二人の杖から眩い黄緑色の光がこぼれていた。

もしかして、光って……。

「母さん、下がって！」

「え、これからいいところじゃないの！」

「このまま覗いてたら、目をやられるわよ！」

わたしの一言に、母さんは慌てて後ろに下がった。  
その途端。

小屋の中にも差し込んでくる、眩い光。

ウングラが夜行性ってのを逆手に取って、眩い光で目潰しをするつもり……？ そんなことして、大丈夫なのっ？

外から、聞いたことのない変な声が聞こえてきた。

「きいいいいい」

「きききいいい」

なに、これ？ ウングラの声……？

わたしは光が収まるのを待って、外を覗いた。

「っ！」

ラーウスさまとルークスさまは杖を灯り代わりにして、辺りを照らしていた。

ウングラの緑の目が黄緑色になっていて、回れ右をすると、すぐと退散していくのが見えた。

え、あれ、なに？

わたしは信じられなくて、そして、もう安全だと確信して、小屋から飛び出した。

「ラーウスさま、ルークスさまっ！」

「ルベル」

晴れやかな表情を浮かべたラーウスさまは杖を構えたまま、わたしの元へと歩いて来た。

「上手くいったよ」

「一体……？」

「うん。ほら、ウングラは夜行性という話だっただろう？ 私たちがウングラに遭遇した時、あれは巣に戻っているところだったよ。うだど気がついたんだ」

わたしたちがああ洞窟から出て、実家に向かっている時は、夜明けだった。

「そこにばったり、私たちと出遭ってしまったウングラは、私たちを敵と見なして、攻撃してきた、と」

そう言われてみれば、つじつまは合う。

「乾燥したウイケウスの花は、朝日を浴びて、鮮やかな生の花に見えるたんじゃないかな」

「それで……」

「それで、気がついたんだ。目がいいとはいっても、色にしか反応しないのではないか、と」

「色に……?」

「ウングラの体色は、緑から黄緑色。これは紫の反対色だ」

「え、そうなんですか?」

「ウングラには縄張り意識があると、前にルベルが説明してくれたよね?」

話がぼんぼんと飛び、わたしは今、ついていくのにやっとだった。

「はい、そうですね」

「眩い黄緑色の光を浴びせてやれば、別の群れがいると気がついて、退散してくれるかなと思っただんだ」

「それで、今、試してみたら……」

「実験は成功した。そして、ウングラがどうしてウイケウスの花を目指すのかというと、自分たちと反対の色を持っているからだ」

「となると……紫色であれば、別にウイケウスの花でなくてもいいと?」

「そうなるな」

どうして反対の色を求めるのかは分からないけれど、ラーウスさまの説明は筋が通っているように思えた。

「そういえば、網の色は緑だよな」

「そうですね。ウングラの目の色を模してますから」

それにしても、色にしか反応していなかったというのをあれだけ間に発見するなんて、ラーウスさまってやっぱりすごい。

「とりあえず、あのウングラの集団は、もうここには近寄らないだろう」

「え、どうしてですか？」

「ここが別のウングラの巣だと認識したと思うんだ」

「そんなことまで……」

あの黄緑色の光一発で本当に撃退できたのかは分からないけれど、近寄ってこないのなら、ずいぶんと安心だ。

「小屋の色も緑にした方がいいかもしれないな」

「そうですね、それは父に伝えておきます」

わたしたちは小屋の中に入り、経緯を報告した。

「まあ、素敵！　素晴らしいわ！」

とは母さん。

「小屋の色を黄緑に……なるほど、ここに大きなウングラがいると

思わせねばいいのですね」

とは父さん。

とりあえず、どうにか危機は乗り切った……のかしら？

\*二十八\* “ざまあ” ってなんですか

危機は去ったので、わたしたちは城に帰ることになったのだけれど、ここで母さんがずっとラーウスさまの前へと身を乗り出した。

「ラーウス王子。一つ、お願いというか、提案があるんです」  
「提案？」

ラーウスさまは訝しげな表情で、母さんを見た。母さんは白い髪をゆらゆらさせながら、口を開いた。

「うちのかわいいルベルを振った、オース家のカニス青年を見たいと思いませんか？」

母さん、なんてことを！  
ラーウスさまもその一言に、表情を輝かせた。

「それはいい提案です。ルベルを振ってくださいたおかげで、私が結婚できたのですから。お礼を言いに行かなくては」

うわあ、ラーウスさま、性格悪いですよ、それ！

「もちろん、案内をしてくださるのですよね？」

とラーウスさまはにっこり。それに対して、母さんも赤い瞳を細めて、にっこり。

「もちろんでございませうと」

なに、これ。

二人とも、性格悪いと思いますよ！

父さんと兄さんは、小屋でお留守番となった。

「ご機嫌なラーウスさまに手を取られて、母さんを先頭に、わたしたちはオース家に行くことになった。

いつもの母さんはおっとりしているのに、今日はなんだかいつもと違って見えた。身体が弱いんだから、無理していなければいいんだけど。

というわたしの心配をよそに、母さんはずいぶんとご機嫌だった。

「でも、わが家としても、カニス青年と婚約破棄になって良かったと思っと思っていますのよ」

「ほう？」

「ルベルが幼い頃、ルベルの将来を心配したわたしの父が勝手に決めたことですよ」

「そうだったのですね」

「ルベルは幼い頃からお転婆で、このままでは行き遅れてしまうと父が余計な心配をしましてね」

「お転婆……」

母さん、なんてことをラーウスさまに言うのよ！

「ルベルは素敵ですよ。活動的で、キラキラしていて、そしてなにより、やさしい」

「そう褒めてくださるのは、ラーウス王子だけですよ」

「そんなことはないですよ。私の兄も、ルベルのことを褒めていま



した」

ラーウスさまが今言っているお兄さまって、第二王子かしら？  
あの方が人を褒めるなんてあるのっ？

「おまえには、ルベルくらいのじゃじゃ馬がちょうどよい、と」

ラーウスさま、それ、褒めてない！ 褒めてないです！

ラーウスさまの言葉に、母さんとルークスさまが同時に笑い出した。  
た。

やっぱりそこ、笑うところですよね……。

「ラーウス、それ、褒めてないぞ」

「いや、褒めているぞ。口を開けば罵詈雑言しか飛び出さない次兄にしては、褒め言葉だと思わないか？」

「そうかもしれないが……」

ルークスさまは涙が出るほど笑っていた。そんなに笑わなくても……。

「ふふふ、面白いですわね」

母さんもくすくすと肩を震わせて笑っていた。

もう。

そうこうしていると、町の入口にたどり着いた。

一見したところ、特に壊れているようにもなくて、ホッとした。  
久しぶりの町は、夜のせいで、静まり返っていて、ちよっと淋しい。  
い。

静かな町をわたしたちは黙って歩き、町の中心にある一際大きな

お屋敷の前にたどり着いた。

「オース家に到着いたしましたわ」

記憶の中のオース家と変わりのない、大きなお屋敷。

やはりこれを見ると、町はずれのわが家が侯爵家だなんて思えない。  
い。

母さんは躊躇することなく、扉についている呼び鈴を押した。

なにも考えないで来たけれど、夜に、しかも、なんの連絡もなく来るのって、非常識じゃない？

と思っていたけれど、それほど待つことなく、扉が開き、記憶の中よりもずいぶん歳を取ったオース家の当主が姿を現した。

「お待ちしておりました」

「いいえ。突然の訪問、失礼いたします」

そのやりとりで、母さんが昼間にオース家に連絡を入れていたことが分かった。

「立ち話もなんですので、中へ」

「なんとって、今はピウスさまのお時間。すぐに戻りますので、こちらで失礼いたします」

長話をする気はないと知り、ホッとした。

「カニス青年は？」

「こちらにあります」

と、オース家当主の後ろから、茶色い髪の一人の青年が現れた。  
幼いとき、一度だけ会ったことのある、カニス。あの頃は金髪で、

かわいらしい姿をしていたような気がしたけれど、今は、目つきが悪く、しかも顔色もよくなって、素行が良くない生活をしているのが顔に表れていた。

「この度、ルベルが結婚しましたから、報告に来ましたの」

「ああ、その節は、大変、申し訳なく……」

「いいええ。おかげさまで、いいご縁に恵まれて、結婚をいたしましたのよ」

その一言に、カニスは目を見開き、わたしを見た。

カニスがなにか言葉を口にしようとしたとき、家の中の扉が開いて、綺麗な女性が出てきた。その人は、大きなお腹を抱えていた。見覚えのある顔だけど、すぐにだれだか思い出せない。

「あら、だれか来たの？」

「え……あ、ああ」

しばらく考えて、出てきた女性がだれだか思い出した。

そうだ、昔からなにかあることにわたしに突っかかってきていた、ドロースだ。

ドロースの家は、町中で商売をしていて、かなり裕福な家だ。一方のわが家は、町はずれの小さな家で慎ましく暮らしていた。華やかな生活がすべてだと思っているドロースは、わたしの家のことが信じられないようだ。そのことでいつもなにか言ってきていた。対するわたしは、別にあの生活に不満はなかったし、むしろ、楽しかったので、そのことを言われるのが嫌だった。

もしかしなくても、わたしと婚約を取りやめたのは、ドロースを孕ませてしまったからなの？ そんなところだろうとは思っていたけれど、わたしはホツとした。素行が悪いと聞いていたけれど、ドロースのことは見捨てなかったのだ、と。

しかし、緊迫している空気を読まないドロースは、わたしを見るなり、ゲラゲラと笑い出した。

「あら、やだ。なんでその人、耳出して来てるの？ 非常識！」

すっかり忘れていたけれど、わたしの耳と尻尾は出たままだった。このままでは城に戻れない。

それよりも、ドロースはわたしのことが分からないのだろうか。分かっているわざとこつという態度なのだろうか。そこが読めなかった。

「しかも、こんな夜に来るなんて、ほんとと、常識がなくてないわね！」

それを言われると、こちらとしては反論の余地もない。

どうしたものかと思っていると、ラーウスさまがにっこりと笑みを浮かべ、ドロースの前へと立った。

ラーウスさまの麗しい顔を見て、ドロースは真っ赤になった。

「非常識を承知で、ご挨拶に参りました。ごくつろぎのところ、大変失礼いたしました」

「え、ええ……あのっ」

「ああ。挨拶が遅れ、失礼いたしました」

ラーウスさまは渾身の笑みを浮かべ、口を開いた。

「ラーウス・アーテルと申します」

「っ！」

オース家の面子は、その一言に固まった。

「一言、挨拶だけでも思いうかがったのですが、このような時間になりまして、申し訳ございません」

ラーウスさまは、頭を深く下げた。

「それでは、失礼いたします」

ラーウスさまはわたしたちだけに見えるように合図を送ってくる  
と、そそくさとオース家から出た。

わたしたちは町に入った時と同じように無言で出て、足早に小屋  
へと戻った。

小屋に入るなり、三人はお腹を抱えて笑い始めた。  
え、笑うところですか？

「あー、おつかしー！ あの三人の驚愕した顔！」

母さんは顔を赤くして、笑っている。

事情の分からない父さんと兄さんは、きよとんとした顔をして、  
母さんを見ていた。

「なにをやったんだ……？」

わたしは先ほどのオース家でのやりとりを、かいつまんで説明を  
した。途中、ラーウスさまとルークスさまが補足をしてくださった。  
すべてを話した後、父さんと兄さんも笑い始めた。

「ぷっ、オース男爵の驚いた顔、見たかったな！」

「カニス青年の悔しそうな顔も、面白かったわ」

「ドローも驚いた顔をしていたのか？」

「してたわよ。あの様子だと、ルベルのこと、きちんと認識してないみたいだったけれど！」

「ドローはルベルのことをいじめていたからなあ。あいつ、嫌いだ」

みんな、性格悪いですよ！

それに、なにが面白いのか、わたしには分かりません！

「オース家から煮え湯を飲まされることをよくされていたから、やり返せてスカッとしてるんだよ」

「これが今、流行りの、ざまあよ！」

わたしにとってはよく分からないけれど、父さんたちがすつきりしたのなら、いいってことにしておこう。

「それでは、本当に私たちの用事は終わったね」

「最後のはよく分かりませんでしたけれど、終わったと思います」

\*二十九\* 帰還

母さんは、わたしが城に帰る前に、乾燥したウイケウスの花を煎じたものを用意してくれた。

あたりにあの独特な甘い香りが漂うのだけど、わたしは反射的にあの苦さを思い出し、思わず顔をしかめた。だけど、あれを飲まなければ、わたしは城には帰られない。

「ルベル、そんなに不味いのかい？」

とは、前から興味津々だったラーウスさま。

「飲んでみますか……？」

「ああ、一度、飲んでみたかったんだ」

「それでは、少し残っているのを……」

「いや、ルベルが飲んでいるのを少しもらっ

「えっ」

そう言うなり、ラーウスさまはわたしの目の前に置かれたカップを手に取り、ウイケウスの花を煎じた物を口にした。途端。

「……苦い」

「そうなんです。匂いは甘いのに、味が苦いんです」

頭ではそうだと理解しているのに、このギャップに未だに慣れない。

「しかし、なんだか癖になる味だな」

そんなことを言うのは、ラーウスさまくらいではないでしょうか。わたしはいつも、ウィケウスの花を煎じた物を冷やしてから、一気に飲む。本当は熱いのを飲んだ方があまり苦くないのだけど、ちびちびと飲むのは憂鬱になる。

冷めるのを待っている間、ラーウスさまは父さんとなにか話をしていた。

そういえば、ラーウスさまは父さんと文通らしきしていたと話をしていたけれど、本当なのだろうか。

「ねえ、母さん」

「なあに？」

父さんとラーウスさまが話し込んでいるのを、母さんはにこやかな笑みを浮かべて見ていた。

「父さんとラーウスさま、手紙のやりとりをしていたと聞いたのだけど」

「ええ、月に一度程度かしら。ルベルがラーウス王子付きの騎士になるちよつと前から始まったみたいよ」

「えっ、そんな前から？」

「なんでも、ルベルはラーウス王子にとって、いなくてはならない存在だとか、結婚をいただいたとか、結構、熱烈な内容だったみたいよ」

「……………」

なんですか、それ。聞いているこちらが恥ずかしいのですけれど！



「ラーウス王子でなければ、一蹴するところだったみたいだけど、相手が相手だから、父さんはのりくらりとお手紙のやりとりを楽しんでいたみたいよ」

「……父さん……」

「あなたがどれだけお転婆だったのかってことも、かなり書いていたみたいよ」

「うわあああ、止めてええ」

だって、ここはとても平和で、家の手伝いはしていたけれど、それだってわたしが出来ることってのは限られていたから、暇だったのよ！ それに、いたずら好きな兄さんと一緒になって、あちこちいって、いたずらするのも楽しかった。こんなお転婆になったのは、兄さんのせいでもあるんだから！

「でもまあ、お父さまはオーズ家を嫌っていたから、結果的にはラーウスさまのところに嫁げて、よかったんじゃないの？ ほら、見てごらんさい。お父さまの機嫌のいいこと。珍しいわ」

いつもは仏頂面ばかりしている父さんが、楽しそうに話をしているのは、確かに珍しい。

二人の様子を見ながら、わたしは覚悟を決めて、ウイケウスの花を煎じた物を一気飲みした。

うん、今日も苦い！

「あなたも毎日これを飲まないといけないなんて、大変よねえ」

「……本当にね」

「週に一度でも、嫌だものね。毎日これを続けられるルベルを、わたしは尊敬するわ」

「そんなところで尊敬されても、嬉しくないわ」

はー、とため息を吐き、数日分の乾燥させたウイケウスの花を受け取り、わたしは立ち上がった。

「ラーウスさま、お待たせいたしました」

「いや、大丈夫だ。君のお父上は、なかなか興味深いことをたくさんご存じだ。今後もお手紙のやりとりを続けてもよろしいでしょうか。色々はまだ聞きたいことがあります」

「わたくしでよろしいのでしたら、いくらでもお聞きくださいませ」

和気あいあいとした空気の中、わたしとラーウスさま、ルークスさまは小屋を出た。

「また来ます」

「ちよつと待て、ラーウス！ おまえ、また来ますって……！」

「ああ、こつちに魔方陣を残しておけば、いつでも行き来ができるからね」

「いや、だから、ちよつと待てって。そうそう簡単に行き来されても困るから！」

「なあに、問題ない。ルベルのためだ」

わたしのためって、なんですか、それ！ わたしに責任を押しつけないでください、ラーウスさま！

「私のわがままでルベルをなかなか実家に帰らせてあげられないし、ここは私の第二の実家でもある」

「……………」

「だから、いつ来たって問題ないだろう？」

「ええ、もちろんでございます」

父さんまで！

それを聞いたルークスさまは、がくりと肩を落とした。

「……負けた」

勝敗の問題ではないと思いますが、わたしも同じ気分だったので、小さくうなずいておいた。

結局、ラーウスさまの言葉に負けたわたしたちは、あの洞窟の中に魔方陣を敷くことになった。

ラーウスさまは懐からなにかを取りだし、液体を地面に撒いた。その後、杖を手に取り、地面をトン……と叩いた。すると、黒く輝く光が地面に走り、複雑な模様を描いた。それは見覚えのあるもので、どこで見たのだろうと少し考えて、思い出した。そうだ、執務室の床に描かれていた模様と一緒に。

「今、なにを……？」

「転移魔法の媒介となる液体を撒いたのだよ」

てつきり、地面にカリカリと手描きで魔方陣を描いているものだと思っていたから、驚いていると、ルークスさまは、否定するように首を振った。

「その男が規格外だから、そういうことができるんだ。普通は媒介を使って魔方陣を描く」

「そうなんですな」

ラーウスさまがすごいってのは聞いていたけれど、どれくらいすごいのかは知らなかった。そうだよな、みんながみんな、こんな感

じで魔法を使えるのなら、もつと魔法が普及しているはずだものね。

「これでここにこの魔方陣を定着させる」

「え、そんなことができるのですか」

「ああ。ここは人の出入りがないとはいえ、なにがあるか分からないからね。消されないようにしておく」

そう言った後、ラーウスさまはなにか呪文を唱えていた。たぶんそれが、定着のためのものなのだろう。

「定着といっているけれど、要は保存魔法だ。保存魔法もなかなか高等技になる」

「へー」

魔法の簡単な知識はあるけれど、それがどれだけのものなのか、どういった種類なのかまではさすがに分からない。ルークスさまは専門で学んでいるだけあって、わたしに分かりやすく解説してくれた。

「魔方陣は、時間と共に薄れていくものなんだ。一度きりの使い捨てならそれでいいんだが、ラーウスは本気でここと城との行き来を考えているみたいだからな。……止めても無駄だから、止めないが、行く前には俺に連絡を入れるよ、ラーウス」

ラーウスさまは呪文を唱えながら、ルークスさまの言葉に小さくうなずいた。

ラーウスさまは保存魔法も唱え終わったのか、大きく行きを吐いた。

「さて、これで帰ろう」

ラーウスさまはわたしとルークスさまに魔方陣の中に入るように  
言い、わたしたちが入ったのを確認すると、呪文を唱え始めた。

\*三十\* どこまでもやさしい世界(了)

無茶をして、アウリスに魔方陣で行ったことがつい最近のことの  
ような気がするけれど、今はすっかり暖かくなった。

あれから数か月が経った。

執務室に戻ったとき、部屋はシンと静まり返っていたし、城内も  
ざわめいていなくて、本当にバレなかったと知り、ホッとした。

ラーウスさまはルークスさまに再度、釘を刺されていたけれど、  
分かったと答えていた。

あれから数度、アウリスに行ったけれど、ラーウスさまは行く前  
には必ず、ルークスさまに連絡を入れることを怠ることはしなかつ  
たようだ。

帰ってきてからの日常は、結婚式の準備もあり、慌ただしかった。  
それでも、隣にいつでも愛する人がいるということは、とても幸  
せなことだ、それほど苦にはならなかった。

ウイケウスの栽培も、順調だった。

そして、ラーウスさまの研究の成果により、わたしは煎じた物を  
飲むことから解放された。

ラーウスさまの研究によれば、ウイケウスは微量の魔力を含んで  
いて、乾燥させて煎じて体内に取り入れることで、魔力が変換され

て、獣人の特徴を消すことができるようになってきているようだ、ということだった。そして、それは花の香りに一番含まれているというのだ。

そうか、だからポプリにしても耳と尻尾を消すことができたのか、と納得。

匂いでも大丈夫ということで、前々からラーウスさまはウイケウスの花で香油を作りたいとおっしゃっていたので、それを実行することになった。

まず、準備したのは、畑から取ってきたばかりのウイケウスから、花を分離することだった。乾燥させたウイケウスから花を取るの簡単だけど、採れたてのウイケウスから花を分離させるのは、慣れないのもあって、手間取った。

そうして集めたのは、前にニツクスの花を摘んだときに使った籠の半分ほどだった。こんなに少なくては、ほとんど香油が採れないのではないかと危惧していたら、やはり、ほとんど採れなかった。がっかりしているわたしをよそに、ラーウスさまは満足そうな笑みを浮かべていた。

え、こんなスプーンの先にちよつとの量でいいのですか？

「ルベル、これは精油といって、香り成分が凝縮されたものなんだよ。このままでは使うことはないから、大丈夫。これを油に溶かして使うんだ」

「え、これが香油なのでは……？」

「違うよ。これは香りの元。精油。これを植物油で希釈したものが香油だよ。そもそも、精油を原液で使うと、濃すぎて危険だよ」

そうなんだ、知らなかった。

「ところで、これ、どうやって作っただんですか」

「魔法で花を圧縮して、精油を取り出したんだ」

「へえ……なんだかよく分からないですけど、すごいです」

ラーウスさまはあらかじめ用意していた植物油をビーカーに入れて測り、そこにウイケウスの精油を入れて、かき混ぜた。ふんわりといい匂いが漂ってくる。

「ルベル、これを毎朝、耳の後ろに塗るといいよ」

「えっ？」

「たぶんだけど、それで一日は保つはずだ」

「あの……？」

「乾燥したウイケウスの花を煎じた物を飲む代わりに思うんですけど」

「え、あ、はい！ ありがとうございます！」

「それと」

「はい」

「ルベルが私と結婚してから、ウイケウスを煎じた物を飲まなくても耳と尻尾が生えなかったのは、たぶんだけど、私の魔力を体内に取り込んだからだと思うよ」

「え、えっ、……え」

ラーウスさまは意味深な笑みを浮かべると、先ほど作った香油を瓶に詰めて、わたしに渡してくれた。

「だから、これはあんまり必要ないかもしれないね」

「ラッ、ラーウスさまっ！」

「ふふっ、今もかわいいけど、夜のルベルもかわいいよ」

「……………っ！」

なんとという爆弾発言をしてくれるのでしょうか、ラーウスさまは！



もっっ！

「こっ、香油、ありがとっございます」

話をそらせたくてお礼を言えば、また、笑われた。

「いつまでも初心でかわいいな、ルベルは」

「ラーウスさまっ！」

ラーウスさまはこうやって、小さなことでわたしを困らせてくれたけれど、それは決して嫌なことではなかった。むしろ、なんだか特別に扱われているような気がして、嬉しかった。

あとは、そうそう、王妃さまと二人つきりでお茶会を開きました。周りには反対されたのだけど、王妃さまの『母娘の交流を邪魔するの？』の一言で黙らされたようだった。

王妃さまのお茶会は、とても楽しかった。ラーウスさまがおっしゃっていたように、王妃さま手ずからのお茶はとても美味しく、お腹がたぶたぶになるほど飲んで、笑われた。

そうして、お話上手でもあり、聞き上手でもある王妃さまに乗せられて、幼い頃のあるあれこれを話してしまっていた。

最初はあまりのお転婆振りに驚いたように目を丸くしていたけれど、最後のあたりはお腹を抱えて笑っていた。

おっとりしたラーウスさまにはわたしみたいなのがちょうどいいとおっしゃってくださいたけれど、ラーウスさまっておっとりしているとは思えないのですけど。どちらかというと、ラーウスさまに振り回されていますと言えば、王妃さまはまた驚き、わたしだからこそ、わがままが言えているのね、と言われた。

ルークスさまとのやりとりや、他の人とのやりとりを思い返してみれば、そうなのかもしれない。

そういえば、ラーウスさまは人嫌いと聞いていたけれど、父さんと普通に話していた。……あれ、父さんも獣人だから、人とは言えないのかしら？

ラーウスさまの人嫌いというのも、わたしにはイマイチ、実感がない。

本当に嫌いなのではなくて、幼い頃、なにか嫌な目に遭ったのかもしれない。

「あの、お義母さま」

「なあに？」

「ラーウスさまは人嫌いと聞きますけれど、なにか理由があるのですか？」

「ああ、あの子の人嫌いは、特に理由はないと思うのよね」

「え？」

「たぶんだけど、あの子は臆病なところがあるでしょう？」

「ええ」

そう言われてみれば、ラーウスさまは臆病なところがあるかもしれない。

「自分で制御仕切れない魔力を抱えているから、それがいつ、暴走して、そのせいで人を傷つけるかもしれないから、人を避けているような気がするの」

「そう言われてみれば、そうかもしれません」

今はわたしが側にいるから落ち着いているけれど、初めて会った時は、触れただけで切れてしまいそうな気配をしていたのは、その

せいだったのかもしれない。

「今はずいぶんと落ち着いているのは、あなたのおかげね、ルベル。ありがとう」

「いえっ、わたしはお礼を言われるようなことはなにも」

「いいえ。あの子を受け入れられる人は、あなたしかいないし、むしろ、あの子を受け入れてくれて、ありがとうと言いたいのですよ」

「お義母さま……」

お義母さまに、自分が獣人であることを隠しておくのが嫌で、お茶会の最初に話をして、驚いていたけれど、納得したように受け入れてくれた。それだけでも嬉しいのに、そんなことを言われて、思わず、涙ぐんでしまった。

「まあまあ、ルベル。あなたを泣かせたくて、お礼を言ったわけではないのに」

「いえ、すごく嬉しくて……。ごめんなさい、泣くつもりはなかったんです」

王妃さまはわたしの頭を撫でた後、いい匂いのするハンカチで涙を拭いてくださった。

「ふふっ、ルベルからは甘くていい匂いがするわ」

「これ、ウイケウスの花から取った香油なんです。ラーウスさまが作ってくださいましたんです」

「まあ、あの子、そんなことができるの？ 素敵ね！ あたくしも専用の香油が欲しいわ」

「分かりました。ラーウスさまに伝えておきますね。お義母さまはなんのお花が好きですか？」

「そうねえ、ルベルが使ってる香油と同じ物を使ってみたいわ」

「はい、伝えておきます」

こうして無事にお茶会は終わり、ラーウスさまに王妃さまからの伝言を伝えると、嬉しそうに笑った。

「やはり母上もウイケウスの花の匂いを気に入ったんだね」

「はい。同じ香油が欲しいとおっしゃっていました」

「分かった。ルベル用の香油はまだあるよね？」

「はい」

「ルベル、私にいい考えがあるんだけど」

出た、ラーウスさまのお得意の言葉！

「ウイケウスの花を増やすために、この香油を一部の貴族に売ろうと思うんだ」

「え……？」

「貴族社会からこの香油が広まれば、人間でも、獣人でも、付けていても不思議はなくなると思わないかい？」

「ええ、そうですね……」

そんなに上手くいくのかしら？

「まずは母上に渡した上で、相談しようと思っていたんだけど、どうだろうか」

「この匂いがするから獣人だと分からないようにするためですか？」

「そう、そのとおり」

今のわたしは、乾燥したウイケウスの花を煎じた物から解放されている。毎朝、あれを煎れて飲むという煩わしさがなくなって、助かっていた。他の獣人は、わたしと違って週に一度程度でよいとは

いえ、ウイケウスの花を乾燥させる工程などを思えば、こちらの方がいいかもしれない。

「今は私が魔法で精油を作っているけれど、実はルベルのお父上と手紙のやりとりをして、やり方を伝えただが、向こうでも精油を作るのに成功したようなんだ」

「ああ、それでこの間、あんなに喜んでいたんですね」

月に一度程度、ラーウスさまとともに日帰りでアウリスに行っているのだけど、父さんがなにか興奮気味に話をしていたのを見た。

「乾燥したウイケウスの花を売って生計を立てているところに、私が香油を売り始めたらまずいだろう？ だから、お父上に技術を伝えて、代わりに製造してもらおうように手配したんだ」

「そんなことを……」

「ちよつとまだ試行錯誤の段階みただけど、上手くいっているみたいだよ」

確かに、町の人たちに乾燥したウイケウスの花を売って生計を立てている身としては、代わりのものが出てきたら、それはそれで困ってしまう。だって、どう考えたって、香油を嗅ぐ方が遙かに楽なんだもの。

「とはいえ、香油の安定供給にはまだまだ時間が掛かりそうだし、なによりも最初は貴族に売っていきこうとしているから、高めの値段設定にしようと思っているんだ」

「そう……なんですね」

「うん。本当は安価で安定供給できるのが一番なんだろうけど、どうしても精油自体がそれほど採れないから、希少価値が高くなってしまう。それに、いきなり変わると、戸惑う人が多いだろう？ な

に「ごともゆつくりとやるのが一番だと思っただ」  
「そうですね」

わたしは今、とても楽をしているから、他の獣人たちも楽ができたらと思っただけれど、受け入れられない人もいるかもしれない。急に変わるより、ゆつくりと。それはそうだ。

「ラーウスさまは色々なことをきちんと考えてくださるんですね」  
「いいや、そんなことないよ。すべてはルベルのためを思っただよ」  
「……ラーウスさま」

そんな甘い言葉を言われたら、照れてしまう。

「ありがとうございます」

「私の方こそ、ありがとうございますと言いたい。ルベルがいなければ、私は私ではなくなっていたかもしれない」

「そんな、大げさな」

「大げさではないよ。日に日に内に溜まっていく魔力を発散できなくて、気が狂いそうだった。この魔力がいつ暴走して、いつ、人を傷つけるか分からなくて、怖かったんだ」

ああ、王妃さまがおっしゃっていたとおりだった。

そう思うと、ラーウスさまのことが愛おしくて、わたしは勤務中にも関わらず、ラーウスさまに抱きついていてた。

「ルベル？」

「わたし、ずっとラーウスさまの側にいますから、大丈夫です」

「うん……ありがとうございます、ルベル」

ラーウスさまもわたしの身体をキュッと抱き寄せて、おでこにキ

スをしてくれた。

そんなこんなの日常を送っているうちに、とうとう、ラーウスさまとの結婚披露宴が行われることになってしまった。

できたら、そんなことはしたくなかったのだけど、めでたいことだからということで王妃さまに押し切られ、披露宴を行うことになった。

騎士の仕事の一貫で、公式の場に出ることはあつたけれど、その場合は警護役だったから気楽だったけれど、今回はいきなりの主役だ。しかも、麗しいラーウスさまの隣に立って人前に入るなんて、とてもではないけれど、勇気がない。

とはいえ、王妃さまが考えてくださったドレスを着れば、それなりに見えてしまうのだから、不思議だ。

ラーウスさまが前におっしゃったとおり、ピウスさまの神殿の周りのケラススの花が満開の中、わたしたちは結婚披露宴を行った。

普段なら、夜はピウスさまのための時間なので、外に出ないけれど、今日は特別で、披露宴は夜に行われた。

神殿の中への立ち入りは招待された人たちだけだったけれど、神殿前の広場は開放されて、屋台も出て、にぎやかなお祭りのようになつていた。

外から聞き慣れない音がすることをいぶかしがったわたしに、ラーウスさまはいたずらそうな笑みを浮かべた。

「外の音、気になる？」

「気になります」

「それなら、見に行こうか」

ラーウスさまに連れられて、神殿のバルコニーから外を見れば、夜空に綺麗ななにかが打ち上がっていた。

「あれはなんですか」

「花火だよ、ルベルは見たことはない？」

「ああ、あれが花火なんですね。初めて見ました！　すごく綺麗です！」

「実はこれを見せたくて、無理を言って、披露宴を夜にしたんだ」  
「ラーウスさま、ありがとうございます！」

バルコニーに出たわたしたちにだれかが気がついたようで、下から声が聞こえてきた。

「ラーウスさま、ルベルさま、おめでとうございます！」

「おめでとうございます！」

花火の音と、おめでとうの歓声とで、広場はとてもにぎやかだった。

ラーウスさまがその声に応えるように手を振っていたので、わたしも倣ってみんなに手を振った。

この世界は、どこまでもやさしい世界で、わたしはとても、嬉しくて、ラーウスさまと顔を見合わせて、笑い合った。

( 婚約破棄から始まるけれど、どこまでもやさしい世界　了 )



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n0372dz/>

---

婚約破棄から始まるけれど、どこまでもやさしい世界

2018年2月11日14時46分発行